

平成26年度  
ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉川大学FD委員会

## はじめに

### —FDの組織的推進をめざして—

玉川大学は、ファカルティ・ディベロップメント（FD）をマイクロ、ミドル、マクロの三層の立場から推進しています。マイクロ・レベルのFDの目的は、教員個々の授業と教授法の開発にあります。通常、多くの大学でFDの名のもとに行われるのがこうした活動です。本学でも、大学FD委員会が中心になって行うFD活動はマイクロ・レベルが中心です。一方、ミドル・レベルは教務主任等によるカリキュラム・プログラムの開発が目的です。教務委員会における全学カリキュラムの見直しや各学部の教務担当者会における専門分野のカリキュラム改善のための作業がこれに該当します。さらに、マクロ・レベルは、管理者による大学組織の教育環境および教育制度の開発が目的です。こちらもミドル・レベルと同様に、そのための具体的なFD研修会等が開催されるわけではありません。現行の大学部長会や大学院研究科長会の一環として定期的に行われる教育研究活動等点検調査委員会などの作業がFD活動に相当します。

ミドル・レベルとマクロ・レベルのFD活動は、その性格上、全学的な視点と学部的な視点が要求されますが、マイクロ・レベルのFDは、長いあいだ各教員の努力義務のように理解されてきました。したがって、ワークショップや研修会の参加についても教員の自主性に委ねられ、学部や全学が一体となって授業や教授法の開発に取り組んできたとは言い難い状況にありました。しかし、平成19年以降、本学では、複数の学部で、また学士課程教育センター※が中心となって積極的に授業改善に取り組んでいます。その具体的な試みがピアレビューであり、センター主催の授業方法改善のための研修会やワークショップの実施です。

今後も引き続き、個々の教員がファカルティの一員として有機的にFDにかかわれる体制を堅持していきたいと考えています。

※学士課程教育センターは平成27年度より教学部教育学修支援課に改組。

大学FD委員会委員長  
教学部長 菊池重雄

# 目 次

## I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会	
(1) 委員会の目的 .....	1
(2) 委員構成 .....	1
(3) 今年度の活動計画および課題 .....	1
(4) 活動状況 .....	2
(5) 活動の成果 .....	4
(6) 今後に向けて .....	4
2. 学部の活動.....	5
3. 教師教育リサーチセンターの活動.....	52
4. ELFセンターの活動.....	55

## II 教員研修

### 新任教員研修会

(1) 研修プログラム内容 .....	60
(2) 配付資料・参考資料 .....	61
(3) 実施の成果 .....	62

## III コア科目およびユニバーシティ・スタンダード科目の「授業評価アンケート」

1. アンケート実施概要 .....	65
2. 集計結果及び公表 .....	65

### 参考資料

1. 大学 FD 委員会の議事内容 .....	96
2. 「授業評価アンケート」用紙.....	98
3. 玉川大学 FD 委員会規程.....	100

### ※本文中の記載内容について

- ・本文中の文字表記については、原文のままとした。
- ・役職名称は、平成 26 年度当時の記載とした。

# I 大学 FD 活動状況と今後の計画

## 1. 大学 FD 委員会

### (1) 委員会の目的

本委員会は、本学教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的としている。また、FD 活動を行う目的を、以下のとおり明確にしている。

- ① 玉川大学の教育理念を実現するため。
- ② 21 世紀の玉川教育を支える教員を育成するため。
- ③ 大学大衆化時代に対応するため。
- ④ 競争優位性（受験生の大学選択等）を確保するため。

### (2) 委員構成

委員等	所属	氏名
委員長	教学部長	菊池重雄
副委員長	学士課程教育センター長	大藤正
委員	FDer	小島佐恵子
委員	文学部	長谷川洋二
委員	農学部	宮田徹
委員	工学部	小倉研治
委員	経営学部	伊藤良二
委員	教育学部	市川直子
委員	芸術学部	田中敬一
委員	リベラルアーツ学部	小嶋正敏
委員	観光学部	小林直樹
委員	通信教育部	松山巖
委員	ELFセンター	ブレット・ミリナー
事務担当	学士課程教育センター	山崎千鶴
事務担当	教師教育リサーチセンター	高橋正彦
事務担当	教学部教務課	片野徹
事務担当	教育企画部教育企画課	大野太郎
事務担当	人事部研修センター	伊従記章

### (3) 今年度の活動計画および課題

昨年度に引き続き、Tamagawa Vision 2020 の Action Plan 2014 に沿って取り組んだ。すなわち、

1. 各分野の学問分野に応じた教授法の研究開発の開始
  - 1) 学外で開催される各種研究会等への参加
  - 2) ラーニング・コモンズ開設に向けた各種研修会の開催
  - 3) ピア・レビューのあり方の見直し
2. 双方向型授業、問題解決型授業（PBL）の研究会発足
  - 1) 学内の PBL 授業の実施状況の調査
  - 2) インターンシップとの連携の検討
3. 全授業科目の成績評価分布を公表する
  - 1) 現状に合った研修会等の開催
  - 2) 他大学の状況の調査
4. FDer の養成プログラムの作成と実施
  - 1) 学外関連研究会等の派遣・参加
  - 2) 本学にあった FDer 養成プログラムの検討
5. 玉川大学教職員 Credo の草稿の作成
  - 1) 本学 Credo の素案の検討

#### (4) 活動状況

<平成 26 年度>

4月5日	TA 研修会 開催
5月9日	第1回大学 FD 委員会 開催
5月27日	研修会「ティーチング・ポートフォリオの意義と作成プロセス」 開催（講師：東京大学 栗田佳代子）
5月31日・6月1日	大学教育学会年次大会（愛知県 名古屋大学）職員派遣
6月7日	河合塾・リアセック主催セミナー「IR による教育改革と連動する、 ジェネリックスキルの「評価」-データの共有化からはじめる教育 改革の進め方-」職員派遣
6月28日	Benesse主催大学シンポジウム2014「学生が成長する教学改革 - 学 びに向かう動機づけの工夫と効果 -」職員派遣
7月1日	科目担当者研修会「大学教育における学修評価の構図 - パフォーマ ンス評価を中心に -」開催（講師：京都大学 松下佳代）
7月11日	第2回大学 FD 委員会 開催
7月12日	大阪大学教育学習支援センター主催「第3回コースデザイン・ワ ークショップ」教員派遣
7月30日	RD 研修会「研究倫理確立に向けた大学・学会の責務・責任ある研 究活動をめざす国際動向と日本の課題-」開催（講師：東北大学 羽 田貴史）
8月19日	RD 研修会「平成 25 年度共同研究成果発表会」開催
8月29日	国立教育政策研究所高等教育研究部主催「学問分野のチューニン グによる学位プログラムの設計-ユタ州立大学と米国歴史学会の 経験から導く政策への示唆 -」教員派遣

9月13日	朝日新聞社教育総合本部主催セミナー「学生の「ことばの力」を向上させるために - 新聞活用事例と新しい授業のあり方とは -」職員派遣
9月18日・19日	日本高等教育開発協会主催「第4回高等教育開発フォーラム」職員派遣
9月30日	教員懇談会「授業準備のあり方」開催（ファシリテーター：経営学部 菊池重雄）
10月10日	教員懇談会「課題の出し方」開催（ファシリテーター：教育学部 小島佐恵子）
10月27日	科目担当者研修会「ファシリテーションと取り入れたグループ学修」開催（講師：通信教育部 田畑忍）
11月14日	第3回大学FD委員会 開催
11月19日	Future Skills Project 研究会主催産学協同就業力育成シンポジウム2014「未来を創る「主体的な学び」を実践する」職員派遣
11月25日	教員懇談会「成績評価はどうしたらいい？」開催（ファシリテーター：文学部 長谷川洋二）
11月29日・30日	大学教育学会課題研究集会（神奈川県 神奈川工科大学）職員派遣
12月7日	初年次教育学会主催初年次教育実践交流会「初年次教育とアクティブ・ラーニング」職員派遣
12月12日	科目担当者研修会 ワークショップ「授業の目標を明確にしたコース・デザイン」開催（講師：経営学部 伊藤良二）
1月16日	第4回大学FD委員会 開催
1月31日	初年次教育学会主催初年次教育実践交流会（授業づくり研究会）職員派遣
2月23日	大学FD・SD 開催
2月28日・3月1日	大学コンソーシアム京都主催「第20回FDフォーラム」教職員派遣
3月4日・5日	大学FD委員会主催「平成26年度新任教員研修会」 開催
3月20日	第5回大学FD委員会 開催 「一年次セミナー」新規担当者研修会 開催
3月25日	ELFプログラム担当者オリエンテーションミーティング 開催

その他、学生による授業評価アンケート、ピア・レビュー、第三者によるシラバス確認などを実施した。授業評価アンケートは、US科目については学士課程教育センターが、各学部開講科目については開講学部が実施した。

また、ピア・レビューについては27件の授業があがり、内22件が全学教職員に提供された。

第三者によるシラバス確認は平成16年度開講科目より実施しており、ある程度定着したと考えてよいであろう。シラバスを前半（履修登録に資するために公開するもの）と後半（履

修登録をした学生のみ見られるもの)に分け、前半については科目開講年度の前年度1月に全科目を確認、後半については春学期科目は前年度の3月、秋学期科目は当該年度の8月に確認している。また、科目の特性により確認する点が異なることから、科目を教育職員免許状取得に関わる科目については教師教育リサーチセンターが、また、それ以外の科目については学士課程教育センターが担当した。

「大学FD・SD」(2月23日開催)においては、久留米大学教授 安永悟先生(初年次教育学会長、日本協同教育学会前会長)より「高等教育における協同学習の意義と有益性」と題して基調講演をいただいた。さらにその後、4件のワークショップを実施した。大学専任教員は出席は必須とした。内3件は①「入門・LTD話し合い学習法」(講師:安永先生)、②「アクティブ・ラーニングの授業デザイン-学生をどう動かすのかを手がかりに-」(講師:京都文教大学 中村博幸先生)、③「ディープラーニングとアクティブ・ラーニングの両立」(講師:新潟大学 加藤かおり先生)で、教員自ら希望のワークショップに参加した。また1件は、聖心女子大学の杉原真晃先生に講師をお願いし、「ルーブリック指標による評価の意義と手順」をテーマとした。このワークショップには各学部の教務主任および教務担当に限って出席することとした。

#### (5) 活動の成果

今年度の活動計画に基づき、活発な取組をすることができた。とくに、他機関が開催する関連研修会等には教員のみならず職員も多く参加し、教職協働を実現すると同時に、教員と職員が同じスタンスに立ってFD活動を推進することができた。

また、前項のとおり、学内においても各種研修会等を開催した。今年度は大学教育棟2014の完成後を見据えた改革に向けた整備、土壌づくりを目的とするところが大きかったが、一定の理解は得られたものと考えている。

ただし、ピア・レビューについては、広い範囲への公開が定着してきているものの、一方で、参観者がいない科目もあった。通常の授業時間内で行なっているため、大学教員が参観しにくい状況があることもわかった。

#### (6) 今後に向けて

次年度においても、他機関主催の関連研究会等には積極的に参加し、関係教職員への情報提供を行いたい。また、学内で開催する研修会等についても多様な内容のものを開催していきたい。とくに、今年度選定された大学教育再生加速プログラムの取組を中心に、ティーチング・ポートフォリオ導入に向けた研修会、アクティブ・ラーニングに関する研修会、ルーブリック指標による評価に関する研修会、非常勤教員対象研修会等を予定している。

また、FDerの養成については、FDer認定教員を中心に養成プログラムを作成、実施していく。その際、各学部からFDerの推薦を受け、候補者を選定してくことも必要であろう。

詳細については、Tamagawa Vision 2020 の Action Plan 2015 に沿って進めていく。

## 2. 学部の活動

平成 26 年度における各学部 FD 活動の状況を一覧にする。

	各学部 FD 委員会 の構成人数	各学部 FD 委員会 の開催回数	学生による授業評価アンケートの実施			学部研修会
			実施時期	専任 対象	公表	
文学部	7 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後*1	全員	学内外 (Web)*2	学内外実施
農学部	7 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内外 (Web)	学内実施
工学部	5 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内外 (Web)*3	学内実施
経営学部	6 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内外 (Web)	学内実施
教育学部 (通信教育 部含)	8 名	4 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内	学内実施
芸術学部	7 名	7 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内	学内実施
リハビリアーツ 学部	6 名	2 回	秋学期終了後	全員	—	学内外実施
観光学部	5 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内	学内実施

\*1: 対象全科目を春学期、秋学期いずれかで 1 回実施（重複実施はせず）。

\*2: 文学部における学生によるアンケート結果の公表は、比較文化学科のみ実施している。

\*3: 学外には総括した内容を Web で、学内には全てを詳細に、報告書冊子で公表している。

※コア科目およびユニバーシティ・スタンダード科目についての学生によるアンケートは別途実施している。

## § 文学部

### 1 FD 活動への取り組み理念・目標

社会の大学に対する期待とニーズの多様化と、大学生の学力低下という現実を受け、大学教育はそれに対応すべく、役割意識と方法論の変革を余儀なくされている。また学生の就労意識の変化に対応した学生へのキャリアないし就職指導も、大学にとって重要性を増している。かかる現状認識の下、文学部では、一人ひとりの教員が文学部の理念や教育目標の実現に向けて意識を高め、職能成長できるような FD 活動を心がけている。そして、一部の教員のみが FD 活動を担うのではなく、全員が主体的に FD 活動に参加し、組織的な FD 活動を実現できるような体制を構築することを目標にしている。

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

文学部長および主任会（教務主任、学生主任、人間学科主任、比較文化学科主任）のもとに、文学部 FD 委員と人間・比較文化両学科の FD 担当（人間学科は FD 委員が兼務）で、文学部 FD 委員会を組織している。

この FD 委員会は、年に 2 回の FD 委員会を招集する他、各学科の学科会あるいは運営委員会等においても定例的に FD 活動の企画・運営に関する事項の審議を行っている。

### 3 平成 26 年度の活動内容

#### (1) 授業設計・成績評価ミーティング（人間学科）

##### ① 概要（目的を含む）

複数教員が授業担当をする諸科目について、とりまとめ役を座長として授業の計画・内容・成績評価に関する合意形成を目的としたミーティングを行なう。

##### ② 到達目標

各科目の授業担当者間において科目の教育目標達成のための合意形成を得ること。

##### ③ 活動内容

授業経験の報告と意見交換、授業改善の提案、成績評価に関する検討、他科目との連携の可能性、教員による授業評価

##### ・「人間学総合セミナー」

平成 26 年度の「人間学総合セミナー」は、平成 25 年度と同様、キャリア形成のあり方をテーマに町田市と連携して準備を進め、PBL（Project Based Learning）を実施した。「伝える」ことと「伝わること」との違いの体得を目標に掲げ、毎回の授業の進め方は、学生たちの進捗状態を踏まえ授業担当者による話し合いで決定した。成績評価も授業担当者による話し合いで行った。加えて、今年度は、11 月 12 日の中間発表も 2 月 10 日の最終発表も町田市役所に出向いて行った。課題に関係する部署の方が出席してくださり、さまざまなご意見をいただくことができた。これによって、より現実的な PBL となったと考える。受講生たちは最終発表に向けて、授業終了後にも関わらず、多くの時間を割いて自主的に発表内容のブラッシュアップを行った。受講生全員が、「伝える」ことと「伝わること」との違いを理解できたので、目標は 100% 達成できたと考える。

・「人間学演習」

各演習において設定したテーマや、担当教員の専門分野に応じて、それぞれの内容、方法により授業を進めた。また、例年通り演習の一環として、ゼミ研修旅行や3年生対象のキャリアセミナーなども実施した（キャリアセミナー実施プログラムについては、キャリアセンター担当者と共同で見直しを行った）。授業の進め方や行事の実施方法、あるいは成績評価のあり方などに関する授業担当者による意見交換は、必要に応じて学科会で実施した。これらのことにより、受講生は人間学的研究を深めるとともに、生涯学習やキャリア計画にとって基盤となる機会をもつことができたと考えられる。

・「名著講読」

年度はじめに、5名の担当者が集まって、前年度の当該授業の反省点や当該年度の授業の計画や評価などについて話し合った。4月下旬には授業の一環として、ミュージアム研修を行い、クラスの学生の親睦をはかるとともに、主体的な学びへのモチベーションを高めることを心がけた。授業終了後、各クラスともに統一方針に従って授業評価を行った。今年度の反省点としては、もっと頻繁に担当者会を開き、情報交換や問題点の共有などの機会を増やすことが望ましかったであろうという点がある。

・「一年次セミナー101」および「一年次セミナー102」

「一年次セミナー」では、担当者4人が当該年度の授業経験の報告を行い、反省点を協議した上で、次年度の授業改善に向けて授業計画を練り、シラバスを作成した。また、各学期の開始前には具体的な授業の進め方や教材について打ち合わせを行い、授業期間中にも適宜協議を行い、授業の改善に努めた。そして各学期の終了後には、授業評価について協議し、合意形成を行った。こうしたFD活動を通じて、1年生が今後の大学生活を送る上で基礎となる能力（レポート作成の方法やキャリア教育など）を取得させることができたため、「一年次セミナー」で掲げた到達目標を十分に達成できたと考える。

・「人間学特殊講義 C」

「人間学特殊講義 C」では、他学部の教員も含めた5人の教員が、同じテーマ（「意思決定」）についてそれぞれの専門分野の観点から授業を展開するというオムニバス授業を行ったが、授業の進め方等については担当教員と意見交換を行い、また学期末に成績評価について話し合いを行った。学生は多角的な観点からテーマについて知見を深めた上で自らの意見を形成することができ、本講義の到達目標は十分達成できたものとする。

・「人間学特殊講義 D」

当該科目は他学部他学科の教員5名によるオムニバス形式の授業であったため、全員が集まってミーティングを開くことは時間的・物理的に困難であったが、その代わりに事前にあらかじめ、取りまとめ役である人間学科教員がメール等を通じて、授業の計画、趣旨、概要、評価方法、留意点などについて意見を集約し、話し合い、意思統一をはかった。授業終了後、全教員が統一方針に従って授業評価を行った。ただ、もし可能であれば、全教員が同席して直接意見交換をはかれるような対面式

の会合の機会が持てれば望ましかつたであろう。(本授業は、「人間と芸術」という統一テーマのもとで他学部他学科の教員と連携し合つた授業であつたため、学生たちがさまざまな芸術のジャンルにじかに触れることができ、有意義な学びの機会となつた。)

④ 評価

上記授業において、授業展開のための合意形成と、今後に向けての指針、さらに学生による授業評価の点において、掲げた目標は 100%達成できた(科目毎の詳細は②活動内容の記載事項参照)。

(2) 授業評価アンケート(比較文化学科)

① 概要(目的を含む)

比較文化学科専門科目群全科目について、授業評価アンケートを実施した。個々の教員が、担当する授業を点検し、改善するための指標を得ることが目的である。

② 到達目標

教員の意図と学生の受け止め方の間にどのような差があるかを検証し、次の学期あるいは次の年度の授業改善に具体的に生かす。

③ 活動内容

実施時期：今年度は春秋両学期に開講している科目は春学期末に、秋のみの科目は秋学期末に実施した。

対象科目：比較文化学科の全科目(ゼミと教職関連を除く)

集 計：集計はクラス別、全体の2レベルで行つた。

フィードバック：結果は大学ホームページ上で公開すると共に、各教員には、授業改善に資するため、授業ごとの集計結果を返却する。

④ 評価

予定通り実施した。ホームページへの掲載は4月以降になる。

(3) 学外セミナー等への教員派遣

① 概要(目的を含む)

他大学でのFD活動の取り組み方法やその成果についての情報を収集し、文学部のFD活動に活かすため、学外で開催されるセミナーに教員を派遣する。

② 到達目標

文学部専任教員の20%を何らかの学外FD研修会に派遣する。

③ 活動内容

1. 平成26年度 教育改革ICT戦略大会

開催日：平成26年9月3日～9月5日

派遣：4名(人間学科教員3名、比較文化学科教員1名)

2. 大学コンソーシアム京都主催 第20回FDフォーラム

開催日：平成27年2月28日～3月1日

派遣：3名(比較文化学科教員3名)

3. 京都大学高等教育研究推進センター主催 第21回大学教育研究フォーラム

開催日：平成27年3月13日～14日

派遣：4名（人間学科教員4名）

④ 評価

参加者数延べ11名は学部専任教員の42%であり、数値目標は達成した。

(4) 授業参観

① 概要（目的を含む）

文学部教員の授業力向上のため、授業参観を実施。授業を公開する教員は、参観者からの意見を聞くことによって改善に役立て、参観した教員は、他の教員の授業運営の方法を参考に自分の授業改善に結びつける。

② 到達目標

参観を通して授業実施者と参観者のそれぞれが自らの長短所を自覚し、授業力の向上の方法論的手がかりを得る。

③ 活動内容

実施時期：秋学期

実施内容：人間学科「人間学総合セミナー」

学外3名参観（博報堂2名；読売新聞1名）

人間学科「人間学特殊講義D」

教員1名参観

比較文化学科「コミュニケーション論入門」

職員1名参観

④ 評価

授業参観者数に目立った増減はないが、参観者数が少ない状況に変わりはない。一昨年度より、折に触れて広報活動も行っているため、参観者数が伸びない理由は他にありと思われる。今後分析をし、必要な措置を講ずる必要があるだろう。

4 昨年度（平成25年度）に提案された予定・課題の達成度について

今年度の目標は、一通りすべて達成することができたが、学部内、学科内カリキュラムの変更に対してFDレベルでどの程度対応できたかについては、明らかではない。今年度は予定された課題以外では目立った活動はなかった。

5 今後（平成27年度以降）の予定・課題について

まずは従来の活動の継続と活性化が基本となる。各教員が担う学内業務も多様性を増しているが、学部内、学科内および複数担当授業内でコンセンサスをとる機会を捻出しながらしっかりと対応していきたい。特に、近年関心の高まりをみせているアクティブ・ラーニングを取り入れた授業改善については、文学部両学科がこれまで培ってきた授業改善を踏まえて積極的に取り組んでいく。

## § 農学部

### 1 FD 活動への取り組み理念・目標

玉川大学の教育理念に基づいた教育を実現し、さらなる教育と授業改善、学生理解の向上を達成するため、大学 FD 委員会と協調しつつ、全ての教員に研修会への積極的な参加を促し、教員相互の授業参観を推進する。また、専任教員および非常勤講師は学生による授業評価を実施し、授業改善への意識を高める。学部内では、主任会の構成メンバーを中心に各教員との情報交換に努める。これらを通して、教員は自らの資質向上に対する意識をさらに高め、社会に貢献できる卒業生を農学部として育成するために組織的な FD 活動を推進する。

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

農学部長、生物資源学科主任、生物環境システム学科主任、生命化学科主任、学生主任、教務主任、および大学 FD 委員の計 7 名が中心となり、目標達成にあたる。

### 3 平成 26 年度の活動内容

#### (1) 研修会

##### ① 概要（目的を含む）

学部内での研修会は 1)「農学部ハラスメント防止研修会(桑島英美弁護士)」、2)「農学部心に不安を抱える学生指導研修会(神谷路子先生, 健康院カウンセラー)」3)「新課程 2 年目の高等学校理科(生物・化学)の教育内容と大学入試の傾向(村杉拓夢先生, 小林謙太郎先生, 城南予備校講師)」さらに 4)「全国 365 高校ヒアリングからみた高校生の基礎学力の状況と新課程(真柄信治先生, 押山均先生, (株)ナガセ東進ハイスクール)」を実施した。

1)、2)、4)については、農学部全教員を、3)については、入試問題作成に関わる全ての教員を対象として実施した。それぞれ教育活動の円滑な実施と、大学生活における学生の適切な指導および支援、入試問題の適正な作成に活用することを目的とした。

##### ② 到達目標

1)については、教員と学生間または教職員間のハラスメント防止、2)については、不安を抱える学生の理解と対応、3)は、平成 28 年度受験生に対する入試問題作成の適正化に向けて、4)については高校生の基礎学力の把握と初年次教育への対応の理解を到達目標とした。

##### ③ 活動内容

1)は、大学で起きているセクシャルハラスメント、アカデミックハラスメント、パワーハラスメントの特殊性と具体事例について講義していただき、ハラスメントの正確な理解と被害者または加害者にならないための心構えを聞いた。2)についてはカウンセラーから見た最近の学生の特徴と対応についてお話しいただいた。3)は高等学校の理科が、新課程になり初めての入試を終えた段階で、センター試験を含めた各大学での出題傾向を話してもらい、今後の入試問題作成への方策について議論した。4)は

近年の高校ヒアリングからまとめた高校生の基礎学力の現状と教育課程の移行について話してもらい、さらに入学前学習の効果と大学での初年次指導について情報交換をした。

#### ④ 評価

1)については、具体的なハラスメントの事例から学生との接し方や指導における留意点を確認できた。2)は欠席が多かったり、トラブルを起こしやすい学生への対応の仕方と、カウンセラーや保護者、教員とが協力して対応するコンサルテーションについて理解を深めた。3)では高等学校理科の学習内容が非常に増大したことによって高校の指導現場でも混乱があり、入試問題の範囲や難易度に留意が必要であることが理解できた。4)については、大学初年度の基礎学力向上を促進するため、入学前学習やプレースメントテストなどの仕組みの整備と、それを活用した大学教育の必要性を認識した。

### (2) 学生による授業評価アンケート

#### ① 概要（目的を含む）

授業改善のために、農学部科目担当の教員（専任および非常勤講師）に協力を求め、講義科目と実験・実習科目の受講生 30 名以上の必修科目を中心に、授業評価アンケートを実施した。

#### ② 到達目標

授業の状況把握により講義技法や情報伝達の仕方、教育設備の向上に活用し、授業改善を達成する。また、大学 HP 上に結果を公開することで受験生および関係者に対し、授業の健全性をアピールする。

#### ③ 活動内容

春学期 60 クラス、4,552 名、秋学期 49 クラス、3,771 名に対して授業評価アンケートを実施した。

アンケートを集計後、結果を各教員に送付した。さらに、大学 HP に学部、学科単位での集計結果を公開した。また、アンケートの記述欄を活用するために原本を各担当教員へ返却した。

#### ④ 評価

今年度は授業評価アンケートの改訂を行い実施した。大学では単位の実質化を目指し 16 単位キャップ制などを導入してカリキュラム改訂を行っており、それに即したものである。学生の授業時間外での学修時間や、授業の進行速度、難易度などについてアンケート項目を追加した。また、実験・実習科目の内容に合わせたアンケート項目を設定した。アンケート結果は概ね良好な傾向を示した。学科間または授業間で、各項目に若干の変動がみられ、授業改善の一定の方向性を各担当教員に示すことができたと考える。アンケートの改訂に伴い、記述欄の項目も増やした。記述時間を配慮したこともあり、記述は大幅に増えた。様々な意見が書かれていた。

表. 平成 26 年度の授業評価アンケート集計結果 (3 学科のアンケート実施科目すべて)

(春学期-講義科目)

分野	設問	平均値	強く思う	ややそう思う	どちらとも	あまりそう	全くそう	無効
			5	4	3	2	1	
I	1 あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか	3.8	18.7%	47.9%	28.3%	4.2%	0.9%	4
	2 あなたがこの授業/回分の授業外に学習(予習・復習・課題)した時間はどれくらいですか	2.9	9.0%	16.2%	38.7%	28.7%	7.4%	7
	3 この授業のシラバスはあなたの受講に役立ちましたか	3.3	12.1%	28.2%	44.9%	10.8%	4.0%	12
	4 あなたはこの授業の目標を把握できていましたか	3.6	16.8%	38.0%	37.0%	6.1%	2.1%	12
II	5 授業はシラバスに沿って進められましたか	3.8	22.1%	39.6%	33.6%	3.1%	1.6%	15
	6 授業の進行速度は適切でしたか	3.7	25.1%	35.2%	28.4%	9.7%	1.7%	46
	2)早かった 1)遅かった					85.6%	14.4%	127
	7 授業内容の難易度は適切でしたか	3.6	20.7%	33.8%	31.7%	12.0%	1.8%	52
	2)難しかった 1)易しかった					97.9%	2.1%	175
	8 教員の声や話し方は明瞭で聞き取りやすかったか	3.8	30.5%	32.8%	25.3%	8.6%	2.7%	13
	9 教科書、プリント、参考文献などが授業の理解に役立ちましたか	4.0	35.4%	35.1%	23.8%	4.2%	1.5%	13
	10 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)や板書が授業の理解に効果的でしたか	3.9	33.1%	34.6%	25.5%	4.6%	2.3%	19
	11 授業内容は系統的によく整理され準備されていましたか	4.0	32.7%	36.9%	25.1%	3.9%	1.4%	17
	12 課題、レポートの量は授業内容を理解する上で適切であったか	3.7	24.2%	32.5%	35.7%	6.0%	1.6%	63
	2)多かった 1)少なかった					77.1%	22.9%	97
	13 教員は効果的に学生の参加(質問、発言、自主学習)を促しましたか	3.8	25.8%	35.4%	31.6%	5.8%	1.5%	8
	14 教員は受講生の反応を確かめながら授業を進めていましたか	3.8	28.3%	36.8%	28.1%	5.2%	1.7%	6
	15 教員は熱意を持って授業していましたか	4.1	38.2%	36.4%	22.6%	2.1%	0.7%	16
	III	18 この授業の内容をよく理解できた	3.6	17.7%	39.2%	34.2%	7.2%	1.7%
19 この授業の内容に興味・関心が持てた		3.8	27.8%	37.9%	27.2%	5.2%	1.8%	10
20 自分で調べ、考える姿勢が身についた		3.7	19.3%	36.0%	37.0%	6.1%	1.6%	13
21 この授業を通して新しい知識や考え方が習得できた		3.9	28.0%	42.7%	25.0%	3.0%	1.2%	10
総合評価		平均値	強く思う	ややそう	どちらとも	あまりそう	全くそう	無効
IV	22 この授業を受講して有意義であった	3.9	31.2%	37.4%	26.0%	3.8%	1.7%	28

(春学期-実験・実習科目)

分野	設問	平均値	強く思う	ややそう思う	どちらとも	あまりそう	全くそう	無効
			5	4	3	2	1	
I	1 あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか	4.3	42.7%	45.8%	10.2%	1.1%	0.2%	3
	2 あなたがこの授業/回分の授業外に学習(予習・復習・課題)した時間はどれくらいですか	3.5	25.6%	22.4%	31.5%	17.0%	3.6%	6
	3 この授業のシラバスはあなたの受講に役立ちましたか	3.7	22.8%	34.9%	32.9%	6.9%	2.4%	3
	4 あなたはこの授業の目標を把握できていましたか	4.0	24.4%	52.5%	21.0%	1.9%	0.2%	5
II	5 授業はシラバスに沿って進められましたか	4.1	35.5%	39.2%	22.0%	2.1%	1.1%	6
	6 実験・実習内容の量は適切でしたか	3.8	25.4%	42.7%	23.0%	7.9%	0.9%	14
	2)多かった 1)少なかった					95.7%	4.3%	32
	7 実験・実習内容の難易度は適切でしたか	3.8	20.9%	46.6%	24.3%	7.5%	0.8%	14
	2)難しかった 1)易しかった					88.9%	11.1%	37
	8 実験や実習の方法や作業の説明は明瞭で分かりやすかったか	4.0	29.1%	42.9%	23.9%	3.7%	0.3%	6
	9 教科書、プリント、参考文献などが授業の理解に役立ちましたか	4.0	32.0%	41.4%	23.2%	2.8%	0.7%	11
	10 映像視覚教材(パワーポイントなど)や実験材料が授業の理解に効果的に活用されていましたか	3.9	28.8%	40.1%	25.5%	4.1%	1.6%	8
	11 実験・実習がスムーズに進められるよう、材料や器具が十分準備されていましたか	4.2	43.4%	38.7%	16.1%	1.5%	0.3%	4
	12 課題、レポートの量は授業内容を理解する上で適切であったか	3.8	25.0%	40.6%	24.9%	7.7%	1.8%	24
	2)多かった 1)少なかった					100.0%	0.0%	34
	13 教員は効果的に学生の参加(質問、発言、自主学習、実験・実習への取り組み)を促しましたか	4.1	34.5%	42.1%	21.2%	1.9%	0.3%	8
	14 教員は受講生の反応を確かめながら授業を進めていましたか	4.1	32.3%	45.1%	20.5%	1.7%	0.3%	5
	15 教員は熱意を持って授業していましたか	4.2	41.6%	38.7%	17.8%	1.6%	0.2%	5
	III	18 この授業の内容をよく理解できた	4.0	25.8%	52.8%	20.0%	1.2%	0.2%
19 この授業の内容に興味・関心が持てた		4.2	37.5%	42.8%	17.4%	2.0%	0.2%	6
20 自分で調べ、考える姿勢が身についた		4.2	39.5%	42.7%	15.7%	1.8%	0.2%	7
21 この授業を通して新しい知識や考え方が習得できた		4.3	44.3%	42.6%	11.8%	0.8%	0.4%	7
総合評価		平均値	強く思う	ややそう	どちらとも	あまりそう	全くそう	無効
IV	22 この授業を受講して有意義であった	4.3	44.6%	40.0%	13.4%	1.2%	0.8%	14

(秋学期-講義科目)

分野	設問	平均値	強く思う	ややそう思う	どちらとも思えない	あまりそう思わない	全くそう思わない	無効回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか	3.8	20.3%	49.4%	25.7%	3.5%	1.0%	1
	2 あなたがこの授業1回分の授業外に学習(予習・復習・課題)した時間はどれくらいですか	2.9	7.6%	19.2%	35.1%	29.2%	8.9%	2
	3 この授業のシラバスはあなたの受講に役立ちましたか	3.5	13.7%	32.2%	43.5%	8.5%	2.1%	4
	4 あなたはこの授業の目標を把握できていましたか	3.8	18.8%	43.9%	32.4%	3.7%	1.2%	6
II	5 授業はシラバスに沿って進められましたか	3.8	21.5%	40.8%	33.3%	4.0%	0.5%	5
	6 授業の進行速度は適切でしたか	3.9	23.3%	38.0%	27.1%	6.0%	0.6%	27
	7 授業内容の難易度は適切でしたか	3.8	25.0%	37.8%	27.8%	8.4%	1.0%	42
	8 教員の声や話し方は明確で聞き取りやすかったか	4.0	32.5%	38.5%	22.8%	4.6%	1.6%	9
	9 教科書、プリント、参考文献などが授業の理解に役立ちましたか	4.1	37.1%	38.0%	20.4%	3.4%	1.1%	6
	10 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)や板書が授業の理解に効果的でしたか	4.1	36.8%	38.1%	20.3%	3.4%	1.4%	5
	11 授業内容は実務的により整理され準備されていましたか	4.0	33.1%	41.0%	22.4%	2.7%	0.8%	9
	12 課題、レポートの量は授業内容を理解する上で適切であったか	3.9	27.2%	36.6%	31.7%	3.3%	1.1%	39
	13 教員は効果的に学生の参加(質問、発言、自主学習)を促しましたか	3.8	26.4%	36.2%	31.0%	5.1%	1.3%	5
	14 教員は受講生の反応を確かめながら授業を進めていましたか	3.9	29.2%	39.1%	26.1%	4.3%	1.3%	6
	15 教員は熱意を持って授業していましたか	4.1	38.0%	38.0%	21.8%	1.4%	0.7%	6
	16 教員は授業の目標を把握できていましたか	3.8	21.3%	44.2%	28.0%	5.2%	1.4%	7
	17 この授業の内容に興味・関心があった	3.9	29.7%	40.2%	24.3%	4.0%	1.8%	8
18 自分で調べ、考える姿勢が身についた	3.8	23.2%	37.7%	32.7%	4.9%	1.5%	9	
19 この授業を通して新しい知識や考え方が習得できた	4.0	31.3%	42.4%	22.7%	2.4%	1.2%	11	

総合評価		平均値	強く思う	ややそう思う	どちらとも思えない	あまりそう思わない	全くそう思わない	無効回答数
IV	22 この授業を受講して有意義であった	4.0	34.5%	38.6%	22.8%	2.7%	1.5%	27

(秋学期-実験・実習科目)

分野	設問	平均値	強く思う	ややそう思う	どちらとも思えない	あまりそう思わない	全くそう思わない	無効回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか	4.3	43.2%	45.4%	10.1%	1.2%	0.1%	2
	2 あなたがこの授業1回分の授業外に学習(予習・復習・課題)した時間はどれくらいですか	3.5	24.6%	26.2%	32.2%	13.5%	3.5%	1
	3 この授業のシラバスはあなたの受講に役立ちましたか	3.7	22.3%	35.1%	33.9%	7.4%	1.3%	3
	4 あなたはこの授業の目標を把握できていましたか	4.0	27.7%	49.9%	20.3%	1.8%	0.4%	6
II	5 授業はシラバスに沿って進められましたか	4.0	34.2%	35.1%	26.5%	3.1%	1.2%	2
	6 実験・実習内容の量は適切でしたか	3.9	30.5%	43.1%	18.3%	6.9%	1.3%	9
	7 実験・実習内容の難易度は適切でしたか	3.9	26.0%	44.2%	23.1%	5.5%	1.1%	18
	8 実験や実習の方法や作業の説明は明確で分かりやすかったか	4.0	34.6%	42.0%	17.9%	4.6%	0.8%	5
	9 教科書、プリント、参考文献などが授業の理解に役立ちましたか	4.1	36.2%	40.1%	19.5%	3.3%	0.8%	2
	10 映像視覚教材(パワーポイントなど)や実験材料が授業の理解に効果的に活用されていましたか	3.9	29.3%	38.4%	26.3%	4.4%	1.6%	3
	11 実験・実習がスムーズに進められるよう、材料や器具が十分準備されていましたか	4.2	44.3%	36.9%	16.3%	2.1%	0.4%	4
	12 課題、レポートの量は授業内容を理解する上で適切であったか	3.9	30.6%	38.8%	23.8%	5.4%	1.4%	12
	13 教員は効果的に学生の参加(質問、発言、自主学習、実験・実習)を促しましたか	4.1	38.3%	38.8%	19.4%	3.1%	0.5%	6
	14 教員は受講生の反応を確かめながら授業を進めていましたか	4.1	38.4%	40.6%	16.9%	3.2%	0.9%	5
	15 教員は熱意を持って授業していましたか	4.2	45.4%	37.2%	14.3%	2.7%	0.4%	6
	16 この授業の内容をよく理解できた	4.0	28.9%	50.4%	18.1%	1.9%	0.7%	2
	17 この授業の内容に興味・関心があった	4.2	39.3%	41.4%	15.7%	2.7%	0.8%	5
18 自分で調べ、考える姿勢が身についた	4.2	40.2%	41.8%	15.8%	1.9%	0.4%	3	
19 この授業を通して新しい知識や考え方が習得できた	4.3	46.7%	41.2%	10.8%	1.2%	0.1%	4	

総合評価		平均値	強く思う	ややそう思う	どちらとも思えない	あまりそう思わない	全くそう思わない	無効回答数
IV	22 この授業を受講して有意義であった	4.3	49.2%	36.0%	12.9%	1.2%	0.7%	8

(3) 教職員を対象とした公開授業

① 概要 (目的を含む)

教員の講義力・教育力向上を目指し、教員相互の授業参観を実施した。

② 到達目標

公開授業の実施意義を各教員が理解するとともに、教授方法などを参考とする。

③ 活動内容

教員相互の授業参観を実施すべく、全学の専任および非常勤の教員に対して授業を公開した。授業を公開した教員は3学科で合計3名とした。

#### ④ 評価

農学部としては今回が4年目の活動であったが、参観した教員数は極めて少数であった。この活動の定着のためには教員相互の啓蒙的意識の高揚が必要であり、実施に際しての周知、実施方法の検討が求められる。授業評価アンケートの結果と連動させて、授業参観を実施するなど方策を考える。

#### 4 昨年度（平成25年度）に提案された予定・課題の達成度について

今年度、新入生ガイダンス時に実施したプレースメントテストは、昨年と異なり東進ハイスクールの作成した問題で行った（生物資源学科；生物と英語、生物環境システム学科；英語、生命化学科；化学）。東進ハイスクールには入学前学習の教材を提供してもらい（費用は受益者負担）、高校から大学入学時における学習補強をお願いしている。研修会でも入学前学習と大学初年次教育への移行に関する議論があり、基礎学力向上への情報収集と対策を考えることができた。APからCP、DPへと繋がる方針をより明確化していくためにも、常に点検を繰り返し、学生の学力向上へと結びつけていくことが必要であると考えた。

一方で心に不安を抱えた学生は顕在化してきており、研修会でも就職活動や社会に出る直前になって大きな不安を抱え、大学生活や日常の活動に様々な影響を与えてしまう事例が多くなっていることを聞いた。大学での学びを確保するために必要な方策と対応を、部署間で連携し進めていくコンサルテーションの有効性を認識することができた。

農学部の授業評価アンケートは今年度からアンケート内容を改訂し、講義科目と実験・実習科目とを分けて、必修科目を中心に実施できた。アンケート項目が増えて22項目、記述欄を4項目とした。学生の授業外での学修時間を質問項目に加え、学生がどれくらい予習復習を行っているか把握できるようになった。平成25年度からの新カリキュラムや時間割設定では学生の学修時間確保の適正化を念頭においており、各科目での取り組みを知ることができると考えられる。記述欄の記述は質問内容を具体化し、記述時間を確保したことで増加した。学生の様々な意見が書かれており、参考になると思われる。このアンケート結果を以後の授業改善にどのように反映させていくか、全体的な議論が行われていくことで、今回のアンケート改訂を有意義なものとしたい。

#### 5 今後（平成27年度以降）の予定・課題について

- ・ 新カリキュラムの適切な運営と点検
- ・ 「農学部生のためのキャリア形成支援プログラム」の策定
- ・ 授業評価アンケートの授業への還元方法の検討
- ・ 授業評価アンケートの公開方法および範囲の検討
- ・ 各種研修会（学内、学外）への参加への啓蒙的活動
- ・ 教員相互の授業参観の組織的な取り組みと参加者の増員の施策
- ・ 基礎学力不足の学生の把握と入学後の適切な指導対応
- ・ 大学院FD委員会との連携強化

## § 工学部

### 1 FD 活動への取り組み理念・目標

工学部全教員が Tamagawa Vision 2020 を共有して、「全人教育の下、人間力を備えたモノづくりの実践的技術者を育成する」という工学部の理念・目標に向けて教育内容・教育環境の向上をはかることを継続している。

平成 25 年度入学生に適用されたカリキュラム改定では、入学生の学力不足対応のため 1 年次には専門科目を入れずに基礎教育を 3 学科共通で用意した。同時に平成 25 年度入学生から 16 単位キャップ制および GPA 警告制度・同卒業要件が揃って適用された。さらに平成 26 年度入学生に適用されたカリキュラムでは開講科目数が削減された。

このような状況の下、理念・目標の現状に即した具現化のため、現況に対する適切な対応を確保するため、16 単位キャップ制および GPA による新警告制度の下における学生の勉学状況を分析し、その結果と課題を把握し共有するとともに、より効果的で充実した指導の在り方を共有することにした。

さらに、各学科の就職の現況と課題を共有し、今後の効果的指導につなげることにした。

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

平成 20 年度末までは工学部 FD 活動の多くは ISO9001 教育マネジメントシステムの活動によるものであった。工学部 3 学科の内、機械情報システム学科は平成 21 年度よりこのシステムの運用から離脱し、簡易化した PDCA のサイクルの運用を継続してきた。平成 26 年度は機械情報システム学科が ISO9001 の運用に復帰し、マネジメントサイエンス学科およびソフトウェアサイエンス学科とともに工学部全 3 学科が揃って ISO9001 のシステムを運用することになった。

この結果、工学部としては、全学科において ISO9001 のシステムの中で FD 活動の多くが実施される形態となった。学生による授業評価アンケート、教員による授業改善計画・実行・点検、授業参観など、授業評価総合検討会および主任会、教務担当者会で運営している。

現状では毎年のカリキュラム改定および 16 単位キャップ制・GPA 警告制度への移行等、直近の課題が多いため、平成 24 年度以来、全専任教員参加による工学部 FD 研修会の年 2 回開催を継続している。

### 3 平成 26 年度の活動内容

#### (1) 工学部 FD 研修会

##### ① 概要（目的を含む）

第 1 回 工学部 FD 研修会：平成 26 年 9 月 11 日（木） 9:00～10:00

「警告を受けた学生に対する各学科の指導事例（好結果をもたらした事例と課題が残った事例）」

「16 単位キャップ制・GPA 警告制度下における学修状況分析結果」

第 2 回 工学部 FD 研修会：平成 27 年 3 月 12 日（木） 9:00～10:00

「16 単位キャップ制・GPA 警告制度下における学修状況分析結果および対応策」

### 「就職の現状と課題」

#### ② 到達目標

第1回：今後の方針を学部として共有する。導入以来2年目となった16単位キヤップ制下の学生の学修状況等分析結果および課題を共有する。警告を受けた学生に対して、好結果をもたらした事例と課題が残った事例を共有する。

第2回：16単位キヤップ制下の学生の状況、GPA警告制度の状況分析結果報告をもとに、具体的な課題と指導対応方法を共有する。さらに、就職の現状と課題を共有する。

#### ③ 活動内容

- ・「警告を受けた学生に対する各学科の指導事例（好結果をもたらした事例と課題が残った事例）」について報告（各学科主任）
- ・16単位キヤップ制・GPA警告制度下の状況分析結果の学部全体・各学科についての報告（教務主任・各学科教務担当）
- ・数学・物理についての学修支援の報告（数学・物理支援指導担当）
- ・警告を受けた学生の動向と今後の指導（教務主任）
- ・就職の現状と課題の報告（各学科就職担当）
- ・授業評価アンケートの評価の年次変化・学年別平均値（FD担当）
- ・学外FDフォーラム等参加報告（参加者）

#### ④ 評価

状況分析結果および今後の対応方針を共有し、工学部のあり方や指導に効果的に反映できたものとみられる。工学部ではFD研修会終了後に「発表資料+発表者による解説」から成る記録冊子を作成し、必要に応じて学部内にて、主任を経由して利用可能となっている。

特に適用開始2年目の16単位キヤップ制・GPA新警告制度・改定カリキュラムの下における、以下の学生の学修成果情報を共有できたことは、今後の対処に有益である。

16単位キヤップ制およびGPA警告制度によって向上した、1年生のGPAのレベルはおおよそ維持されている。二極化の傾向もみられる。1年次終了時までには4人に1人が警告1回あるいは2回となっている。また、2年生終了時までには警告2回の学生が1割を超えており、7人に1人が自主退学および警告3回による退学に至っている。警告2回に至っている学生に対してはこれまで以上に注意を払い、指導を徹底する必要があるが生じている。

警告を受けた学生への指導として次の対応・対策が提示され、認識・共有できた。科目担当者の努力として、学生のレベルを考慮した課題・演習問題の用意、小テスト・中間テストの実施、レポートの添削・返却、良いレポートの紹介。履修指導として、履修取り消し制度の活用、サマー／ウインターセッションの活用、F評価科目の再履修、欠席が多い学生に対する早期の面談実施。

## (2) 学生による授業評価アンケート

### ① 概要（目的を含む）

工学部では授業内容・方法・スキルの向上等、継続的な授業改善をはかるために、平成 12 年度秋学期より継続して「学生による授業評価アンケート」を実施している。

## ② 到達目標

工学部各学科の全教員全科目について実施し、継続的な授業改善およびカリキュラム改善の検討に役立てる。学科および学部の授業評価検討会における評価検討を通じた授業改善、カリキュラムの変更・改定に役立てる。

## ③ 活動内容

平成 24 年度以来 US 科目の内、工学部向けに設定された授業についてもアンケート実施対象として組み入れており、平成 26 年度も例年通りの方法で実施した。集計結果は科目ごとのデータおよび全体集計データとともに科目担当者に届けられる。集計結果の内容は科目担当者が作成した授業チェックシートとともに科目単位および学科単位で次期の授業に反映されるよう、PDCA を実行する努力をしている。学外には総括した内容を Web で、学内には全ての詳細を学生による授業評価報告書として大学 8 号館ロビー等で閲覧公開している。

また、16 単位キャップ制や GPA 警告制度の導入効果をみるための準備として、平成 22 年度から 26 年度の授業評価の項目別変化に着目した。

専門科目の授業方法の改善例を取り上げ、各評価項目の評価値の向上と成績評価値の向上（とくに不合格者数の減少）が得られたことを示した。GPA の上昇が求められる中、成績評価とくに自習・理解の項目の上昇を伴う改善例として示した。

## ④ 評価

教員、科目とも参加率はほぼ 100%を維持できている。授業評価平均値は安定している。特に自習が年々向上し、理解も向上し、意欲も僅かではあるが向上しており、総合評価の最小値も向上中である。種々の対応策による効果とも言えよう。集計結果に対する科目担当者のコメント記載については記載が授業終了後であるため、受講学生には直接伝わらないこともあって、記載促進には難しい面がある。

## (3) 授業評価検討会

### ① 概要（目的を含む）

学生による授業評価アンケートとともに教員自ら授業を評価する科目ごとの「授業チェックシート」を基にして、学科ごとに実施した「授業評価検討会」の報告を持ち寄って、学部として実施する「授業評価検討会」にて、総合的に検討を加える。検討結果は学部としての改善の実施、および各学科へフィードバックされ、学科における改善の実施に寄与する。

### ② 到達目標

継続的な授業改善およびカリキュラム改善の検討に役立てる。改善成果を評価する。学科として今後必要な改善点を確認するとともに、学部として必要な改善点を提言する。

### ③ 活動内容

授業評価検討会実施日：春学期 平成 26 年 9 月 8 日

秋学期 平成 27 年 3 月 6 日

#### ④ 評価

授業評価アンケート・授業チェックシート・授業評価検討会によって、授業改善のサイクルが定着している。組織としての活用が継続的課題となっている。多様化する学生に対応するため、授業の方法や分かり易い課題の提示方法、板書やスライドの適切な在り方等に関する視点も重要になっている。

授業評価アンケートでは自習と理解の項目の平均値が年々向上傾向を呈してきた。とくに、平成 24・25 年度の伸びが大きかった。今年度の自習の伸びは無く、理解の伸びは比較的小さかった。

一部の学科について授業運営課の工学部担当者の協力を得て、成績データを入学年度ごとにまとめ整理し、成績分布・平均、出席率について調査を試み、平成 24・25 年度入学生の出席率が極めて高いことなどが分かった。

今後、入学年度ごと、学年ごとに容易に整理することを可能にすることによって、カリキュラムや制度変更による効果・影響を調査できるようにしたい。授業評価アンケートおよび成績データともに入学年度ごとに卒業までの経過を見ることができるとよい。同一カリキュラムおよび同一制度の中での評価や出席率の経過を見ることができ、カリキュラム間の比較、入学年度間の比較評価が可能となる。授業コード、成績データ上において、これらに対応し易いデータ項目の在り方等、配慮が望まれる。また、授業評価アンケートの項目に入学年度および学年を加える対応も考えられる。

### (4) 学修支援

#### ① 概要（目的を含む）

主に 1 年生を対象とする基礎学力向上のために実施している数学・物理学の「学修支援」は活用した学生の単位取得率が高い等の効果は表れているが、活用率を向上させることが継続的課題となっている。平成 25 年度は数学・物理学の助手が担当する「予習復習指導時間」を設定し、その効果も期待されたが、平成 26 年度は助手の教員が昇格のため担当教員を充てることができず、「予習復習指導時間」は設定できなかった。

#### ② 到達目標

- ・活用率の向上
- ・支援の充実

#### ③ 活動内容

平成 25 年度に 1 年生向けに設定した数学・物理学の「予習復習指導時間」は平成 26 年度には上記のように設定できなかった。このため、数学では問題集を学生に配布して取り組ませ、成績評価に加味する方式を採った。その進度をチェック検印するとともに、質問に高校教員 OB チューター 2 名が週 2 日ずつ対応して支援指導を推進した。物理学では昨年度に続き高校教員 OB チューターの定年退職後の補充ができず、チューターによる個別指導は実施できなかったが、演習問題を課すことや、質問対応によって対処している。

#### ④ 評価

平成 25 年度に成績上の効果が視られた「予習復習指導時間」を設定できなかった。

代わって、「問題集配布、質問対応、解答進度チェック検印、成績に加味」によって対応した。実施した結果、次年度も同じ方式を適用することにした。問題集を学期中継続して自学自習させるために、中間試験・期末試験前は避けることにした。また、問題集を1回解くだけでは不十分で、繰り返して解かすなど学修方法の指導が必要であることが分かった。

チューターとして適切な高校教員OBの補充が極めて困難な状況にある。

#### (5) 発達障害学生支援

##### ① 概要（目的を含む）

発達障害あるいは発達障害とみられる学生の入学事例が毎年みられ、対応を模索しながら可能な範囲の支援・指導が続いている。当該学生の学外実習、卒業研究および就労が課題となっている。

##### ② 到達目標

当該学生の就労や将来を意識した支援・指導の在り方の目処を立てる。

##### ③ 活動内容

これまでの活動を対応可能な範囲で継続している。加えて二次障害を生じないように当該学生の状況の変化にも気を配る対応も、可能な範囲で実施している。父母等および医師、カウンセラーとの可能な範囲での情報交換によって当該学生の状況改善につなげる。インターンシップおよび就労に関わる対応もキャリアセンターの協力を得て可能な範囲で試みている。

##### ④ 評価

対象となる学生の進級・卒業や新入学による指導経験を重ねること、および、学内外の発達障害学生に関わる研修参加によって、指導の在り方に目処が立ちつつある。当該学生の現状と今後や将来を考慮した指導を基本に、インターンシップや卒業研究の指導実績が得られている。インターンシップの受け入れ先の確保、就労に関しては当該学生、父母および保証人（以下、父母等）の現状認識を高める良いきっかけとして捉えるとよい。これにより、就労に関する父母等の理解と協力が得られる例もあるが、理解が得られない場合の就労指導対処が課題となる。父母等の意向も様々であり、対応が難しい結果を生じる例もある。

発達障害の診断を得ている学生、発達障害とみられるが診断を受けるに至っていない学生および一般学生の区別もはっきりしない状況が現実となっている。したがって、他大学ではこれらへの支援にユニバーサルデザインを採り入れることを提唱している例もある。大学としての対応方針も明確にする必要も生じてくるものとみられる。現場教員が対応する支援負担も自ずと多くなりがちである、また、特性の異なる個々の学生への適切な支援が求められる。このため、たとえば「大学として、状況把握と支援内容の判断ができる臨床心理士（常勤）＋各学部のコーディネーター」の構成を用意する等の対応が望まれる。判断のできる第三者が授業における当該学生の状況を視て判断する手法も支援や父母等の理解を得るためにも効果的であると考えられる。

近年多くなっている、精神的課題を抱える学生への対応についても、同様に、状況把握と支援内容の判断ができる臨床心理士（常勤）の存在が望まれる。

#### (6) 学外セミナー・現況調査等への教員派遣

##### ① 概要（目的を含む）

現状における課題あるいは今後のカリキュラム改定にかかわる課題に関する知見を得るため、学外のシンポジウムや研修会に参加して、その内容を活用する。

##### ② 到達目標

参加した研修等の内容を活用する。

##### ③ 活動内容

名城大学 FD フォーラム「成績評価の客観化、厳格化について」（主催：名城大学 FD 委員会、会場：名城大学 天白キャンパス、開催日：平成 26 年 10 月 29 日）に 1 名が参加した。

##### ④ 評価

特に「理工学部取り組み事例紹介」に注目して参加したが、実際の内容が JABEE の紹介であった。JABEE の現況と課題を知ることができた。フォーラムの標題に関する課題の内容としては本学部における課題と類似していることが分かった。参加報告は工学部 FD 研修会にて実施することが基本であるが、研修会の時間の制約から省略し、資料等は必要に応じて、学科会における報告や個別の報告、回覧等により、活用されている。

#### 4 昨年度（平成 25 年度）に提案された予定・課題の達成度について

##### (1) Tamagawa Vision 2020 の実現へ向けた課題

16 単位キャップ制、GPA による警告制度・進捗チェック・卒業要件の下、対応する改定カリキュラムのもとで、指導上の課題認識や結果評価を行い、効果的な改善を継続することが課題となった。平成 25 年度入学生向けに改定されたカリキュラムの下 16 単位キャップ制および GPA 警告制度の初年度の現状データを把握し、共有するとともに、今後の対応策の端緒となった。

##### (2) 現状における課題

入学生の学力不足対応、発達障害者支援等の充実化が求められている。技術者に求められる学力以外の基礎力の育成も課題となりつつある。

入学生の学力不足対応指導は高校教員 OB のチューターと専任教員の連携により、年々、指導方法を改善し、成果を挙げつつある。学修支援については毎年学会および工学部紀要に投稿されている。また、16 単位キャップ制を充実したものにするための対策として、今年度には数学・物理の予習復習指導時間を設定して対応し、成果を得た。一方、定年退職されたチューターの補充ができず、本来 2 名であった物理の高校教員 OB のチューターが本年度は不在となった。高校定年退職チューターの後任の補充をはかったが、高校における再雇用の活発化の影響を受け、達成できず、今後の補充の見込みも立たない状況となっている。このため、平成 26 年度に続き 27 年度も物理の予習復習時間および学修支援を停止せざるを得ない状況にある。1 年次の学部共通の主要科目では学修記録帳を用意している。学部共通として開設した「導入ゼミ」は全教員で強力に指導した。さらに、「キャリアデザイン」も学部共通で開設した。それぞれ一定の成果を上げていると考えられるが課題

もあり、次年度は調整して臨むことになった。三学科合同の授業がほとんどであったが、学生の授業への参加度を向上させるために、学科別で授業を実施することにした。

発達障害者支援については、現在の環境下での卒業までの対処の在り方に目処が立ってきた。これらの学生にとっては卒業させることを第一の目的として支援するのではなく、将来のためになる方向へ状況が進展するよう支援することが重要である。父母等の理解や、健康院カウンセラーおよび医者との連携（二次障害の防止策等のため）等によって、ケースバイケースで対応している。これらの対応によって当該学生の状況が改善し、本人にとって将来のためになる方向へ状況が進展している例も出てきている。一方、このような学生にとって GPA 警告制度下で勉学を継続することが難しくなっているのも現実となっている。

発達障害の学生をインターンシップへの参加させるため、対応可能な受け入れ先を、キャリアセンターおよびハローワークの協力で見つけることができ、今後の参考となる事例となった。今後はこのような学生の就職活動支援の在り方が課題となる。

警告を受けた学生の父母等が強い不満を表明するケースも見受けられる。とくに、受験前・入学前に GPA 警告制度の情報を得た認識の無い父母等の場合に不満が強い。

精神的課題を抱える学生も増加しているとみられ、個々へのより適切な対応も求められている。担任教員や卒業研究指導教員も対応に苦慮するケースもある。

分野によっては非常勤科目担当を探すことが困難になってきている。企業での実績が問われる設計分野等の場合、企業も人材の余裕が無くなっている上、実質の定年が 65 歳まで延長されている影響である。また、他大学の教員の場合、本務校の多忙の影響も大きい。

### （3）FD 活動の在り方に関する課題

現状対応課題が FD 活動の主たる対象であった。これについては研修会による現況データおよび分析結果と指導方針の共有がなされた。一方、参観授業や授業評価アンケートについて、組織としての効果的な授業手法等の共有が継続課題となっていたが、多忙な中、進展が難しく、継続課題とせざるを得ない。ただ、参加者が極めて少ない状況が続く参観授業に関しては、オムニバス形式の授業を参観授業の対象とするなどの工夫が次年度に向けてなされている。（オムニバス形式の授業の場合、当日の担当者以外もその時限に他の授業が入っていないため、参観し易い。）

当初、参観授業（研究授業）や授業評価アンケートについて、組織としての効果的な授業手法等の共有が課題となっていた。現況は 16 単位キャップ制、GPA 警告制度等への対応に注力し、カリキュラム改定が毎年続き、複数カリキュラムが併存している状況下でもあるため、参観授業（研究授業）や授業評価アンケートについては課題の認識のみにとどめた。

上記、3.（3）の④に記したように、カリキュラムや制度変更の効果・影響を評価可能のように、授業評価アンケートおよび成績データを入学年度別、学年別、科目別などに整理し易くすることが望まれる。

## 5 今後（平成 27 年度以降）の予定・課題について

### （1）Tamagawa Vision 2020 の実現へ向けた課題

16 単位キャップ制、GPA による警告制度・進捗チェック・卒業要件の下、対応する改

定カリキュラムの下で、指導上の課題認識や結果評価を継続し、効果的な改善を継続することが課題となる。

(2) 現状における課題

前項の課題に沿って、入学生の学力不足対応、発達障害者支援等の充実化が求められている。いわゆる底上げ対応に力点が置かれざるを得ない状況が続くが、一方で優秀な学生を伸ばす対応も課題となっている。技術者に求められる学力以外の基礎力の育成も課題となりつつある。

(3) FD 活動の在り方に関する課題

現状対応課題が FD 活動の主たる対象である。参観授業や授業評価アンケートについて、組織としての効果的な授業手法等の共有が継続課題となっている。

## § 経営学部

### 1 FD 活動への取り組み理念・目標

- (1) 質の高い卒業生（経営学部のミッション・ステートメントを体現し得る卒業生）を輩出する。
- (2) 玉川の教育理念を基盤とした経営学教育を実現する。
- (3) 21 世紀社会に生き残ることのできる経営学部一少子化時代・大学全入時代にあって、運営を維持しうる体力をもった学部を形成する。
- (4) 玉川学園および玉川大学全体の評価を高める学部を構築する。

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

経営学部長、教務主任、国際経営学科主任、学生主任が中心となって FD 活動を実施する。教務主任と大学 FD 委員は連携して活動計画を取りまとめ、主として研修会の運営にあたる。観光学部設置にともなって、観光経営学科の教育に関する FD 活動は授業・学生支援を主として担当する観光学部の FD 活動として展開しているため、経営学部では国際経営学科の授業改善、教育手法の修得、教材開発等に関する FD 活動を展開している。

### 3 平成 26 年度の活動内容

#### (1) 大学コンソーシアム京都主催 第 19 回 FD フォーラム参加報告

##### ① 概要（目的を含む）

平成 26 年 5 月 29 日に昨年度と同様に FD フォーラム参加報告に基づいた研修を実施した。第 19 回のテーマ「社会を生き抜く力を育てるために」のうち教員が出席したシンポジウム・分科会に沿って、主にグローバル人材の養成とカリキュラム運用の関連づけについて検討した。

##### ② 到達目標

- ・学修継続のための支援事例を知る。
- ・グローバル人材の養成に関する学修支援・産学連携のあり方を検討する。

##### ③ 活動内容

折戸晴雄教授から参加したシンポジウムⅡ「FD が切りひらく学生と大学の未来」及び分科会「産学協働でグローバル人材を育成するには」に関する報告があった。報告に基づいて討議へと進んだ。

まずシンポジウムの紹介として題材になった中退抑制、学修成果の課題、高等学校への訪問といった多様な題材について説明があった。現在、学生が中退すると教員のモチベーションも上がらない、FD に力を入れても評価されない、就職率も高く学生が資格試験で成果を残したからといって入学者が増えるわけではない、といった課題があげられる。一方で高校生が進路を発見できるキャリア教育プログラム、入学してほしい人材像の提示などの積極的な働きかけと同時に、時にはクリティカルな情報を提供すべきという意見もあることが示された。学生は単位取得と就職だけでは学修の実感がなく、教員も学生の成長するプロセスに携わることが大切であるといったディスカッションの紹介があった。

分科会の報告として、大学と企業等が連携し個性豊かな人材を養成するとともに、グローバル人材の処遇・昇進政策の大学での紹介を進めていく必要があるという提案が紹介された。教育機関と企業のすり合わせがうまく進んでいないことを指摘する声も上がるなかで、企業、大学に加えて、学生、外国の方も参加した4者間の関係づくりが必要であるという意見も示された。

#### ④ 評価

国際経営学科のカリキュラム改訂を進めているなかでグローバル人材の養成は大きな課題である。この研修では英語力の強化、英語による専門科目の学修に加えて、個のアイデンティティの確立、日本文化の発信といった要素も重視する必要があることが確認できた。一部の授業で実践している企業との連携も継続しつつ、グローバル人材の養成のためのプログラム開発を引き続き検討する。

### (2) 研修会

#### ① 概要（目的を含む）

平成26年5月29日に平成27年度から運用を開始する教育課程における学修支援のあり方を共有するために、研修会を実施した。

#### ② 到達目標

平成27年度入学生の教育課程における支援体制の枠組みを構築する。

#### ③ 活動内容

平成26年度に検討を開始した新しい教育課程を手掛かりとして、3コース制におけるFDのあり方、準備・運用に関して議論を重ねた。とくに学修成果の可視化が求められているなかで、どのように各コースの成果を示すかについて意見を交換した。

#### ④ 評価

各コースで養成する人材像と具体的な成果について教員間で相違が見られたため、何を目的としてどのように支援するかを明確にするには至らなかった。事例分析の活用、ニュースを活用した英語による専門科目の学修など、個々の教員が思い描く授業及び学修支援のあり方について数多くアイデアが出たことは評価できる。

### (3) 研修会

#### ① 概要（目的を含む）

昨年度に引き続き英語の学修と経営の専門諸分野の学修の連携を図ることを目的として、平成26年6月26日に研修会を実施した。平成27年度入学生から運用する教育課程を踏まえて、教育目標と各科目の到達目標のつながりをより明確にするために、学年別・Semester別の学修目標を検討した。

#### ② 到達目標

- ・専門科目を学ぶための英語力を身につける学修プロセスを共有する。
- ・コースごとに学年別・Semester別の学修目標を設定する。

#### ③ 活動内容

平成27年度入学生のプログラムにおける学修目標を設定した。

まずすべてのコースに共通する英語の目標と学修プログラムについて、経営学部に

おけるこれまでの共同研究の成果を踏まえて、共同研究を取りまとめた教員から開発したプログラムによって修得できる力、取り上げるトピックス、学修プロセスの説明があった。

コース別には事前に用意した国際会計コースの学修目標を共有し、グローバルビジネスコース、マーケティング戦略コースの目標を設定した。どのような力が身につくかという文章による目標に加えて、資格・検定試験の目標を設定し、TOEIC700、BATIC（国際会計検定）®700、日商販売士1級と詳細に各コースで学年別・ Semester 一別に設定した。

#### ④ 評価

学修目標（教育目標）を明確にすることで、学修プロセスを確認することができた。また平成 27 年度入学生の教育課程表において科目・配当年次・単位数の設定、科目間の連携につなげることができた。

### (4) 研修会

#### ① 概要（目的を含む）

平成 26 年 10 月 23 日に教育再生実行会議第三次提言に沿って、Dual Language Education Program（仮称）によって学修成果を高めるための授業設計及び教材開発を目的として研修会を実施した。

#### ② 到達目標

コース目標を達成するための授業設計・教材開発

#### ③ 活動内容

まず玉川大学の教育方針、平成 26 年度「大学教育再生加速プログラム（通称：AP）」採択にともなうマイクロレベルの FD の加速化、学位授与方針等（カリキュラムツリー等を含む）の様式全学共通化などについて、これまでの取り組みと今年度以降の方向性を共有した。

続いてアクティブ・ラーニングの積極的な導入、ルーブリックの活用を今後の検討課題として取り上げた。ここでは学士課程教育センターの了承を得て、7 月 1 日に全学で実施した京都大学高等教育研究開発推進センターの松下佳代先生による学修評価に関する講演会の資料を配付し、授業で積極的に活用するように促した。

コース科目を中心に使用教科書、予習復習のための教材、英語で授業を行うための支援教材を検討・開発することを共有した。

#### ④ 評価

これまで検討した学修目標に加えて、資格と授業科目を関連づける作業をコースごとに進めることができた。終了後、コースごとにさらに検討したことで目標を達成するための授業方法・教材開発を進めやすくなった、英語力の向上については、英語が苦手な学生をフォローする仕組みづくりも必要であるといったさまざま意見があった。

### (5) 学生による授業評価アンケート

#### ① 概要（目的を含む）

例年、各科目の継続的な授業改善に役立てることを目的として授業評価アンケート

を実施している。春学期・秋学期ともに実施した。

② 到達目標

学生の学修状況を把握するとともに、各教員のさらなる資質向上を図る。

③ 活動内容

独自の方法で実施している科目及び演習科目を除く経営学部開講科目でマーク式、記述式の授業評価アンケートを実施した。マーク式の集計は外部業者に依頼し、その結果を科目担当者別に配付して FD 活動に活用するよう継続的に呼び掛けている。記述式は科目担当者が個別に活用している。

④ 評価

学修時間の確保は最大の課題である。いずれの質問項目も学生の評価は総じて高いが、学修時間に大きな変化は見られない。

#### 4 昨年度（平成 25 年度）に提案された予定・課題の達成度について

活動内容を平成 27 年度に始まる教育課程の運用に集中したため、昨年度の予定はほぼ達成できている。ELF と英語による専門科目の連携は引き続き課題として残っている。

授業参観の対象は 4 科目、授業評価アンケートも春学期・秋学期実施と、予定どおりであった。

資格取得支援の一環として助成金制度を設けているが、BATIC（国際会計検定）<sup>®</sup>のレベル認定で助成金を申請した学生が増加しつつあることは経営学部の教育にとって明るい話題である。より多くの学生が制度を活用できるように、引き続き支援したい。

今年度、スケジュールの都合で第 20 回大学 FD フォーラム（平成 27 年 2 月 28 日・3 月 1 日開催、大学コンソーシアム京都主催）に参加できなかった。来年度は参加したい。また他のシンポジウムも開催されているため、来年度以降はこうした学外の研修会にも幅を広げたい。

#### 5 今後（平成 27 年度以降）の予定・課題について

平成 24 年度開始の教育課程で初めて卒業生を輩出する。国際経営学科で 5 コース制に、観光経営学科で観光学部開設につながる教育課程に、それぞれ移行した年度に入学した学生である。国際経営学科のコースの決定は 3 年次で運用しているが、両学科ともに目的意識をもち、専門性を高めた学生の就職動向をみて、今後の学修支援に役立てたい。

また入学者の動向と学修意欲にも注目している。平成 27 年度から国際経営学科の入学生は入学時にコースを決定している。初年次からの支援体制の強化に加えて、学修目標をより明確にしたことによる効果も期待して、引き続き FD 活動を推進する。入学時のガイダンスから一部をコース別を実施するなどコースの特徴を前面に出して教育活動を推進するため、コース別の FD 活動を積極的に実施する。

授業評価アンケート（春学期・秋学期）も例年どおり予定しているが、教育課程の改訂によって学修時間などに変化が見られることを期待している。ループリック等の研修会への参加は一部の教員にとどまっているため、今後、積極的な参加を促して共通理解を深める。

全学の方向性に沿ってアクティブ・ラーニングを積極的に取り入れている科目を中心と

した授業参観も検討する。同時に他部署との連携を図りながら、さまざまな授業方法を実践できる環境を整備したい。

## § 教育学部

### 1 FD 活動への取り組み理念・目標

本年度のFD活動への取り組み理念・目標は、平成25年度の内容を継続し、以下の通りである。

「本学部では学校教育はもとより生涯教育、社会教育の諸分野で貢献できる教育プロフェッショナルの育成を目指し、指導に当たる教員が自らの資質と能力を向上させることにある。」

### 2 学部におけるFD活動の組織構成と役割

教育学部長、教育学科・乳幼児発達学科の両主任、教務主任、学生主任、及びFD委員、通信教育部長、通信教育部教務主任、FD委員の8名で構成する。

教育学部長を委員長とし、FD委員会が学部におけるFD活動計画(企画・運営)の策定、FD活動の年度総括などを審議する役割を担っている。また委員会決定事項を教授会への議案提起を行い、FD活動の推進に努めている。

### 3 平成26年度の活動内容

#### (1) 研修会等

##### 【通学課程】

#### ① 概要(目的を含む)

前年度に引き続き、教員養成における課題や展望を再認識した上で日常の指導、教育実践に取り組むことを目的とし、兼担の教員を中心に教師教育リサーチセンターが開催するシンポジウムや講演会に参加した。

#### ② 到達目標

今日の教育実践における先進的な取り組みや課題に触れ、研究活動および日々の授業実践に活かしていく。また日本の教育の課題と展望について学び、教員養成における指導や教育実践に活かし、また参加者同士のネットワークを築くことを目標とする。

#### ③ 活動内容

教員養成フォーラム[平成26年10月25日(日)]およびユネスコスクール加盟大学として教育学部が主催するシンポジウム「ユネスコスクール研修会:ESDと教師教育ー持続可能性を志向する授業づくりの新たな展望」[平成26年12月6日(土)]を実施した。

#### ④ 評価

教員フォーラムにおいて、教員養成課程における教科教育法の改善、指導カリキュラム開発や教材開発、特に教師教育プログラムの拡充が課題となり、現在の教師教育に何が求められているのかを今一度原点に立ち戻って検討し、諸課題を教室の現場で教師の授業づくりにどのように落とし込む具体的方法等について活発な議論を交わすことができた。

またシンポジウムにおいて、玉川大学教育学部が平成21年以来、ASPUivNet加盟大学であり、文部科学省委託事業「日本/ユネスコ パートナシップ事業」として、

多摩市、稲城市、世田谷区、横浜市をはじめとする近隣地域におけるユネスコスクールの加盟促進と持続可能教育(ESD)をテーマとする教員研修の実施を続け、平成 26 年度で 6 年目となった。本学含め各加盟大学との連携により、近隣地区の多くの学校がユネスコスクールの認証を得るようになったことは、大きな成果の一つとして挙げられる。

さらに「ESD と教師教育 — 持続可能性を志向する授業づくりの新たな展望」をテーマとして、教師がどのように持続可能教育(ESD)を受けとめればいいのか、教材開発やカリキュラム開発というシステムの側面だけでなく、教員一人ひとりの授業づくりの姿勢に持続可能教育(ESD)をどのように反映させていくか、といった教師教育の課題に焦点化し、関連する考え方やモデルについて教員および関係者が活発な議論を交わすことができた。このように研修会の目標である参加者間のネットワークの構築のみならず、今日の教育実践における先進的な取り組みや課題に触れることができ、今後の研究活動および日々の授業実践に活かすことができるようになると思われる。

## (2) 学生による授業評価アンケート

### 【通学課程】

#### ① 概要(目的を含む)

学生による授業評価(教育学部では「リフレクションシート」と称す)を全授業で実施する。集計結果は学部全体の平均と比較できる形として各授業担当者にフィードバックされ、新学期に向けて授業改善につなげるものとする。また学部・学科・学年別の集計結果の傾向や課題を学部全体で共有することを目的とする。

#### ② 到達目標

専任教員、非常勤講師が担当するすべての授業において学生によるリフレクションシートを実施する。ただし授業評価アンケート実施日の出席者が 10 名未満の授業については集計せず、各担当教員が授業改善のために活用する。実施した授業評価の集計はデータ分析と集積を行い、教員の授業改善および学生の傾向や課題の共有につなげる。

#### ③ 活動内容

専任教員、非常勤講師が担当する教育学部すべての授業において、授業評価アンケート(リフレクションシート)を実施した。

#### ④ 評価

授業評価のアンケート結果は各授業のみならず、学部全体の平均値と比較できるようにし、学生の傾向や課題を各教員が共有することができた。また教育学部における授業評価のアンケート結果は各設問とも概ね高い評価を得ることができた。この結果は各教員の日頃の授業改善の賜物ではあるが、実施するアンケート内容の周知により、明確な評価基準として、教員の意識改革につながり、さらなる授業改善につながったと言える。

一方、前年度に引き続いて予習・復習の時間に関しては他項目よりも低くなっている。ただし、あくまでも平均であり、個々の授業特性および学生の予習や復習に対す

る時間的な意識の違いがあることや 10 名以下の授業の削除等の考慮も加味した上で  
の評価と考えるべきである。この点に関してはアンケート設問内容の改善や設問に対  
する説明を加えるなど検討したい。

#### 【通信教育課程】

##### ① 概要（目的を含む）

スクーリング授業において、学生による授業評価を全教員が実施し、集計結果は各  
授業担当者にフィードバックするとともに、『玉川通信』で学生に公表する。目的は、  
各授業担当者が新年度に向けて授業改善することにある。

##### ② 到達目標

- ・専任教員、非常勤講師を問わず、すべての授業において学生による授業評価アン  
ケートを実施する。
- ・実施した授業評価の集計を外部委託し、データ分析と集積を試み、教員の授業改  
善、また学生の傾向や課題を共有する。

##### ③ 活動内容

- ・夏期スクーリングにおいて、専任教員、非常勤講師の全教員が、担当する全ての  
授業（一部の実技系科目を除く）について、授業評価アンケートを実施した。
- ・質問内容は、通学課程や他大学等で行われている授業評価アンケートも参考にし、  
質問の数を 6 から最大 14 へと増やすとともに、文言の見直しを行った。

##### ④ 評価

各授業の結果は、全教員の結果をグラフ化したものと比較できる形で、通信教育部  
の全教員に配布し、結果と課題を共有することができた。また、補助教材『玉川通信』  
で結果の概要を学生に公表した。

授業評価の内容であるが、各設問とも概ね高い評価を得ている。特に「話し方・声  
量」「学生への対応・配慮」が高い評価を得た。予習時間に関しては科目によりばらつ  
きが多かった。若干低めの評価となった項目としては、「各回の授業の進度」「各回の  
授業の学修量」「授業時間内に自分の考えや意見をまとめたり、学びを深めたりする機  
会や時間」といった項目があった。6 日間短期集中型という学修形態のため、必ずし  
も十分な予習・復習の時間が確保できないという制約の中で、授業時間内にいかにし  
て学修内容の定着・深化を図り学修目標を達成するかという課題が浮き彫りとなった。

また、本年度はクロス分析を試みた結果、「自分は積極的に授業に取り組んだ」に対  
する回答とそれ以外の各設問への回答との間には、明確に相関関係があった。これは  
予想されたところではあるが、授業者には積極的に参加したくなるような授業が求め  
られているといえよう。

#### (3) 教職員相互の授業公開と参観

##### 【通学課程・通信教育課程】

##### ① 概要（目的を含む）

教員相互の授業参観を実施し、各自の教授法、教授内容についての振り返りを行い、  
授業改善につなげる。また関連する科目の教授内容の調整を検討する機会とする。

② 到達目標

大学 FD 委員会の提案に合わせ、通学課程は 5 名の教員が授業参観を行う。公開した教員の教育内容の振り返り、教授法の改善を図るとともに、参観した者の授業改善へ寄与することとする。

③ 活動内容

通学課程は教員 5 名の協力を得て、5 つの授業の授業公開と参観を行った。

④ 評価

通学課程は若手教員および熟練者の授業参観を実施することができた。実施においては、多忙な大学教員の業務を考慮し、全 100 分の参観でなくとも良いこととしたが、参観者は前年度と同様に少なく、時間設定の方法や実施の在り方についての再検討が必要と思われる。しかし参観期間中の参加者数は少なかったが、参観期間に限らず、気兼ねなく教員同士がいつでも授業を参観できる環境・雰囲気は教育学部内で形成されている。特に関連する科目や共通科目が主ではあるが、教員間の教授法、教授内容についての意見交換が行われるようになったことは、授業公開を実施することの意義や成果の一つとして挙げられる。

通信教育課程は、昨年度の PR 不足の反省を踏まえて積極的に授業公開への参加を呼びかけたが、結果的には本年度も実施するに至らなかった。ただ、公開時期が秋学期だったので、春学期の授業なら公開したいという教員もおり、今後の課題としたい。

(4) FD 研修

【通学課程・通信教育課程】

① 概要（目的を含む）

平成 26 年度は、参加した教員同士が学び合い、各自が今後の教育活動、研究活動の活性化を図ることを目的とした教員自主企画および学部企画の学外（鹿児島）FD 研修「玉川学園の歴史および玉川の教育の背景」を実施し、自校の歴史や建学の精神を再確認し、玉川教育の全人教育の意義について理解を深める機会とした。

② 到達目標

自校史の理解促進や鹿児島県の小原國芳生誕地等を巡りながらの玉川大学の歴史や建学の精神を学ぶと共に玉川の教員としての誇りを持ち、日々の教育活動につなげていく。また教育学部の教員間で小原國芳の生き方や信念を共有し、愛校心を高めることを目的とする。

③ 活動内容

南さつま市内の見学（小原國芳記念公園・玉川大学久志農場など）および鹿児島大学教育学部准教授 前田晶子先生、鹿児島大学副学長・教育学部附属教育実践総合センター長 武隈晃先生より薩摩教育と小原國芳の教育思想や背景に関するご講演を頂いた。

④ 評価

学部教員が創立者の生誕地である鹿児島を訪れ、その教育者としての原点に触れ、本学の創立理念を再確認し、教員個人の資質向上および学部組織としての教育力向上につながるものとなった。また多くの私大で進めらる自校史教育の意義を確認するこ

とができ、教育学部としての新たなミッションや教育内容を構築する機会となり、今後の大学における教育活動に大きく寄与することが期待できる。

#### 4 昨年度（平成 25 年度）に提案された予定・課題の達成度について

##### 【通学課程】

これまでの課題であった授業評価の全科目（専任・非常勤）実施ができたことは大きな成果と言える。また学部独自の教育課題を迫及する学部企画 FD 研修では、鹿児島大学の前田晶子先生によるご講演が実現し、創立者の理念を再確認し、教員個人の資質向上および学部組織としての教育力の向上につながったと言える。

また平成 25 年度より 16 単位キャップ制の導入など新しい大学教育において、これまで以上に教員間の信頼と協力・連携が必要である中、FD 活動や研修を機に多くの場面で学部教員が玉川大学や学生のため、より良い教育実践について意見交換を多く持つことができるようになったことも成果の一つであり、学部組織としての教育力の向上につながるものと思われる。

##### 【通信教育課程】

授業評価アンケートを、それまでは 1 教員につき最も受講者の多い 1 科目のみに限っていたものを、授業者の多寡によらず原則として全科目で実施することができた。また、設問の内容も見直し、通学課程や他大学などの授業評価とある程度の比較を行えるようになった。レポート科目のアンケートについては、その実施方法や内容等について、教員の間での意見がまとまらず、とりあえずは見送ることになった。

#### 5 今後（平成 27 年度以降）の予定・課題について

##### 【通学課程】

前年度に引き続き、日常の教授内容や方法の更なる検討と研鑽を重ね、本学の建学の理念に基づき、今日の社会の要求に応じることのできる人材育成に取り組むことが重要である。授業評価アンケートにおいては、項目内容の改善として全授業に当てはまる項目の設定は困難ではあるものの、実習や演習、アクティブ・ラーニング、少人数の授業など授業体系に応じた項目を加えるなども今後の課題の一つである。

また昨年度の報告書でも指摘されていたが、教員の職務の一つとなる研究活動の活性化は今後も必要である。

FD 研修の一つである鹿児島研修において学部教員が創立者の生誕地である鹿児島を訪れ、その教育者としての原点に触れることは大きな意義がある。とりわけ私学においては創立者の建学の精神を教育の出発点としているため、その精神を教職員や学生が共有することが大学教育の成果にも大きく影響すると考えられ、昨今「自校史教育」の重要性が強調されている。さらに教育学部では学生たちが創立者・小原國芳の教育精神を学ぶ機会を授業や行事など多数設けており、今後もその充実が求められている。そのため今後の大学における教育活動に大きく寄与する鹿児島研修は今後も引き続き行っていく予定である。特に新任教員には学外出身者も多く、このような研修の機会を設けることは玉川教育の精神を全教員間で共有するためにも必要であると考えられる。

**【通信教育課程】**

スクーリング科目については引き続き授業評価アンケートを実施する。また、レポート科目（テキスト学修）についても、学生のニーズをすくい上げることができ、なおかつ教員の指導方法や授業の改善にもつなげられる方法を検討したい。

## § 芸術学部

### 1 FD 活動への取り組み理念・目標

芸術学部のミッションは「芸術による社会貢献の実践力を育成する」であるが、現代の社会は経済を中心とするグローバル化や少子高齢化、情報化といった社会の変化が労働市場や産業・就業構造の流動化となって進行している。このような時代にあっては、我が国の人口動態も踏まえつつ、変化する社会の捉え方と貢献の仕方を常に検討して柔軟に対応していく必要がある。世論調査によると、国民の 60% が世界に通用する人材や企業、社会が求めている人材を大学は育てているかの質問に否定的な回答をしているように、人材養成や研究の目的が社会の要求と乖離していると指摘されている。大学は未来を築くための教育や研究に大学が総力を挙げて取り組み、社会に貢献することが使命である。特に芸術分野は新産業分野でも期待される感性や想像力などの育成と深くかかわる。また、従来の教育や福祉に加えて、芸術と産業分野との関連性と活用が高まっているように、常に社会とのかかわりを意識しながら教育体制や教授法、研究戦略などに PDSA を用いて改善をおこない、柔軟性、機動性をもった組織として教員団を編成しなければならない。また、学修の修得主義を推進していくためには、学生を主体とした授業方法の研究や、総合的な学修環境を形成するプロジェクト型授業や外部との連携授業などを推進すると共に、教員団のチーム力形成が重要である。そのためには次のような 4 つの目標が考えられる。①情報収集力、②得た情報から問題や課題を発見する複眼的な分析力、③発見した問題や課題を共有し、教員個々人の問題や課題とする仕組み、④問題や課題を解決するチーム力の形成、⑤修得主義の実践が重要と考える。

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

芸術学部長を中心とした主任会の構成員及び FD 委員が FD 活動の中核メンバーである。定期開催の主任会と主任研修会で情報の共有や分析をおこない、目標や課題の設定、及び手段などの基本方針を検討する。そして、中核メンバーはもとより、課題ごとの担当教員が報告や成果、及び方策等を拡大教授会で報告し、全学部教職員の組織的な取り組みとする仕組みを構築している。また、各学科の主任は学部 FD 中核メンバーであるので、学科内の取り組みをまとめることや推進する役割を担い、教授会と学科会が連動して FD 活動を推進させている。大学 FD 委員は、全学的な課題や情報の収集と伝達、及び他学部・他大学における FD 活動の情報収集を行うと共に、情報の共有を図り、FD の組織的活動が円滑におこなわれる役割を担っている。

### 3 平成 26 年度の活動報告

#### (1) 授業アンケートの実施と授業成果報告書の作成

##### ① 概要・活動内容（目的を含む）

平成 26 年度は予定通り年 2 回の授業アンケートが芸術学部で開講されている全ての授業について実施された。個々の科目に関するデータおよび統計的データの全てを、Blackboard を通じて学部内の全学生および学部内の全教員に公開する。また、個々の科目についてのデータは伏せつつ、統計的データを、持ち出し不可の冊子として一

般の閲覧に供することを検討している。さらに、各学科の専門科目の担当者が授業概要と授業成果をまとめた授業成果報告書などを作成している。

② 到達目標

芸術学部 FD 委員会においては、授業アンケートのデータを分析し、今後の FD 活動の方向性を考える手がかりとする。また、各科目担当者はそれぞれのアンケート結果を参照し、授業の内容と養成人材像との妥当性について点検する。授業成果報告書は各学科の専任・非常勤教員に配付し、全ての教員が専門科目の概要を把握することによって、より緊密な連携を可能とする。

③ 評価

本年度も昨年度に引き続き 2 年次以降の専門科目に関して授業報告書を作成し、様々な情報を共有しつつ、今後の教育方針に関する議論の土台を築くことができた。また、授業アンケートの結果に関しては、芸術学部の拡大教授会において、その結果を報告するとともに、学生の学修状況、その傾向などについての情報を共有することが出来た。

(2) 学外セミナー等への教員派遣

1)

① 概要(目的を含む)

公益法人私立大学情報教育協会主催「美術・デザイン教育におけるアクティブ・ラーニングの事例研究対話集会（開催期：平成 27 年 3 月 3 日）」への教員派遣。東京家政大学板橋キャンパスにて、本学教員含む約 30 名の参加者により、事例報告をもとにした意見交換を実施。これからの美術・デザイン教育の在り方についての基礎資料とする。

② 到達目標

私立大学情報教育協会で作成した教育改善モデル及び教員の実践事例を踏まえて、アクティブ・ラーニングを実現するための様々な教育方法、学修環境を整理・研究中で、ICT の活用を含めた方法・環境について探求する。

③ 活動内容

中京大学と大手前大学の 2 事例について発表があり、美術・デザイン教育におけるアクティブ・ラーニングを効果的に進めるための意見交換を行った。

④ 評価

本学部からは中村慎一学部長、椿敏幸准教授の 2 名が参加。具体的な授業事例の中から、プロジェクト型授業、フィールドワーク、域学連携、教育効果の判定方法など、多くの質疑応答があり、アクティブ・ラーニングの多様性を改めて認識するとともに、今後の授業改善に活かせる知見を得ることができた。

2)

① 概要（目的を含む）

全国私立大学教職課程研究連絡協議会 第 34 回研究（平成 26 年 11 月 2 日）への教員派遣。北海道札幌市の北海学園大学キャンパスで開催された同協議会に芸術学部から 1 名の教員が参加。教員養成課程を持つ全国私立大学の現状と課題についての知

見を広め、教員養成における教育計画実施の基礎資料とする。

② 到達目標

行政の施策や動向を知り、時代の流れと社会のニーズに即した教員養成課程の形成を目標とする。本学部と同じく開放制教員養成制度による教育を行っている各大学の状況や課題、また、教職大学院の現状の把握を行い、本学部の教育システム、並びに教職員の組織的な質向上に活かして行く。

③ 活動内容

「魅力ある教師をどう養成していくか-その魅力をあらためて考える-」をテーマとし、伊藤克彦氏「魅力ある選手を育てる」の基調講演をはじめ、教育委員会や各大学から教員養成の在り方、また、教職大学院についての課題等が報告された。午後の部と各分科会に分かれて終日の研究会が行われた。各大学からの教員のみならず、事務系スタッフも加わり、まさに貴重な情報交換の場となった。

④ 評価

本学部からは中村慎一学部長が参加し、意見交換を行うなど、様々に活動を行うなかで、本学部学科が、行政の施策や動向には沿いつつも、独自性を示すものとなっている事を確認出来たことは大きな収穫であった。

3)

① 概要（目的を含む）

一般社団法人デザイン思考研究所主催ワークショップ「本場スタンフォード大学に学ぶデザイン思考マスター・クラス」（平成 26 年 11 月 22 日～23 日 東京都墨田区国際ファッションセンタービル）へ教員派遣した。アクティブ・ラーニングの手法として具体的な運用のための基礎資料とする。

② 到達目標

アクティブ・ラーニングの教育的効果を最大化するための具体的手法を習得し、授業で実践しながら評価する。

③ 活動内容

本学部から橋本順一教授が参加。ワークショップでは、スタンフォード大での実践を参考に、参加者がグループとなって設定されたテーマにしたがってイノベーティブな発想をまとめた。アイデアの創出と集約、プロトタイプ化といったデザイン思考の特徴を体得するとともに、学修の振り返りを促す方法や、アイデアを具現化するステップなど、アクティブ・ラーニングのベースとなる技術を習得できた。

④ 評価

効果的な運用のための授業デザインやツールなど、具体的な方法論と、核となるイノベーションマインド、クリエイティブマインドは、どのような授業でも広く応用ができることがわかった。新たな教育手法であるアクティブ・ラーニングへの適用を進めていく。

なお、本ワークショップで習得したことをもとに平成 26 年度秋学期授業（「メディア・デザイン理論基礎 II<造形>」）に適用し、授業方法としての効果が認められたので、結果を芸術学部紀要に投稿し、学部内外に知見を共有する。

4)

① 概要（目的を含む）

関西大学教育開発支援センター主催シンポジウム「反転学習はディープ・アクティブラーニングを促すか？」(平成 27 年 2 月 24 日～25 日)へ教員派遣した。アクティブな教育をより活性化するための基礎資料とする。

② 到達目標

反転学習、アクティブ・ラーニングについて先進的な他大学の知見を知り、平成 27 年度から運用を開始する大学教育棟 2014 での実践をより効果的なものにする。

③ 活動内容

アクティブ・ラーニングの研究者である山内祐平氏（東京大学）および溝上慎一氏（京都大学）からの講演、および東京大学副学長の吉見俊哉氏から基調講演が行われた。その後、関西大学学長補佐の青田浩幸氏を交えてパネルディスカッションにてより深い討議がなされた。

④ 評価

本学部から橋本順一教授が参加。アクティブ・ラーニングや反転授業の必要性とともに、その課題点などを確認することができた。特に、自学のためのしっかりした教材の用意と教室でのアクティブな授業設計、およびそれらがスムーズに接続できるような全体デザインが必要であること、効果を最大化するためには大学内という限定的な広さではなく、社会の変化を見通した授業であるべきである（社会での実際的な相互コミュニケーションを意識する）ことが得られたことは大きな収穫であった。

5)

① 概要(目的を含む)

関東地区私立大学教職課程研究連絡協議会 東京地区教職課程研究連絡協議会との合同研究大会および情報交換会（平成 26 年 5 月 10 日）への教員派遣。帝京平成大学中野キャンパスで開催された同研究大会に、本学部より 2 名の教員が参加。大会では、教員養成教育の質保証、その評価の在り方などに関する研究成果の発表と、今後の展開と問題点などについて議論が交わされた。

② 到達目標

教員養成の現状を知り、時代の流れと社会のニーズに即した教員養成課程の形成目標とする。本学部と同じく開放制教員養成制度による教育を行っている各大学の状況や課題を認識するとともに、教員養成教育における最先端研究のモードと成果、課題についての見聞を広げる。

③ 活動内容

「教員養成教育の評価システムについて—日本型アクレディテーション（自律的保障）の試み—」と題し、東京学芸大学、教員養成カリキュラム開発センターの岩田康之氏が、まず平成 22～25 年の間に行われた教員養成評価プロジェクトについて報告。その後、各シンポジストより、欧米や、アジア各国の評価システムの状況、さらにその評価基準や管理方法、問題点などが紹介され、日本型の評価システムの在り方を考えるための提案、並びに議論が行われた。ピア・レビューによる自律的質保証に対す

る多くの指摘や疑問が聞かれ、今後益々の検討が必要である事を認識するとともに、評価システム確立の必要性、重要性を確認した。

#### ④ 評価

本学部からは、辻裕久教授、中村岩城准教授の2名が参加。今年度よりスタートした教職に特化した新学科、芸術教育学科の運営に大いに参考となる多様な情報を得る事が出来た。これらは、5月29日(木)の芸術学部拡大教授会、並びに同日行われた芸術教育学科、学科会議においても報告を行い、多くの学部教員と情報の共有を行う事が出来た。こうした最新の研究に関し、その内容を理解し、多種多様な問題について確認し合う事が出来たのは大きな収穫であった。

### (3) 研修会

#### 1)

##### ① 概要(目的を含む)

玉川大学平成26年度学部共同研究助成金交付事業(研究代表者辻裕久)による、芸術学部芸術教育学科全教員を対象とした教員研修会を平成26年6月26日に実施。芸術学部における芸術教育の内容と方法に関する質の向上を図ることを目的として実施した。

##### ② 到達目標

中等教育で求められている教員の資質・能力を把握するとともに、教育行政の視座から求められる教員の資質・能力を把握することで、芸術学部における教員養成の内容及び方法について理解を深める。

##### ③ 活動内容

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官の臼井学氏による講演「教員養成に携わる先生方へ」と本学教育博物館長・教授の大西珠枝氏による講演「教育行政から見た教員養成―国・地方―」をそれぞれ1時間受け、講演後、意見の交換を行った。

##### ④ 評価

現在の芸術教育行政に関わる2名の講演者から学校現場で求められている教員像及び教育行政から求められている教員像を把握することができたとともに、芸術教育学科における教員養成の課題と改善のための展望が明らかとなった。学科における教員養成の質的向上とともに教員一人一人の教員養成に関する指導内容と指導方法の見直しにつながるものとなった。

#### 2)

##### ① 概要(目的を含む)

「芸術学部専任・非常勤合同全体会」を平成27年3月11日に開催した。

本会では平成26年度の活動報告と平成27年度に向けた芸術学部の重点教育目標や大学の方針等の説明を行い教育目標に対して全教員が目標を共有して、教育活動に取り組むことを目的としている。

##### ② 到達目標

多面的な教育活動の実際と意味を全授業担当者が把握するとともに、教育目標の達成に専任・非常勤が一体となって取り組むことができるようにする。

### ③ 活動内容

学部長から平成 26 年度の芸術学部の教育実績報告と平成 27 年度の芸術学部の重点目標についてのレクチャーを行った後、各学科に分かれて授業運営等の実施面についての打ち合わせと意見交換会を実施した。

### ④ 評価

教授団（専任・非常勤）として教育目標の共有がなされた。本会を開催することを通して、大学が取り組んでいる教育の目標や方法と背景となる社会状況を共通の土台として、各担当者が授業実践を行える機会となっている。

## 3)

### ① 概要（目的を含む）

アクティブ・ラーニングからの手法としての「デザイン思考」に関する研修を、12 月 18 日に芸術学部全教員を対象として橋本順一教授によって拡大教授会の中で実施した。

### ② 到達目標

「デザイン思考」の概念を習得し、アクティブ・ラーニングの教育的効果を最大化するための具体的手法を実践習得することを目的とする。

### ③ 活動内容

橋本順一教授が参加したワークショップ「本場スタンフォード大学に学ぶデザイン思考マスター・クラス」の詳細報告があり、それを活かした芸術学部での適用例として「メディア・デザイン理論基礎Ⅱ」での具体的な授業報告が示され、アクティブ・ラーニングのイノベティブな発想方法が明らかになった。

### ④ 評価

この研修により、「アイデアの創出と集約」「デザイン思考の特徴の体得」「学習の振り返りを促す方法」「アイデアを具現化するステップ」などアクティブ・ラーニングのベースとなる技術の概要を習得することができた。

## (4) 調査・研究など

### ① 概要（目的を含む）

平成 26 年度芸術学部共同研究助成「芸術学部における芸術教育の内容と方法に関する研究」の一環として、参考教育機関の視察を行った。教職に特化する形で今年度新設された、芸術教育学科運営の参考となり得る、先行研究としての教育機関、ならびにカリキュラムの研究を目的とする。まず一日目、平成 27 年 2 月 24 日（火）は、独立行政法人滋賀大学教育学部を訪れ、今年度卒業生の年度まで存続された、芸術表現教育コース（音楽・美術）の運営について調査、二日目は大阪芸術大学芸術学部を視察。主に初等芸術教育学科を中心に、カリキュラム等の内容と、その最新設備の調査を行った。

### ② 到達目標

今後の学部、特に教員養成課程である芸術教育学科のカリキュラム運営と、より良い教育環境の整備に活かす事の出来る基盤研究の確立。

### ③ 活動内容

我国の芸術系大学における教員養成教育機関として、音楽と美術が一つの学科として運営されている例はいたって稀であり、その理由を探る事は、今年度既にスタートした新学科としては急務と言うべき課題である。まずは、その実情と、メリット、デメリットを探り、様々な問題を整理、調査する。また、芸術教育の設備として、最新、最善のものを探る事で、今後の教室改善の参考とする。玉川大学芸術学部としての特色を生かした教員養成の確立に向け、学科運営の大きな指針となる研究として、これを学部紀要にまとめると共に、研究成果を発表する。

#### ④ 評価

本学部からは、芸術教育学科から次の6人の教員が視察に赴いた。辻裕久教授（学科主任）、加藤悦子教授、中村岩城准教授、林卓行准教授、椿敏幸准教授、高橋愛助教、さらに、二日目の大阪芸術大学芸術学部の視察には、メディア・デザイン学科の丸山松彦助教も加わった。元国立大学の教育学部と、我が大学と同じ私立大学の開放制教員養成制度による芸術教育の実情を知り、比較検討する事が出来た事は、大変有意義であった。今後開講を予定している科目に活かす事の出来る、多くの知見を得る事が出来た。

### 4 昨年度（平成25年度）に提案された予定・課題の達成度について

- ・今年度も昨年度同様、全ての科目において、同じフォーマットによる授業評価アンケートを、春、秋の両学期において行うことができた。併せて授業成果報告書集の発行も行い、各自の授業点検と情報の共有に努めた。
- ・その他、学外セミナー等への教員派遣も積極的に行い、最新の情報を収集する事が出来た。アクティブ・ラーニングなど参加者の意識がより高められた。
- ・大学FD委員会主催の研修会については、今年度、芸術学部からの出席者を増やす事が出来た。また、欠席者にも当日の資料等を配付し、拡大教授会において研修会参加者と大学FD委員がそれぞれの研修の意義と概要を報告した。大学としてのFD活動に関する様々な情報と問題意識を共有できた。

### 5 今後（平成27年度以降）の予定・課題について

- ・授業評価アンケートは全ての科目において、同じフォーマットによる調査を予定通り行うことができた。平成27年度以降も、春学期、秋学期、年2回の実施を予定している。アンケート結果の公表方法については引き続き議論を重ね、より良い方向性を見出していきたい。
- ・芸術学部ではそれぞれの授業における学修成果を相互に参観することを推奨してきた。パフォーミング・アーツ学科は青山円形劇場、YAMAHA・玉川 Music Day、メディア・デザイン学科は相模原・町田大学コンソーシアム、ビジュアル・アーツ学科は町田市立版画美術館などと産学連携を進め、学内教員のみならず、学外者による授業参観を実施してきた。今後もそうした授業成果報告、公開発表会を積極的に行い、カリキュラム改革・授業改善のための環境作りを進めていきたい。
- ・年度末に専任教員と非常勤教員のコミュニケーションと教育目標の確認を目的とした研修会を実施した。全体会では、学部の教育目標と、今後のFD活動についてのプレゼン

テーションを行い、その後、学科ごとに改善すべき点について議論した。芸術学部に所属する専任教員と非常勤教員が一同に会することで、情報の共有を図ると共に緊密な教員連携の基礎となるコミュニケーションを深めて次年度に向けて様々な情報を共有することができた。また、こうした研修の機会をさらに広げる方向で議論を進め、専任と非常勤が一体となった教育力の充実を図っていきたい。

## § リベラルアーツ学部

### 1 FD 活動への取り組み理念・目標

本学部では、①学士課程教育の質保証、②学部・学科設置の趣旨と教育目標、③実効的なリベラルアーツ教育の実現、という観点から日頃の教育研究活動の改善へ向けた FD 活動を展開することを目標としている。

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

本学部における FD 活動の組織構成・役割は以下の通りである。

学部長・各主任…学部における FD 活動の方針について提案・助言する。

大学 FD 委員…学部における FD 活動全般をコーディネートする。また大学 FD 委員会で審議・報告された内容を拡大教授会にて報告する。

FD 研修会担当…学部で実施される専任教職員向けの FD 研修会についてコーディネートする。

※この他、所属教員全員が主体的に FD 活動に取り組む体制がとられており、教育内容・方法に関する情報交換は教員間で日常的に行われている。

### 3 平成 26 年度の活動内容

#### (1) 初年次教育の方向性に関する研修会（ディスカッション）

##### ① 概要（目的を含む）

リベラルアーツ学部の人材育成に資する、より効果的な 1 年次研修・初年次教育を実践するために、次年度以降の 1 年次研修の具体的なプランを検討する。また、研修と連動した初年次教育のあり方についても意見交換を行う。

##### ② 到達目標

次年度以降の 1 年次研修および初年次教育カリキュラムを改善する。

##### ③ 活動内容

1 年次研修の 2 日目である平成 26 年 5 月 31 日（土）10:00～12:00 に、湯本富士屋ホテルにて実施した。参加者は 1 年生担任教員、学部長、各主任であった。具体的には以下の各項目について検討を行った。

- ・次年度以降の新入生研修のあり方について
- ・新入生研修の成果のアウトプット方法について
- ・秋学期の「一年次セミナー102」のスケジュールについて

##### ④ 評価

検討内容を実践に反映させるのは平成 27 年 4 月となるため、実質的な評価はそれ以降になるが、リベラルアーツ学部の初年次教育の要ともいえる 1 年次研修の内容について一定の問題意識を共有できたため、現時点での暫定的な目標達成はできたと考えられる。

#### (2) 平成 26 年度リベラルアーツ学部救命救急研修および防災訓練

##### ① 概要（目的を含む）

学部専任教職員の救命救急および防災に関する意識を高めると同時に、教育現場において救命救急時および火災等災害発生時に迅速かつ的確な対処ができるよう、必要な知識とスキルを確認し、具体的な対処手順を実践的に理解する。

② 到達目標

救命救急時および災害発生時の迅速かつ的確な対処ができるようになること。

③ 活動内容

救命救急研修：平成 26 年 7 月 24 日（水）13:00～17:00、大学 5 号館 B115 にて実施した。AED、心肺蘇生法、基本的な応急処置法に関する研修が行われた。

防災訓練：平成 26 年 9 月 17 日（木）15:00～16:30、大学 9 号館 402 にて実施した。キャンパスセキュリティセンター職員による説明の下、災害発生時の対応方法の確認および 9 号館消防設備の使用訓練が行われた。

④ 評価

定量的な評価は実施していないが、参加教員からは、救命救急時および災害発生時の対処方法を具体的に理解できたという意見が多く聴かれた。したがって到達目標は概ね達成されたと評価できる。

(3) 平成 26 年度リベラルアーツ学部 FD 研修会

① 概要（目的を含む）

リベラルアーツ学部の教育理念を実現し、Tamagawa Vision 2020 に対応した大学教育の質保証を高めるため、学部の教育研究活動を点検調査し、専任教職員が認識を共有する。

② 到達目標

日頃の教育研究活動を教職員が点検し、教育目標や教育方法、研究活動の在り方について教職員間で認識を共有すること。

③ 活動内容

平成 27 年 2 月 19 日～20 日、湯本富士屋ホテルにおいて専任教職員約 20 名による研修会を実施し、以下の各項目について集中的に検討した。

(ア) 共同研究中間報告

- ・国語科教員養成カリキュラムに関する基盤研究とコンテンツ開発
- ・ヨーロッパにおける日本学研究

(イ) 研究倫理および研究倫理教育に関する研修

講師：本学脳科学研究所所長 木村實教授

講演タイトル：科学の健全な発展のための研究者の心得

(ウ) 大学教育棟 2014 を活用した教育研究活動の検討

(エ) 学部改革進捗状況

(オ) 次年度教育計画の検討

④ 評価

本学部における教職課程や日本学に関する教育課程の課題を把握できた。研究倫理に関する研修からは、その重要性和研究を進める上での留意点が再認識できた。さらに、今後の具体的な教育活動に関する情報の共有を図ることができ、意義深い研修会

であった。

#### (4) ICT の活用に関する研修

##### ① 概要（目的を含む）

ICT を活用して教育研究活動の効率化を図るため、今回はタブレットの操作と活用に関する研修を行う。

##### ② 到達目標

タブレットの基本的操作方法を習得し、教育研究活動で活用できるようになること。

##### ③ 活動内容

平成 27 年 3 月 19 日大学教育棟 2014 にて実施した。

##### ④ 評価

タブレットの基本的操作が可能となったが、今後各自の教育研究活動で活用していくことが課題である。

#### (5) 学外 FD セミナーへの参加

##### ① 概要（目的を含む）

外部機関が主催する FD セミナーに本学部教職員が参加し、FD に関する研修を受けるとともに、大学教育や FD 活動に関する最新の情報や研究動向を把握する。

##### ② 到達目標

学外の FD セミナーに参加し、FD に関する最新の情報を把握する。

##### ③ 活動内容

平成 27 年 3 月 13 日～14 日に行われた京都大学高等教育研究開発推進センター主催「第 21 回大学教育研究フォーラム」へ 1 名が参加（小嶋正敏教授）。「ディープ・アクティブラーニング」等のセッションへ参加した。

##### ④ 評価

大学教育と FD に関する最新の情報や他大学の活動状況を把握できた。特にアクティブ・ラーニングに関する情報と研究動向を知ることができたことは成果である。

#### 4 昨年度（平成 25 年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に提案された予定・課題は以下の通りであった。

①1 学部 2 学科編成への移行の是非とそれに伴うカリキュラムの検討を行う。

②これまでと同様、引き続き FD への意識をより高めるとともに、ディスカッションを通じた相互研修を基盤とする FD 活動の機会を多く設け、本学部教員の「教育力」と資質向上を一層図る。また、次年度こそ「研究力」の向上を目指した何らかの取り組みを少しずつでもスタートさせる。

③新カリキュラムおよび Tamagawa Vision 2020 を念頭に置いた FD 活動を続けるとともに、学部・学科・メジャーの再検討を引き続き進め、その成果を本学部の教育理念・教育目標の共有と実現に生かすべく、具体的な仕組みを構築していく。

④「玉川学」および「ブリッジ講座」の運営を通じてリベラルアーツ教育における分野

間連携を具体的に実践するとともに、引き続きその他の分野間連携プランを、教員相互の提案・議論を通じて検討していく。

- ⑤学年ごとに異なるカリキュラムの運営において、学生の学修状況（たとえば予習・復習の実践状況）や理解度を把握し、その結果を本学部における学士課程教育の質保証へとフィードバックできるよう引き続き努力する。

①に関しては、文学部とリベラルアーツ学部の再編成の方向性が打ち出されたため、その中で今後検討されていくことになる。

②の「教育力」の向上に関しては、FD 研修会等の実施や拡大教授会におけるディスカッション、および日常的な教員相互のブリーフィングなどによって概ね実践されてきたと評価できる。「研究力」に関しては、その向上に役立てるため研究倫理に関する研修を行ったが、引き続き今後の課題としたい。

③に関しては、FD 研修会等において問題認識の共有をすることはできたが、引き続き検討する必要がある。

④については、「ブリッジ講座」等の運営を通じてリベラルアーツ教育における分野間連携を具体的に実践できたが、引き続き分野間連携のあり方を検討する必要がある。

⑤に関しては、個々の教員が学生の学修状況や理解度を把握しているが、今後学部全体のカリキュラムへの反映を図っていく必要がある。

## 5 今後（平成 27 年度以降）の予定・課題について

- ①これまでと同様、大学教育の質保証を図るため、FD への意識をより高めるとともに、インターアクティブな相互研修を基盤とする FD 活動の機会を多く設け、本学部教員の資質向上を一層図り、「教育力」と「研究力」を高めていきたい。
- ②学部運営の PDCA サイクルの中に FD 活動を位置づけ、その成果を本学部の教育理念・教育目標の共有と実現に活かしていく仕組みを構築していく必要がある。
- ③大学研究室棟 2014 が平成 26 年度末に完成し、平成 27 年度から本格稼働する。教育研究環境の大きな変化であるため、新しい環境に早く適応することが課題となる。
- ④新しい教室環境を活用し、アクティブ・ラーニングの特長を生かした上で適切に取り入れ、教育効果を高めることが課題となる。

## § 観光学部

### 1 FD 活動への取り組み理念・目標

観光学部では、現在における観光の意義と役割、現状と課題を的確に理解し、適切な情報収集とその分析および異文化に対する理解を基礎に、高度な英語運用力を駆使してグローバル時代の観光ビジネス、地域活性化に貢献できる人材を養成する。

目標とする人材育成にあたり、教員全員が観光学部の理念、教育目標、そして、問題意識を共有することを目標とする。

### 2 学部における FD 活動の組織構成と役割

観光学部長、観光学科主任、教務主任、学生主任、FD 担当教員が中心となって FD 活動を実施する。学部の担当教員と大学 FD 委員は連携して活動計画を取りまとめ、主として研修会・ワークショップの運営にあたる。

### 3 平成 26 年度の活動内容

#### (1) 報告会

##### ① 概要（目的を含む）

平成 26 年 9 月 4（木）15 時 30 分～16 時 30 分

観光学部留学プログラムのあるべき体制を再考する機会とするべく、8 月 6 日（水）に行われた亜細亜大学国際交流課の西川修治氏への留学プログラムに係るインタビュー結果の報告会を実施した。玉川大学観光学部留学プログラムは、本年度、いよいよ本学観光学部の学生をオーストラリアの提携校先へ送り出すこととなった。本留学プログラムの遂行にあたり、留学する 2 年生を統括・管理する 2 年生担任業務においては、膨大な事務作業を強いられている現状がある。本留学プログラムは学部独自のプログラムとはいえ、プログラム設計時には想定されていなかった事務作業等が、本来であれば職員が担当すべき内容であったとしても、そのまま 2 年生の担任業務となってしまう、担当教員の事務負担が過剰であるとともに、当該事務作業が定着化する恐れもある。

本ヒアリング調査にご協力いただいた亜細亜大学では、26 年にわたる留学運用実績があり、中でも留学プログラム、並びにその業務・運営においても、一日の長を有するものである。それらを観光学部 FD で検討することは、今後、本学観光学部の留学プログラムを遂行するにあたり、特に運営業務の側面から重要な指針となるのではないだろうか。留学プログラムにおける元来あるべき教員・職員のなすべき業務はどうあるべきかを本ヒアリング調査を通じて再確認することを目的とする。

##### ② 到達目標

観光学部留学プログラムの運営にあたり、本来あるべき教員の業務とは何か、そして、大学として学生をどう支援すべきかを再確認する。

##### ③ 活動内容

下記の報告内容に沿って、約 1 時間程度議論した。

## 【ヒアリング質問項目】

1. 留学業務に係る教員と職員の仕事内容
2. 現地スタッフの業務内容
3. 過去の留学に係るアクシデントとその対応
4. 留学先におけるインターンシップの試み

### 1. 留学業務に係る教員と職員の仕事内容

#### 職員の業務内容

- ・提携校との連絡一般
- ・留学希望者の募集とその相談
- ・留学説明会（募集と行く学生向け）
- ・名簿作成
- ・旅行会社との交渉全般
- ・ビザ発行手続
- ・保護者との連絡

#### 教員の業務内容

- ・現地カリキュラムの検討と改善
- ・現地授業の立ち上げ（新科目設置で現地教員との交渉及び視察）
- ・留学生向けのテーマ設定
- ・現地学生インタビュー
- ・現地の学生指導（主に問題を起こした学生向け）
- ・成績の振り替え

\*本業務内容は留学プログラム発足当時から変更なし

### 2. 現地スタッフの業務内容

#### 現地スタッフ配置理由

- ・本プログラム（セントラルワシントン、イースタンワシントン、ウェスタンワシントン）はオーダーメイドであるため、設置当初から必然的に設置しなければならなかった。
- ・出張コスト削減のメリットもある。
- ・レベルの高い学生はアリゾナ大学、サンディエゴ大学に留学する。その際には、現地のホームステイエージェントを利用してもらう。
- ・現地専属スタッフ（各大学ごと3名）は提携校から干渉がなく、クリエイティブなプログラムを作成してもらっている。さらに、本学との雇用契約であるため、常に緊張感のある対応になっている。
- ・学生の満足度も高い。
- ・プログラムの充実度も高い。
- ・単なる留学プログラム以上の価値が創出されている。

- ・同時トラブル時には優先順位が問われる場合もあるため、専任スタッフがあることで円滑でスムーズな対応が可能になる。

### 3.過去の留学に係るアクシデントとその対応

- ・トラブルの多くはホームステイがらみ。
- ・死亡事故2件はすべて水のアクティビティであったため、現在は水のアクティビティは禁止事項となっている。
- ・クレーム対応の窓口は、国際交流課であるため、必要に応じて実行委員（各学部の担当教員）や教務主任、学部長へ連絡がいく。

### 4.留学先におけるインターンシップの試み

- ・現地日本語の語学学校
- ・日米協会
- ・旅行会社
- ・ホテル
- ・シドニーではOKC（エージェント）を利用して、インターンシップを実施している。もちろん、単位が絡むため現地授業も教員が視察済み。費用は5万円/人程度である。

## ④ 評価

本インタビューを通じて、下記の事項を指摘できよう。

- ・留学に係る職員と教員の業務内容の線引きは鮮明である。それは、教員はあくまで教育業務に徹し、それ以外の雑務全般は留学担当職員が担うという点である。したがって、次年度以降は、現在2年生の担任業務となっている留学手続きに係る業務全般は他へ移譲することが望ましい。
- ・留学手続きに係る業務全般は他へ移譲するにあたり、次の2つの方法が考えられる。
  1. 助手を雇用し、留学手続きに係る業務全般を任す。
  2. 本学の国際教育センター等へ留学手続きに係る業務全般を移譲する。
- ・現状の留学支援体制であると、現地スタッフが介在しないため、トラブル発生時の迅速な対応は不可能であり、それゆえ、高い学生満足度は望めそうにない。したがって、再度、現地のエージェントとの契約を検討する必要がある。
- ・本学部の留学プログラムにおけるメルボルンでのインターンシップ事項は未定項目が多いため、いっそのことOKCを利用するのも妥当な選択肢であろう。もちろん、エージェント介入に係る費用増加分は次年度以降の学費へ反映させる必要がある。

## (2) ワークショップ

### ① 概要（目的を含む）

平成26年10月23日（木）17時30分～19時00分

「就職活動開始時期変更に係る企業側および大学側の取組とその対応」と題して、アルプス技研人事部國廣美乃氏から講演いただいた。本講演会の目的は、平成 27 年度卒業生から就職活動の開始時期が 4 年次 4 月に移行するにあたり、企業の人事および大学の就職課がそれぞれ異なる対応を迫られるため、本移行がもたらす影響、および、その理解を深め、留学先から帰国した学生の就職活動対策に活用することである。

#### ② 到達目標

就職活動開始時期変更に伴う影響および対策に関して、一定の見解を示せるようになる。

#### ③ 活動内容

質疑応答も含め、下記の内容に沿って約 1 時間半もの間講演いただいた。

1. 平成 27 年度就職環境
2. 平成 28 年 3 月卒業生の就職活動スケジュール
3. いまどきの学生の特徴
4. 就職活動・採用・指導を考える

#### ④ 評価

平成 27 年度卒業生から就職活動の開始時期が 4 年次 4 月に移行するにあたり、本移行がもたらす影響、および、その理解を深めることができたのではないだろうか。事実、國廣美乃氏による講演では、講演終了後の質疑応答では数多くの質問が寄せられ、教員のその関心の高さが伺えた。

### (3) 調査

#### ① 概要（目的を含む）

平成 27 年 3 月 12 日（木）14 時 00 分～15 時 00 分

学生の留学先であるメルボルン提携校の大学箇所を巡り、学生のインタビューを通じて、留学している学生の状況を理解する。

#### ② 到達目標

留学する学生に対して、メルボルンに関する一定の見識を示せるようになる。

#### ③ 活動内容

担当教員数名がメルボルン提携校を視察したうえ、学生らとの交流を通じて現状を把握し、帰国後、調査結果を報告する。

#### ④ 評価

提携先大学への留学が半年を越え、学生の成長した様子が報告されるとともに、現地での様々な問題点が浮き彫りとなった。これら問題については、今後、他学部ではあるが、英語教育学科が同様の留学プログラムが実施されることも考えれば、学部を超えて大学全体として対処する必要があると思われた。

### (4) 学生による授業評価アンケート

#### ① 概要（目的を含む）

観光学部観光学科の科目において、授業改善を目的とした授業評価アンケートを実施した。今年度は春学期および秋学期に実施している。

② 到達目標

学生の学修達成度を測り、改善点を踏まえて今後の授業運営に資すること。

③ 活動内容

観光学部開講科目でマーク式、記述式の授業評価アンケートを実施した。データの集計結果は科目担当教員に配付し、活用している。

④ 評価

観光学部初年度授業評価アンケートの結果は下記の通りである。

【春学期授業評価アンケート全体結果】

観光学部全体								
回答数(全体): 479								
分野	設問	平均値	3時間以上	2時間～3時間未満	1時間～2時間未満	1時間未満	まったくしていない	無効回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.7	6.1%	13.2%	33.1%	38.8%	8.8%	2
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.5	4.2%	10.4%	28.1%	41.6%	15.6%	6
		この授業の平均値	よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない	無効回答数
			5	4	3	2	1	
II	3 この授業に積極的に参加した。	4.1	37.2%	40.7%	16.5%	4.8%	0.8%	0
	4 シラバスは受講に役立った。	3.4	18.2%	28.7%	37.3%	10.5%	5.2%	2
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	34.9%	44.5%	15.9%	4.2%	0.6%	0
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.2	40.5%	40.9%	15.1%	2.7%	0.8%	2
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.1	37.3%	39.4%	19.1%	3.1%	1.0%	2
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.1	35.6%	40.8%	18.2%	4.2%	1.3%	1
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	36.5%	42.8%	15.7%	4.4%	0.6%	0
	10 基本的知識が得られた。	4.2	40.2%	45.0%	12.6%	1.9%	0.4%	1
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	33.7%	42.7%	18.2%	4.6%	0.8%	1
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.0	31.3%	43.2%	20.5%	4.4%	0.6%	0
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.0	28.7%	44.8%	21.1%	4.4%	1.0%	1
	14 学問的興味をかきたてられた。	4.0	33.3%	38.9%	20.3%	5.0%	2.5%	1
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	36.8%	44.4%	15.7%	2.5%	0.6%	1
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.1	36.3%	39.0%	19.4%	4.0%	1.3%	0
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.0	36.0%	33.3%	23.2%	5.0%	2.5%	1
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	52.0%	29.6%	13.2%	4.2%	1.0%	0
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.2	49.9%	31.1%	13.6%	4.4%	1.0%	0

【秋学期授業評価アンケート全体結果】

観光学部全体								
回答数(全体): 295								
分野	設問	平均値	3時間以上	2時間～3時間未満	1時間～2時間未満	1時間未満	まったくしていない	無効回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.9	7.9%	20.9%	37.0%	24.7%	9.6%	3
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.7	6.2%	15.8%	30.8%	31.5%	15.8%	3
		この授業の平均値	よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない	無効回答数
			5	4	3	2	1	
II	3 この授業に積極的に参加した。	4.2	36.6%	45.1%	16.9%	1.4%	0.0%	0
	4 シラバスは受講に役立った。	3.8	21.4%	38.6%	35.9%	2.0%	2.0%	0
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.3	39.7%	49.5%	9.5%	1.0%	0.3%	0
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.4	47.3%	42.9%	9.2%	0.7%	0.0%	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.3	43.4%	43.1%	12.2%	1.0%	0.3%	0
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.3	40.7%	44.7%	13.6%	1.0%	0.0%	0
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.2	37.6%	45.8%	14.2%	1.7%	0.7%	0
	10 基本的知識が得られた。	4.3	44.4%	43.4%	11.9%	0.3%	0.0%	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.2	36.9%	44.7%	16.6%	1.4%	0.3%	0
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.1	33.2%	46.4%	16.9%	2.7%	0.7%	0
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.1	32.5%	47.8%	16.3%	2.7%	0.7%	0
	14 学問的興味をかきたてられた。	4.1	37.1%	43.9%	16.3%	1.7%	1.0%	1
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.2	40.0%	45.8%	13.2%	0.7%	0.3%	0
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.2	38.6%	43.7%	15.9%	1.4%	0.3%	0
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.2	37.8%	44.9%	15.6%	1.4%	0.3%	1
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	47.1%	36.3%	14.2%	2.4%	0.0%	0
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.3	47.8%	34.9%	12.9%	4.4%	0.0%	0

#### (5) 教職員相互の授業公開と参観

##### ① 概要（目的・到達目標を含む）

教員相互で授業を参観し、各教員の教授法、教授内容について授業改善を行う。

##### ② 活動内容

秋学期に2名の教員の協力のもと、参観授業を行い、授業改善につながるよう担当教員と参加教員による振り返りを行った。

##### ③ 評価

参観できた教員が少なかったため、次年度は参観教員数を増やせるよう検討の余地がある。

#### 4 昨年度（平成25年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度の予定はすべて達成した。そのほか、昨年度と同様に期初にはなかった留学業務に係るインタビュー報告会を実施したが、結果的には今後の留学運営に関して大きな一助となったように思われる。こうした臨機応変に必要と思われるFD活動は、今後も実施していきたい。しかし、授業参観に関してはその参観人数が少なく、参観人数の増加については引き続き検討事項である。

#### 5 今後（平成27年度以降）の予定・課題について

平成26年度と同様に、学部FD研修会、講演会、参観授業、授業評価アンケートを実施する。次年度は観光学部の学生が留学から帰国する初年度であり、学生らの英語力の維持や更なる向上に向け様々な試みが必要であろうから、こうした試みに対して種々検討することが予想される。一方で、TOEICの留学基準未達によって留学が1年間見送られた学生のフォローをどのように実施していくのか、その点についても検討しなければならないだろう。

また、次年度は学部開設から3年となる。ここで、玉川大学観光学部が観光業に興味がある高校生にとってどのような位置づけにあるのか、大手予備校等の見解を拝聴できる機会を設けたいと考えている。また、留学から帰国した学生がどのようにSPIの対策をとっていくべきか、そして、現在主流となっているSPIとはどのようなものなのかについて、外部講師から講演いただく予定である。

さらに、本年度のヒアリング報告会は年度当初には予定されていなかったため、臨機に開催したFDであったが、結果的にその有用性は極めて高かった。完成年度を迎えていない観光学部では、学部全体として共有すべきこうした事案については、臨機にFDの一環として扱うこともあろう。

結果として、目的として掲げられていた観光学部の理念、教育目標、そして、問題意識の共有については、ある程度達成されたと思われる。完成年度までは、紋切型のFDになることなく、流動性を生かしつつ、有用性の高いFDを実施していく。

### 3. 教師教育リサーチセンターの活動

#### 1 FD・SD 活動への取り組み理念

本センターは、教員養成課程を運営するため、大学附置機関として設置された。主な業務内容としては、教職課程における学生支援と、教職に関する研究活動支援がある。研究活動支援の中には、教員養成における教職課程 FD・SD 研修も含まれており、教員養成の質を向上させることを理念・目標としている。

#### 2 教師教育リサーチセンターにおける FD・SD 活動の組織構成と役割

センター長、事務長、課長を中心に FD・SD 活動を計画し、課長補佐以下職員で研修会開催の実務を担当している。

#### 3 平成 26 年度の活動内容

##### (1) 教員養成フォーラム

###### ① 概要（目的を含む）

玉川学園創立 85 周年を記念し、「これからの教員に求められる資質能力と今後の教員養成」をメインテーマとし、フォーラムを開催した。本学教職員をはじめ、近隣教育委員会、全私教協加盟大学、教育実習先、学会関係者等、教師教育・教員養成に関わる多くの方々に広報を行った。

教員養成の現在と今後の課題や、教師に求められる能力等、講演やシンポジウムを通して、今後の教員養成の在り方について、多くの方々と共に考える機会とした。

###### ② 到達目標

200 名以上の出席者を目標に掲げた。

###### ③ 活動内容

平成 26 年 10 月 25 日（土）13:00～17:30 於：玉川学園講堂

テーマ：『これからの教員に求められる資質能力と今後の教員養成』

###### 【プログラム】

1. 「オープニング」芸術学部玉川太鼓演奏
2. 「開会挨拶」小原芳明（玉川大学学長）
3. 記念講演「違うから面白い、違うから素晴らしい」  
宮本亜門（演出家）
4. 特別講演「今後の教員養成の方向性」  
遠藤利明（衆議院議員、自民党教育再生実行本部本部長）
5. 基調講演「初等中等教育を担う教員の資質能力と養成大学への期待」  
小松親次郎（文部科学省初等中等教育局長）
6. シンポジウム「教師に求められる力量と養成大学への期待」  
貝ノ瀬滋（三鷹市教育委員長、教育再生実行会議委員）  
中島美恵（町田市立南大谷小学校教諭）  
藤田朋子（女優）  
森山賢一

（玉川大学教師教育リサーチセンター長、教職大学院・教育学部教授）  
コーディネーター：田子 健（東京薬科大学教授）

7. 「閉会挨拶」高橋貞雄（玉川学園理事、文学部教授）

④ 評価

当日は約 230 名の出席者となり、盛況に終了し、目標達成となった。

(2) 平成 26 年度 教職課程 FD・SD 研修会

① 概要（目的を含む）

各学部長、学科主任、教務主任、教務担当、教職担当は原則出席とし、関係部処職員にも出席を促した。文部科学省初等中等教育局教職員課教員免許企画室長の山下恭徳氏に講師を依頼し、以下の内容（目的）に基づく研修会とした。

② 到達目標

以下活動内容の「内容（目的）」に示されているように、教科教育や制度などの今後の方向性についての共通認識を持つ。

③ 活動内容

日 時：平成 27 年 2 月 24 日（火）10：00～11：30

場 所：視聴覚センター101 教室

対 象：全学専任教職員

内 容（目的）：現在、教員に関する養成・採用・研修について、教育委員会制度や学制、小中一貫教育、小学校英語教育、道徳教育、ICT 教育等、教科教育や制度が大きな改革期を迎えている。教員養成を担う大学としても、教員、職員を含めて、これらの制度改革の動きを理解することが重要である。このため、改革の中心となる文部科学省の先生に、最新の動向や方向性について講演をいただき、共通認識を持つ。

【プログラム】

1. 挨拶 森山賢一（教師教育リサーチセンター長）

2. 講演 「最新の教員養成の政策動向」

山下恭徳（文部科学省初等中等教育局教職員課教員免許企画室長）

④ 評価

山下氏より、教育改革推進の背景および、教育再生実行会議・中央教育審議会における教員養成の課題解決に向けた審議の経過と、今後の方向性について解説いただいた。参加した大学教員、職員としてのそれぞれの立場で、教科教育や制度などの今後の方向性について、理解を深めることができた。

4 昨年度（平成 25 年度）に提案された予定・課題の達成度について

平成 26 年度は、創立 85 周年記念「教員養成フォーラム」、および「教職課程 FD・SD 研修会」1 回を開催するように計画した。計画通り実施することができ、それぞれの目標も達成することができた。

5 今後（平成 27 年度以降）の予定・課題について

「教員養成フォーラム」、および「教職課程 FD・SD 研修会」1 回を開催するように計画したい。「教員養成フォーラム」は、「教職大学院学校教育実践研究会」、「IB 教師養成フォーラム」との統合により、大学全体としての教員養成への取り組みをふまえた内容で開

催を予定している。

## 4. ELF センターの活動

### 1 FD・SD 活動への取り組み理念

教員ひとりひとりの教育の質が ELF プログラムの成果を決定づけるというのが ELF センターの基本的な理念である。多くの ELF の授業が非常勤講師によって担当されているため、センターは専任教員だけでなく非常勤講師の資質向上にも力を入れてきた。また、センターの教員はさまざまな文化的背景を持っているため（ウクライナ、インド、韓国、フィリピン、ニュージーランド、アイルランド、マケドニアなど）、FD 活動にはこのことを考慮した試みが必要であることが認識されている。

### 2 ELF センターにおける FD・SD 活動の組織構成と役割

ELF センターの FD 活動の告知や内容は ELF センター会によって決められている。予算やサポート等もこの会議で審議される。FD 活動の内容が決定された後、ELF の作業部会の教員（ELF センター所属の専任教員）がその企画と実施を引き継ぐ。作業部会内にさまざまな分野（TOEIC、e-learning など）に特化した下位グループが存在し、Blackboard や ELF ワークショップなどの FD 活動を担当する。

### 3 平成 26 年度の活動内容

#### (1) 講演会・ワークショップの開催

##### ① 概要

ELF センターは平成 26 年度に多数の大規模な学会やフォーラムの後援を行ってきた。全国語学教育学会（JALT）や大学英語教育学会（JACET）と連携することで、二つの講演会を共同で主催し、ELF フォーラムの広報を行うことができた。

##### ② 達成目標

それぞれの FD 活動において非常勤講師に参加を薦めてきた。これらの活動はセンターと学会との関係および教員同士のつながりを強める役割を果たした。さらに、これらの活動はセンターの教員が一堂に会し、より良い教育実践に関する考えや研究を共有する機会となった。

##### ③ 活動内容

以下のワークショップや発表大会が玉川大学で開催された。

- ・コンピュータを使った英語教育に関するワークショップ（全国語学教育学会（JALT）横浜支部主催研究会）
- ・観光英語教育に関する研究会（大学英語教育学会関東支部）
- ・The 2015 Center for ELF Forum（アジアでの言語教育に関する研究発表大会）

##### ④ 評価

ELF センターは参加者を対象にアンケート調査を実施し、上記の活動においてそれぞれ約 50 人が参加し、全体の 67%の参加者より内容に満足したという回答を得た。また、改善点についても意見を得ることができた。具体的には、異なる教室で行われる発表を同じ時間に設定することで参加者が移動しやすくする、参加者が使用するさ

さまざまな種類のパソコンに対応できるようにプロジェクターを設定しておくべき等の建設的な意見が得られた。

## (2) 研究会・ワークショップなど

### ① 概要

- ・ Blackboardの使い方に関する理解を深めるワークショップや講演会を開催した。
- ・ ELFの理念に関する講義や意見交換を実施した。
- ・ TOEIC推進ワークショップを開催した。(IIBC協賛)

### ② 達成目標

- ・ 非常勤講師がBlackboardの仕組みを理解し、円滑に利用できるようになる。
- ・ ELFの授業においてブレンド型学修（通常授業にオンラインを取り入れる学修）や自主的学修を積極的に取り入れることができるようになる。
- ・ ELF 研究について最先端の知識を深める。
- ・ ELF の理念について教員間で知識を深める。
- ・ TOEIC の指導についてのアプローチを教員間で共有する。

### ③ 活動内容

- ・ 非常勤講師対象 Blackboard ワークショップ（平成 26 年 5 月 12・13 日、10 月 29・30 日）
- ・ 鈴木彩子文学部比較文化学科准教授による講演会「ELF 研究の現状について」（平成 26 年 6 月 17 日）
- ・ マクブライド・ポール ELF センター助教とレイクセンリング・アンドリュース ELF センター助教による講演会「ELF 研究の現状について」（平成 26 年 10 月 6 日）
- ・ IIBC 協賛 TOEIC 推進ワークショップ「大学英語教育における TOEIC スコアの活用について」（平成 26 年 8 月 4 日）

### ④ 評価

ELF センターは Blackboard のコンテンツマネジメントシステム (CMS) を多用する。ほぼ全ての ELF の授業でこのシステムを授業内の活動、評価、反転授業の目的で使用している。二人の ELF センター所属の教員が国際 Blackboard 学会において多大な影響を与えた教員を称賛する賞にノミネートされた。

ELF および言語意識に関するワークショップは教員の授業に対するアプローチに影響を与えてきた。ELF 所属教員対象のアンケート調査では、教員のほとんどが現在 ELF の概念をどのように授業に生かすかを考慮していることが分かった。さらに、ELF センターが立ち上げた The Center for ELF Journal には多くの教員が研究論文を投稿し、研究に対しても積極的な態度が見られた。これらの教授アプローチの変化は学生の授業評価からも見る事ができた。春学期後と秋学期後の学生アンケートを比較したところ、秋学期の結果の方が学生の ELF に対する理解がより深く、自分たちに与える影響を理解しているようであった。

### (3) ELF センター教員オリエンテーション

#### ① 概要

- ・ ELFセンター教員のオリエンテーションを実施した。

#### ② 達成目標

- ・ ELF研究について最先端の知識を深める。
- ・ ELFの理念について教員間で知識を深める。

#### ③ 活動内容

- ・ ELF教員のオリエンテーション（平成27年3月25日）

#### ④ 評価

オリエンテーション後に参加者を対象にアンケート調査を実施した。参加者は 35 名で、19 名がアンケートに回答した。次回のオリエンテーションにおいて改善すべき点としては、非常勤講師（特に新採用の講師）に ELF 授業の運営方法についてより詳細な情報を与え、使用する教科書や Blackboard についてもより多くの説明をする必要がある点で挙げられた。

### (4) 学生による授業評価アンケート

#### ① 概要

平成 26 年の春学期と秋学期の最後に ELF センターはオンラインで授業評価アンケートを実施した。学生は授業の中でスマートフォンまたはパソコンを使用してアンケートに回答するように指示された。アンケートは 35 項目あり、学生は教科書、教授方法、Blackboard システム、TOEIC、ELF そのものに関する意識、チューター制度、多読などについて評価した。調査結果は教育プログラム策定の基礎資料となり、それぞれの教員にも自身の授業運営改善のために共有されている。

#### ② 達成目標

評価アンケート調査の目標は学生の ELF プログラムや教員の教授アプローチに対する観点や評価を得ることにあった。また、調査結果はそれぞれの教員に自分の教授法に対する学生の評価をフィードバックするという目的もあった。

#### ③ 活動内容

春学期授業評価アンケートを 1,361 名の学生に対し実施し、秋学期授業評価アンケートを 1,258 名の学生に対し実施した。

#### ④ 評価

これらのアンケートのデータは ELF プログラムに対する報告として使用され、平成 27 年度の教育プログラムの構築のために使用されてきた。学生は授業に対してとても満足しているという結果であった。

### (5) 教員による授業内容アンケート

#### ① 概要

平成 26 年の春学期と秋学期の最後に ELF センターはオンラインで教員対象のアンケートを実施した。アンケートは 20 項目あり、教員は教科書、教授方法、Blackboard システム、TOEIC、ELF に対する意識、センターから受けるサポートの質について

評価した。調査結果は教育プログラムの計画や研究の目的で使用された。

② 達成目標

多様な教員のニーズにどのように応え、より効果的にサポートを行うかについての情報を収集することが目的であった。春学期の回答率は 53%であり、秋学期はより高い回答率を得ることが目標となった。

③ 活動内容

春学期アンケートを 21 名の教員に対し実施し、秋学期アンケートを 31 名の教員に対し実施した。

④ 評価

秋学期には 88%の教員から回答が得られた。これらのアンケートから得られた情報は教科書の選定に役立ち、教員のサポートをどのように効果的に行うかについて知ることができた。また、教員の ELF に対する理解が深まっていることがアンケートから知ることができた。

(6) ジャーナルの出版

① 概要

平成 27 年 3 月、ELF センターは 2 人の査読者がそれぞれの投稿論文を審査する The Center for ELF Journal を立ち上げ、初回号が出版された。

② 達成目標

ジャーナルの達成目標は以下の項目が含まれる。

- ・ 授業運営を改善する。
- ・ 自発的学修についてのアイデアを共有する場を設ける。
- ・ 教員間で高い学識を探究する。
- ・ ELF に対する学識を共有する。
- ・ ELF センター所属の教員に効果的な FD の場を設ける。

③ 活動内容

- ・ The Center for ELF Journal 第 1 巻

④ 評価

The Center for ELF Journal は教員に配布され、筆者自身も出版されたものに満足しているようであった。ELF センターはこのジャーナルをオンラインで閲覧できるように準備している。こうすることでより多くの研究者が我々の論文を手にとることができ、他の論文にも引用されるようになると考えられる。

4 今年度（平成 26 年度）に提案された予定・課題の達成度について

1 つの活動を除き、今年度初めに提出された全ての予定・課題が実施された。ELF の講演がキャンセルされたが、ELF センターの教員がその代わりに発表を行った。センターは 3 つのジャーナルの出版に関わり、その中でも大きいものがセンター発刊のジャーナルであった。センターは、ELF とブレンド学修に焦点を当て、研究活動にも活発であった。表 1 は平成 26 年度の ELF 専任教員の研究活動をまとめたものである。41 の学会発表を実施し、20 本の論文を投稿・出版した。

表 1. 平成 26 年度の ELF 専任教員の研究活動

発表・出版	数
国際発表	22
国内発表	19
国際出版	7
国内出版	13

#### 5 今後（平成 27 年度以降）の予定・課題について

今年度、ELF の授業規模は拡大し、2,500 人の学生の英語教育を担うことになった。また、40 人を超える、さまざまな国籍の専任教員と非常勤講師を抱えている。FD 活動にはこのことを考慮した試みが必要であることが認識されている。我々は以下の項目の実施によって ELF プログラムがより効果的に運営されることを期待している。

1. 効果的な教員オリエンテーション
2. Blackboard と e-learning のワークショップ
3. ELF の概念を生かした教授法に関する講義
4. 学会と共同で実施される英語教育に関する研究会
5. 学生や教員による授業評価アンケート

## Ⅱ 教員研修

### 新任教員研修会

平成27年度採用の新任教員(助教以上)に対し、大学FD委員会の主催により、関係各部の協力・連携のもと研修会を実施した。この研修会は平成14年度より開始されたもので、13回目の開催となる。参加者12名で、2日間の日程で行われた。

日 時:平成27年3月4日(水) 10:00～17:20 \*18:00より、懇親会開催  
3月5日(木) 10:00～15:30

場 所:教学事務棟3F会議室

対 象:平成27年度採用の助教以上の新任教員

研修目的:・玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を理解する。

・専任教員としての業務に必要な知識を得る。

到達目標:・玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を他者に説明することができるようになる。

・専任教員としての業務を理解し、遂行することができるようになる。

#### (1) 研修プログラム内容

##### 1日目:3月4日(水)

10:00	開始/研修説明	学士課程教育センター
10:05	開催にあたって	小原芳明 理事長
10:25	新任教員自己紹介	学士課程教育センター
10:40	講演「玉川大学の教育理念」	高橋貞雄 高等教育担当理事
12:00	昼食	
13:00	キャンパス・ツアー	人事部
14:20	休 憩	
14:30	本学の ICT を活用した教育 玉川大学共通アカウントについて	e エデュケーションセンター
15:50	Notes システムと Notes 掲示板の活用	総務部情報システム課
16:10	玉川学園の個人情報保護方針について	教育企画部教育環境コンプライアンス課
16:40	質疑応答/翌日の予定説明	学士課程教育センター
16:50	キャンパス・カード用写真撮影	DTP 制作課
17:20	終 了 (一時解散)	
18:00	懇親会	大学 FD 委員会
20:00	終 了	

2 日目：3 月 5 日（木）

10:00	本日の研修説明	学士課程教育センター
10:10	教学事項 ・玉川学園の組織機構／玉川大学の概要 ・各種運営担当、担任業務、教務指導・学生指導 ・年間授業計画 ・学則・規程等（授業、休講、補講、試験、成績等） ・教学事務手続要領（研究費、出張(国内外)等）	教学部 教務課/授業運営課/学務課
11:30	生活上の学生指導について	杉本和永 学生センター長
12:00	昼 食	
13:00	講演「これからの大学に必要なこと」	菊池重雄 教学部長
14:50	研究者情報システムについて	教学部教務課
15:00	質疑応答／まとめ	学士課程教育センター
15:30	終 了	

(2) 配付資料・参考資料

資料 No.	資料タイトル	担当部処
なし	平成 27 年度新任教員研修会<研修プログラム>	人事部研修センター
	平成 27 年度新任教員研修会 出席者一覧	
	大学教員の勤務について 新しく加入者になられる皆さんへ(共済事業) WELBOX 会員の皆様へ	人事部人事課
	玉川学園 玉川大学 総合パンフレット	教育企画部キャンパス インフォメーション センター
	小原國芳『全人教育論』	玉川大学出版部
	玉川学園編『愛吟集』	玉川大学出版部
	「全人 2015 年 2 月号」	玉川大学出版部
	1	「玉川大学の教育」
2	玉川学園案内図(キャンパスツアールート)	人事部研修センター
	平成 27 年度新任教員研修会 キャンパス・ツアー資料	
3	ICTを活用した教育	e エデュケーションセンター
	1-1 新規 学内 LAN 利用アカウント申請書	
	5-1 学内 LAN 接続機器登録申請書	
	e-Education NewsLetter 2010 Vol.1/2013 Vol.1	
	学内システム利用ガイド(教員用)暫定版	

4	「コンプライアンス方針について」	教育企画部 教育環境コンプライアンス課
	学校法人玉川学園コンプライアンステキストブック 2012.4	
	学校法人玉川学園個人情報保護テキストブック 2012.4	
	よくわかる個人情報保護のしくみ《改訂版》	
	写「文部科学省所轄事業分野における個人情報保護に関するガイドライン」(冊子)	
5	学校法人玉川学園組織機構 玉川大学の概要 担当業務等について	教学部教務課
	新任教員研修会 教学事項【授業運営課】	教学部授業運営課
	ご着任にあたって	教学部学務課
6	教職員のための学生支援要項 2014 (冊子)	学生センター
	2014 Student Advisory Service	
	2014 ハラスメントの防止	
	新入生の保証人の皆様へ	
7	「これからの大学で働くということ」	菊池 重雄 教学部長
8	資料1 研究者情報システム ReaP 教員用マニュアル(説明会用抜粋)	教学部教務課
	資料2 研究者情報システム ReaP 管理者・教員共通マニュアル(説明会用抜粋)	

### (3) 実施の成果

本学における教育について、昨年度に引き続き、高等教育のコンテキストから参加者に理解してもらえようような講演の時間を設けた。「玉川大学の教育理念」そして「これからの大学に必要なこと」という2つの講演により、専任教員としての業務に必要な教学事項や学生指導、個人情報保護に関する事項などとあわせ、大学やそこで働く教員に期待されていることが何かを明確に伝えることができた。研修会の運営にあたっては、全体を通して受講者が参加しやすく過ごしやすい空間・環境を整えることを心がけた。

研修内容・資料・講師の説明については、報告書の回答者全員が、「とても充実していた」あるいは「充実していた」と回答している。

今回の研修のよかった点についてのコメントは、次のとおりである：

- ① 大学の運営システムや学生との付き合い方の注意点について事前に知ることができ助かった。現職員の方や新規採用の同期と知り合うことができ、いろいろな情報交換や交流ができて非常に有意義だった。
- ② 菊池教学部長の話が分かり易く、大学の方向性も把握でき、とても役に立って良かった。
- ③ 玉川大学の理念、様々な取り組み、それから大学の持つ“空気”が感じられて良かった。
- ④ 玉川大学で働くということに対して、改めて考える機会を頂き、感謝申し上げます。

ます。4月から着任される諸先生方と一緒にできて大変刺激を受けました。

- ⑤ 非常勤をさせてもらっていた際に、何となく理解できていた部分のもっと深いところを教えていただいた。
- ⑥ 玉川大学の教員として必要な基本情報が大変よくわかりました。
- ⑦ シラバス作成について等の具体的な情報を伺うことができてよかった。
- ⑧ **It was very informative, and it was very well balanced. Thank you very much.**
- ⑨ キャンパス・ツアー、玉川学園歴史、全人教育の話はとても良かったです。

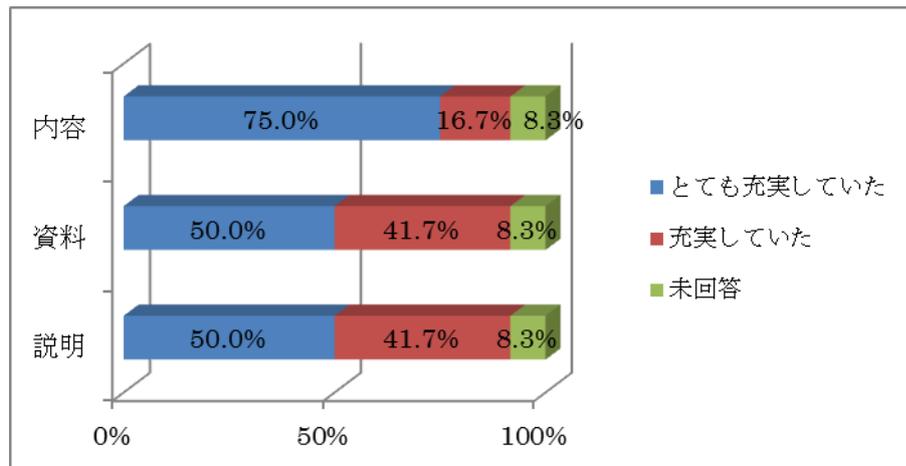
その上で、改善希望として、次のようなコメントがあった：

- ① トイレ休憩の時間を少し(5分程度)はさんでほしかった。
- ② 今後の研修時、可能であれば5分程度の休憩があると嬉しいなと思いました。
- ③ 菊池教学部長の話は、スケジュールが合わなかったのだろうが、1日目で聞くべき内容だと感じた。
- ④ プロジェクタでスクロールを多用するのは、あまりよくないのではないのでしょうか。
- ⑤ 実際に動かしたり、入力したりすべき箇所については、そのような作業を用いて理解を深めたかった。
- ⑥ できればアカウントがあって作業しながらできれば良かったです。その方が4月にやる際に困らないと思います。
- ⑦ 講義の進め方などについて具体的なアドバイスがほしかった。

また、要望・感想として、次のようなコメントがあった：

- ① 資料の準備やお弁当・デザートの手配などもして頂きどうもありがとうございました。
- ② 私立大学では、トップ(学長)のVisionが非常に重要だと思うので、お忙しいのだとは思いますが、学長からVisionについての話を聞ければ良かった。
- ③ 直接的な情報量もそうですが、その中に含まれる内容量の膨大さに圧倒されています。理解には少し時間がかかりそうです。
- ④ 有意義な時間でした。ありがとうございました。
- ⑤ 研修を通じて、玉川学園の教育が教員と職員が一丸となって作りあげられているものであること、またそのスタッフの一員となるのだということを強く意識することができました。ありがとうございます。

＜報告書データ集計 —内容、資料、説明について—＞



これらの意見から、本研修会の目的・到達目標は達成できていると評価できる。同時に、本研修会が新任の先生方との教育・研究活動に向けた良好な関係構築に役立つものであったと考えられる。

次年度の開催に向け、引き続き、研修内容や提示資料の工夫と質の向上に努めたい。

以上

### Ⅲ コア科目およびユニバーシティ・スタンダード科目の 「授業評価アンケート」

---

#### 1. アンケート実施概要

##### (1) 概要

平成 26 年度春・秋学期においてそれぞれ最終授業にて実施した。対象科目はコア科目及びユニバーシティ・スタンダード（以下、US）科目であるが、コア科目については、学期により対象科目群を限定している。

春学期：コア科目 言語表現科目群及び社会文化科目群（但し、実験実習実技科目は除く）  
US 科目（但し、実験実習実技科目、教職関連科目群、資格関連科目群、工学部開講の US 科目、その他一部の科目は除く）

秋学期：コア科目 自然科学科目群及び総合科目群（但し、実験実習実技科目は除く）  
US 科目（但し、実験実習実技科目、教職関連科目群、資格関連科目群、工学部開講の US 科目、その他一部の科目は除く）

実施担当者数、実施開講クラス数及び回答学生数は次のとおりであった。

実施担当者数：春学期＝212 名／217 名（97.7%）

秋学期＝200 名／206 名（97.1%）

実施開講クラス数：春学期＝371 クラス／388 クラス（95.6%）

秋学期＝339 クラス／347 クラス（97.7%）

回答学生数：春学期＝11,470 名／13,633 名（84.1%）

秋学期＝11,288 名／13,539 名（83.4%）

##### (2) 実施時期

春学期：7 月 17 日（木）～7 月 23 日（水）

秋学期：1 月 19 日（月）～1 月 23 日（金）

※春・秋学期ともに一部の科目については補講・試験期間中に実施。

##### (3) 実施方法

春学期・秋学期ともに、科目担当者がアンケート用紙を配付、実施した。回答用紙の回収についてはクラスの代表（科目担当者が指名）が回収し、最寄りの事務室に提出することとした。

##### (4) 調査用紙（p.98 参照）

#### 2. 集計結果及び公表（p.66～93 参照）

集計は前年度及び今後のデータの比較分析を考慮し、クラス別及び次の分類別に行った。

US 科目全体、玉川教育・FYE 科目群「一年次セミナー101」、「一年次セミナー102」、人文科学科目群、社会科学科目群、自然科学科目群、学際科目群、言語表現科目群
---

また、集計結果は、クラス別集計については科目担当者にのみフィードバックし、上記 8 分類についてはその平均値を学内のみを対象にホームページで公表している。

## 平成26年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

### US科目全体

回答数(全体): 10067

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.6	26
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.3	78

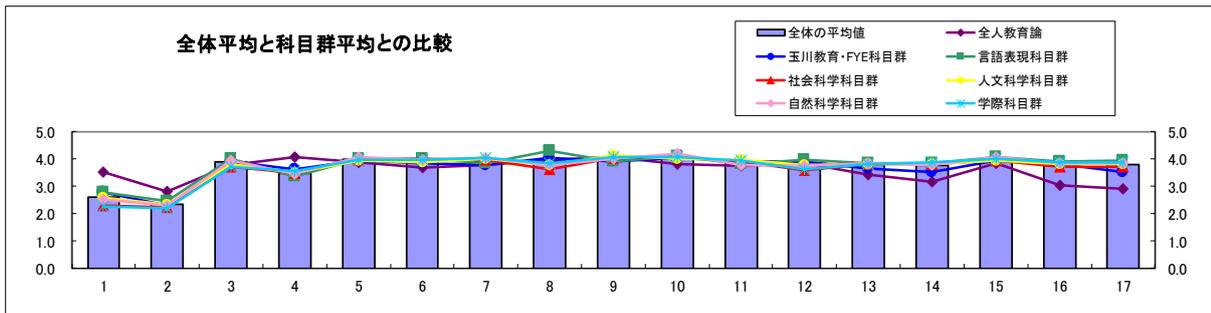
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.9	10
	4 シラバスは受講に役立った。	3.5	19

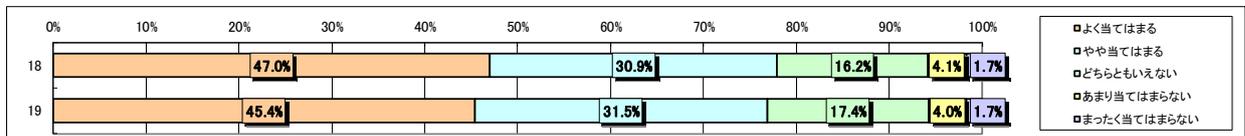
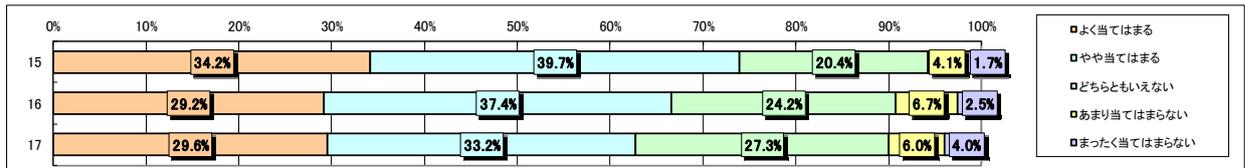
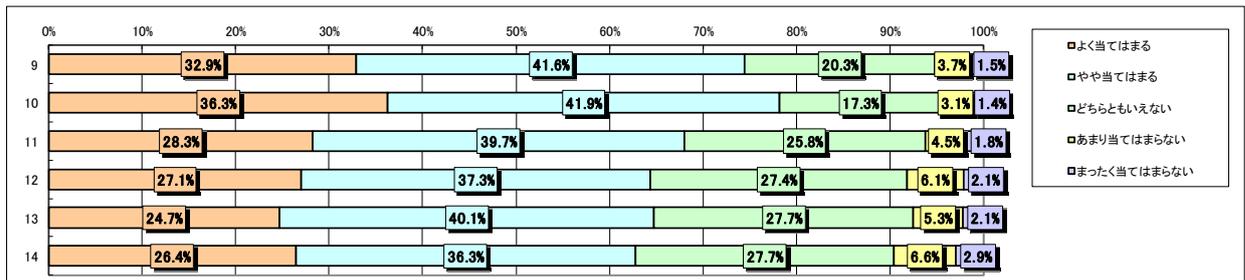
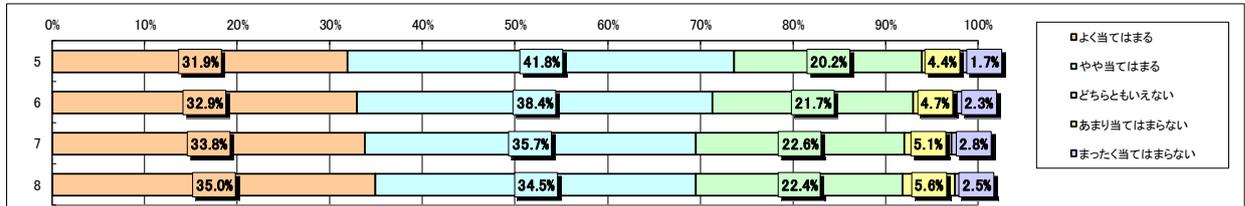
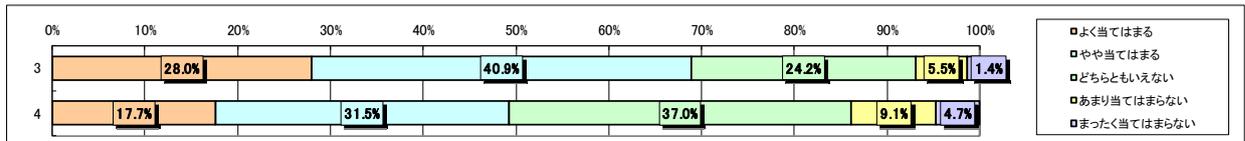
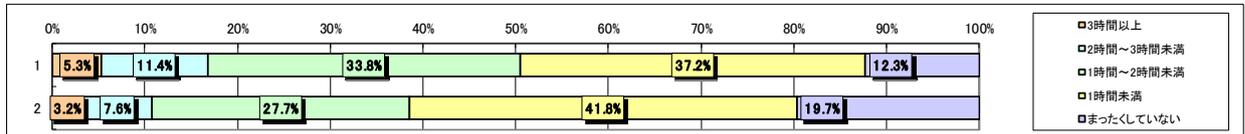
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	14
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	3.9	10
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.9	23
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	8

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	5
	10 基本的知識が得られた。	4.1	6
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	19
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	13
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	12
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	29

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	15
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.8	11
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.8	38

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	53
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.1	48





◎平均値について  
質問項目毎に「無効」を除いた平均値  
平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数  
小数点第2位四捨五入

◎無効数について  
無答、複数回答、記入ミスの数

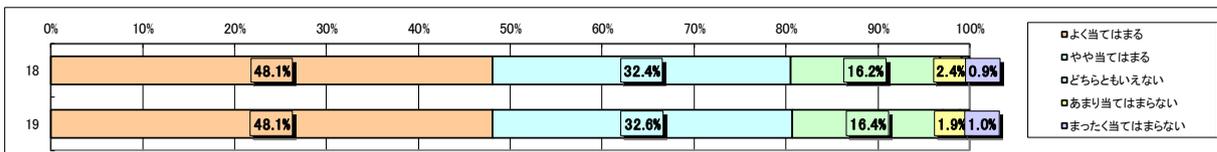
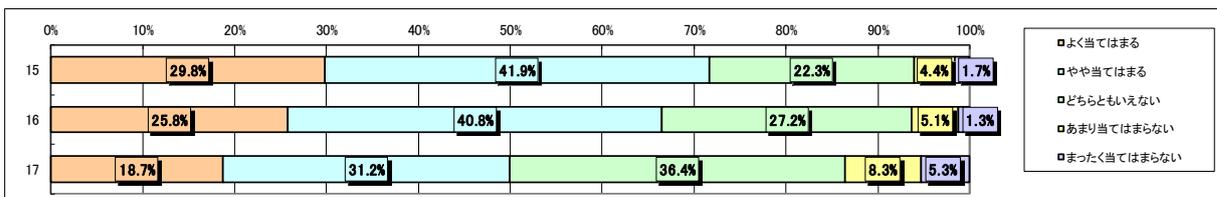
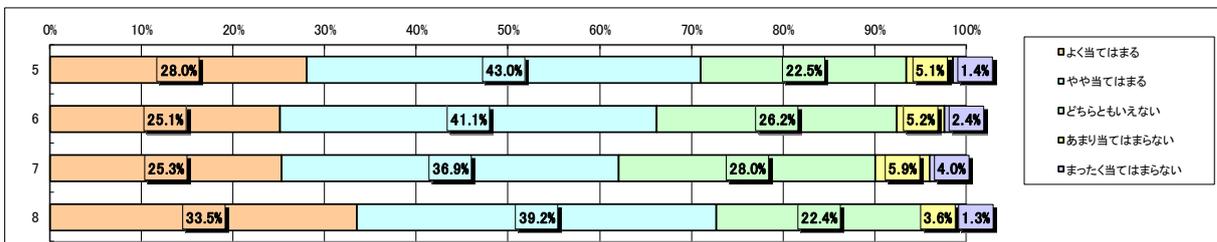
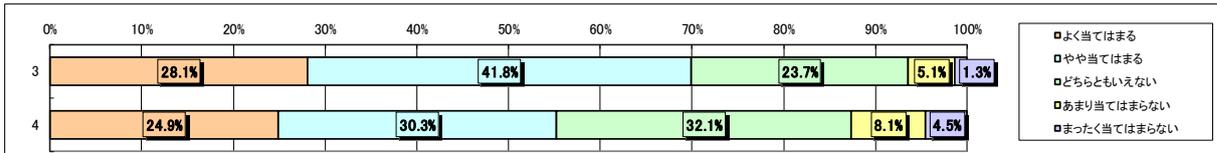
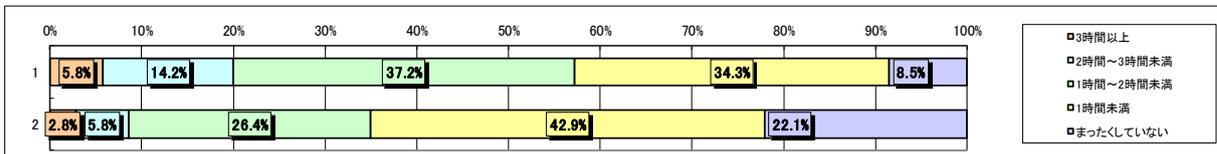
平成26年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 玉川教育・FYE科目群 一年次セミナー 101

回答数(全体): 1742

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.7	2
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.2	7
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.9	0
	4 シラバスは受講に役立った。	3.6	2
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	3.9	1
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	3.8	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.7	8
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.0	1
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	3.9	0
	10 基本的知識が得られた。	4.0	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	0
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	2
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.7	1
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.5	3
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	3.9	3
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.8	0
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.5	2
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	6
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.2	5



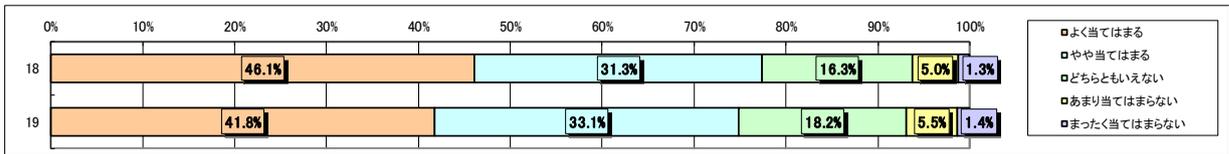
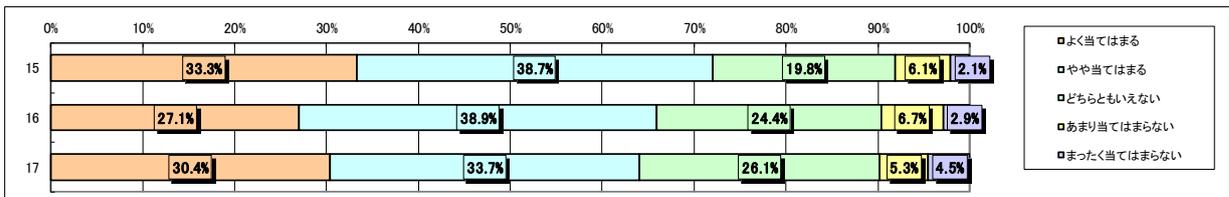
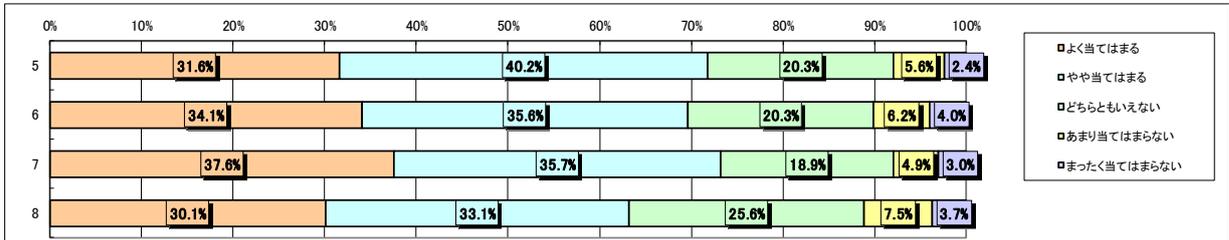
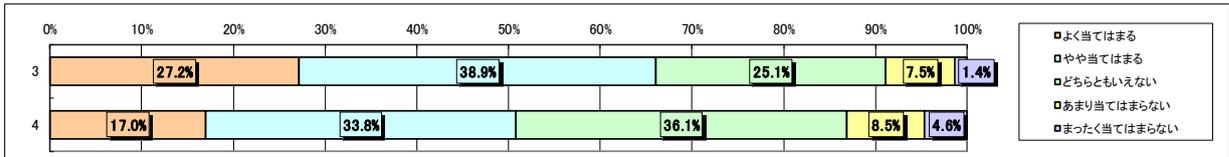
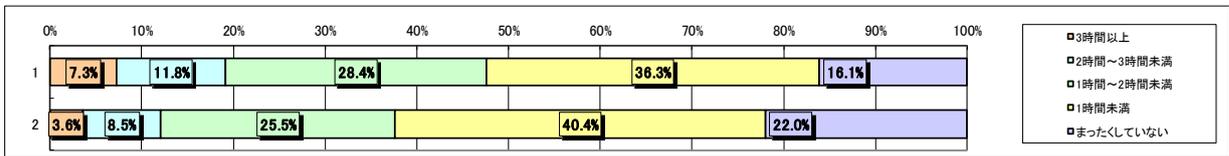
平成26年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 人文科学科目群

回答数(全体): 2000

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.6	7
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.3	18
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.8	4
	4 シラバスは受講に役立った。	3.5	4
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	3.9	5
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	3.9	3
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	3
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.8	3
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	2
	10 基本的知識が得られた。	4.0	2
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	4
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	3
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	2
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	6
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	3.9	4
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.8	4
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.8	11
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	14
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.1	13



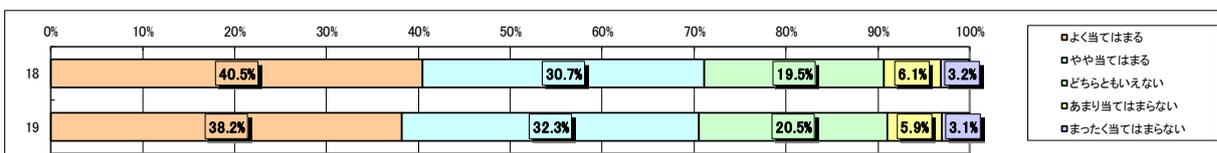
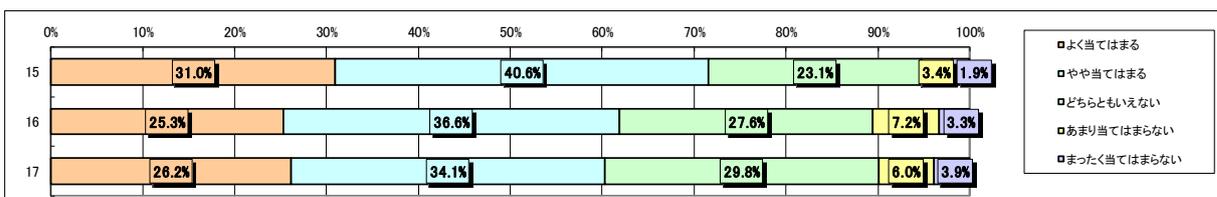
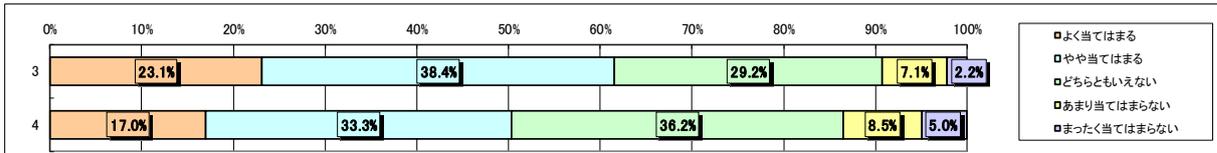
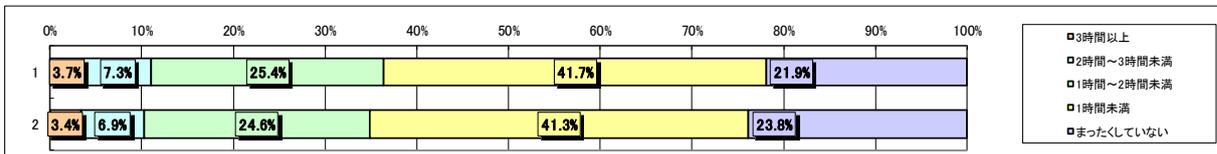
平成26年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 社会科学科目群

回答数(全体): 1672

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.3	6
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.2	14
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.7	0
	4 シラバスは受講に役立った。	3.5	4
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	1
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	3
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	3
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.6	2
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	1
	10 基本的知識が得られた。	4.1	2
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	6
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.6	4
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	3
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	4
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	4
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.7	3
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.7	9
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.0	9
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.0	8



平成26年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 自然科学科目群

回答数(全体): 1393

分野	この授業に対する学生の学習時間について		この授業の 平均値	無効 回答数
I	1	1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.5	6
	2	上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.3	15

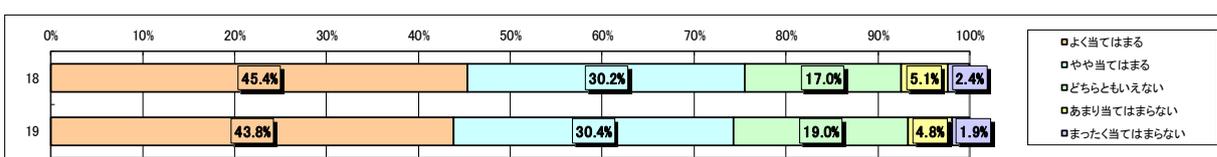
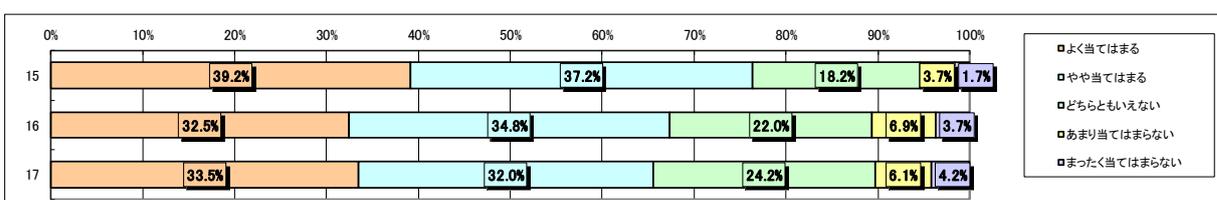
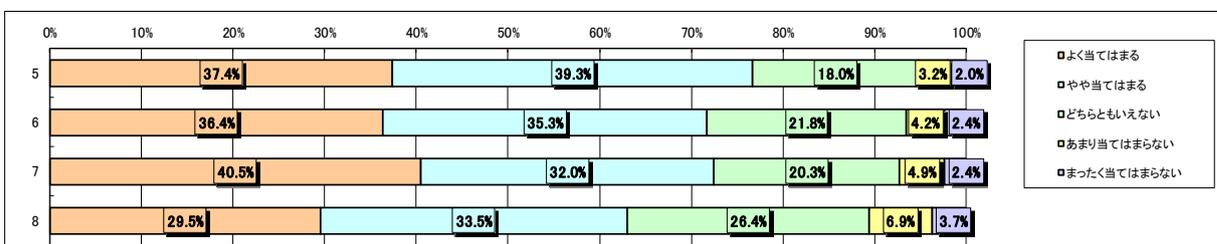
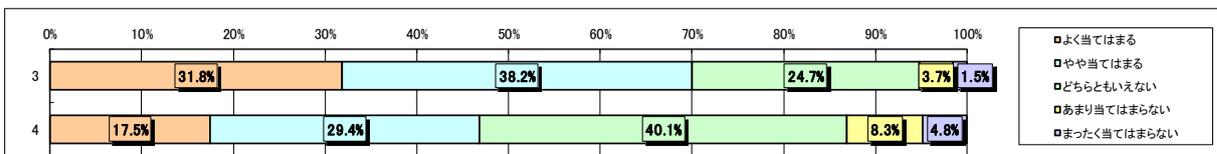
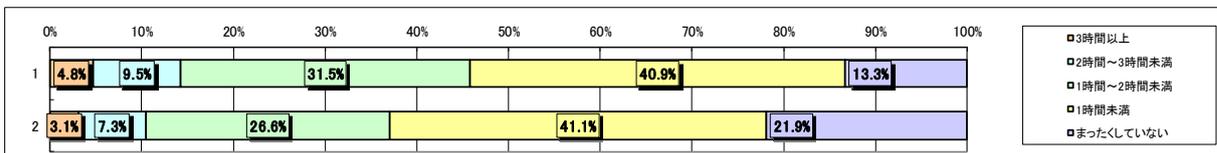
分野	この授業に対する学生の取り組みについて		この授業の 平均値	無効 回答数
II	3	この授業に積極的に参加した。	4.0	2
	4	シラバスは受講に役立った。	3.5	3

分野	この授業の進め方について		この授業の 平均値	無効 回答数
III	5	各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	2
	6	教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	1
	7	映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	2
	8	教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.8	1

分野	この授業を受けてみて		この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9	新しい考え方・発想に触れた。	4.0	2
	10	基本的知識が得られた。	4.2	2
	11	多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.8	4
	12	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	4
	13	科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	2
	14	学問的興味をかきたてられた。	3.8	6

分野	この授業を総合的に振り返って		この授業の 平均値	無効 回答数
V	15	授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	4
	16	授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	4
	17	この授業をほかの学生に薦めたい。	3.8	7

分野	その他		この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18	この授業の教室の大きさは適切であった。	4.1	7
	19	この授業の受講者数は適切であった。	4.1	6



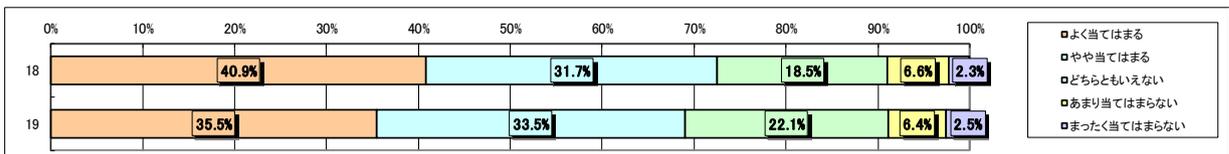
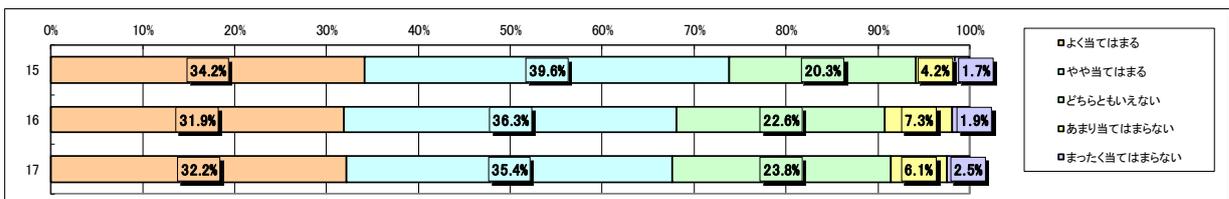
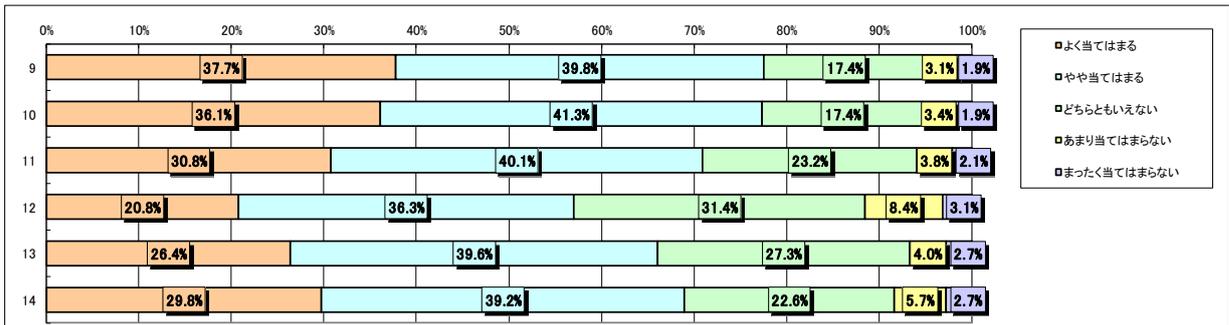
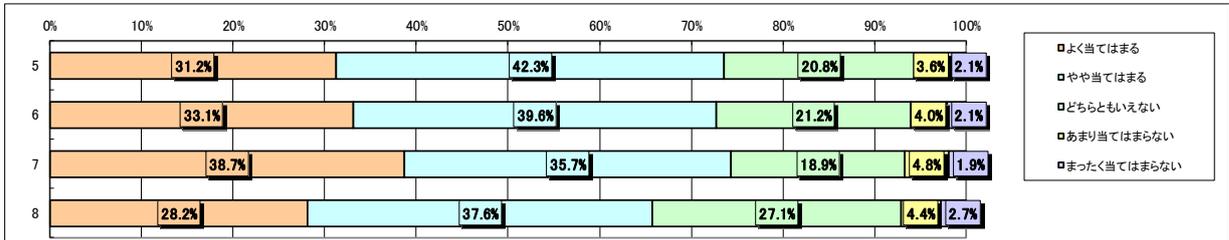
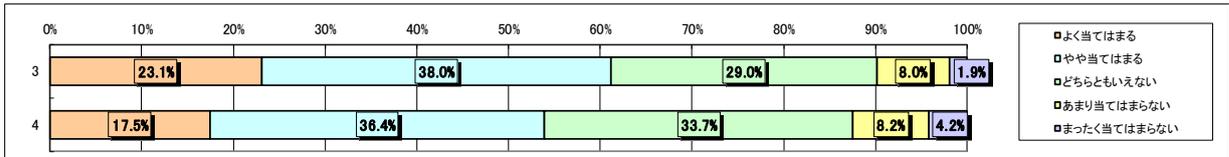
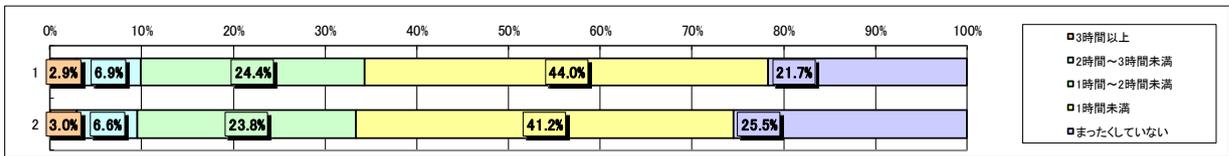
平成26年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 学際科目群

回答数(全体): 477

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.3	2
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.2	6
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.7	1
	4 シラバスは受講に役立った。	3.5	2
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	0
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	0
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	1
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.8	1
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	0
	10 基本的知識が得られた。	4.1	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	3
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.6	0
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	0
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	0
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	0
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	0
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	2
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.0	7
	19 この授業の受講者数は適切であった。	3.9	6



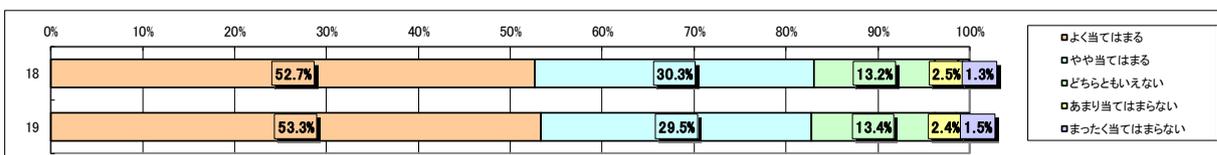
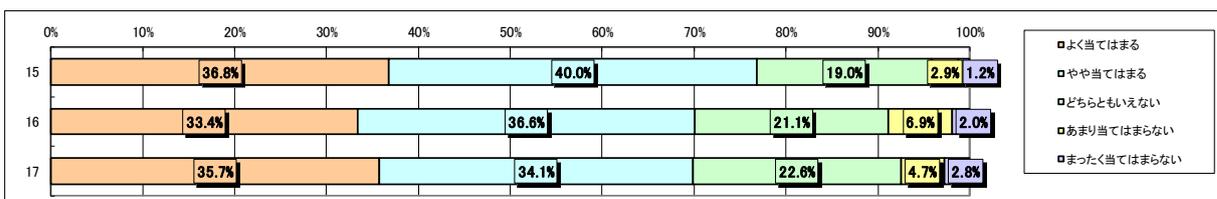
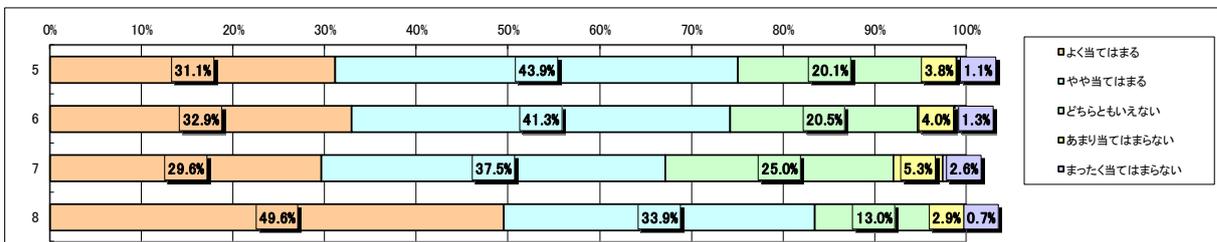
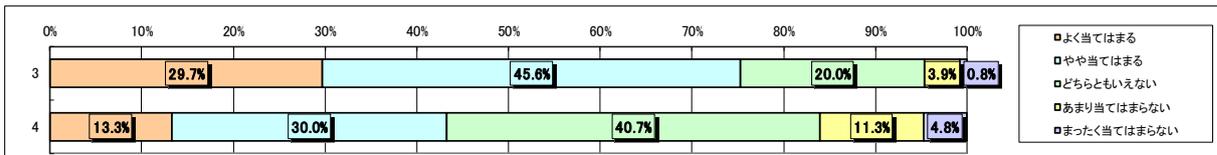
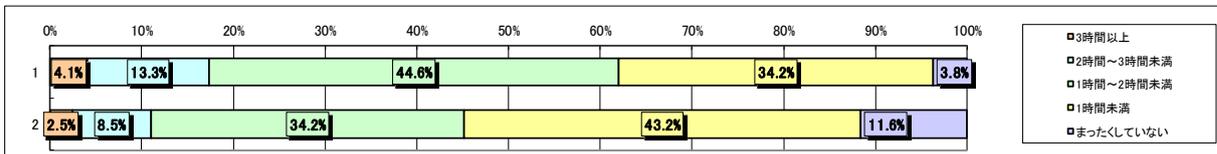
平成26年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 言語表現科目群

回答数(全体): 2615

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.8	3
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.5	18
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	4.0	3
	4 シラバスは受講に役立った。	3.4	4
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	5
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	2
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.9	6
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.3	0
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	3.9	0
	10 基本的知識が得られた。	4.1	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.8	2
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.0	0
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	4
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	8
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	0
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	0
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.0	5
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	10
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.3	10



平成26年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目全体

回答数(全体): 10613

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.6	31
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.4	89

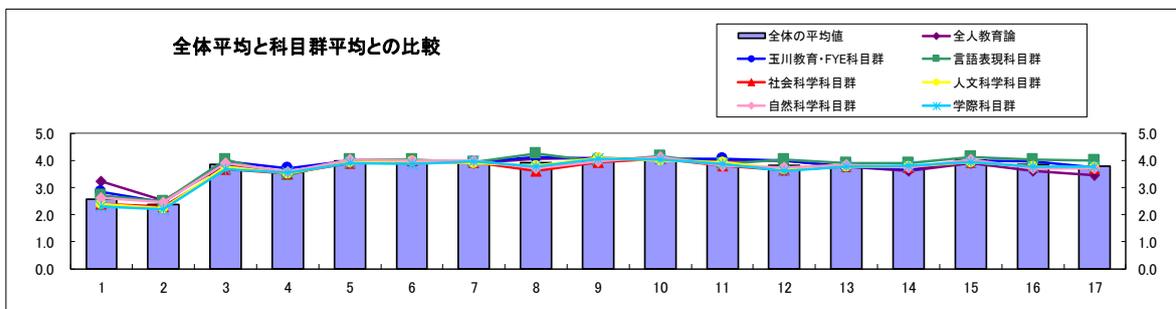
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.9	11
	4 シラバスは受講に役立った。	3.6	30

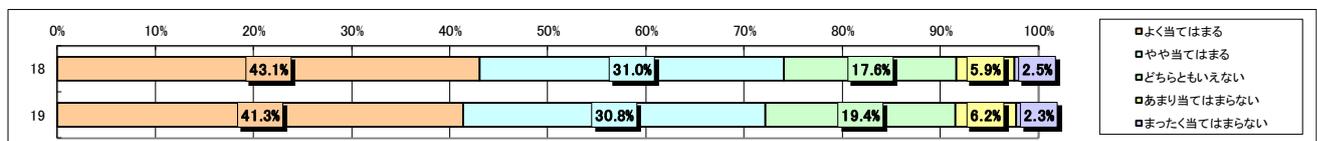
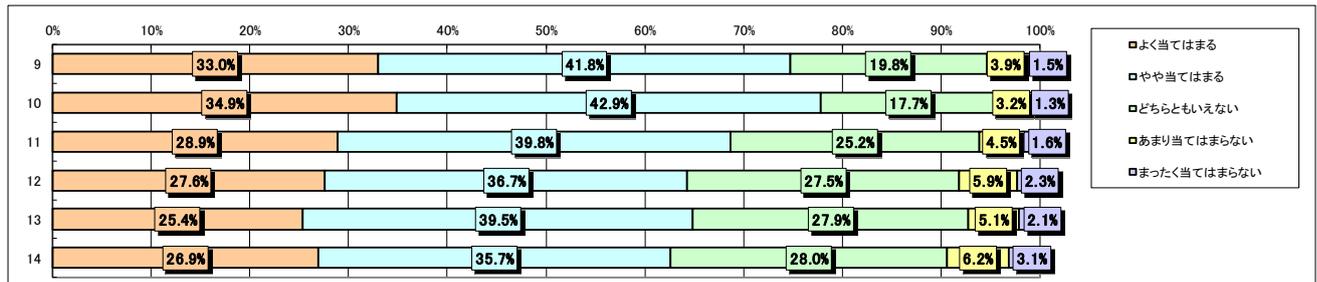
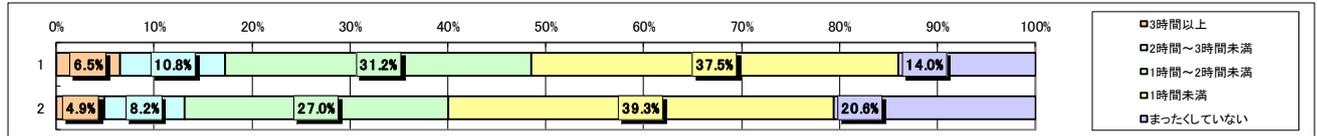
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	28
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	12
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.9	22
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	26

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	9
	10 基本的知識が得られた。	4.1	14
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	21
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	22
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	23
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	36

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	20
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.8	11
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.8	39

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.1	30
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.0	30





◎平均値について  
質問項目毎に「無効」を除いた平均値  
平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数  
小数点第2位四捨五入

◎無効数について  
無答、複数回答、記入ミスの数

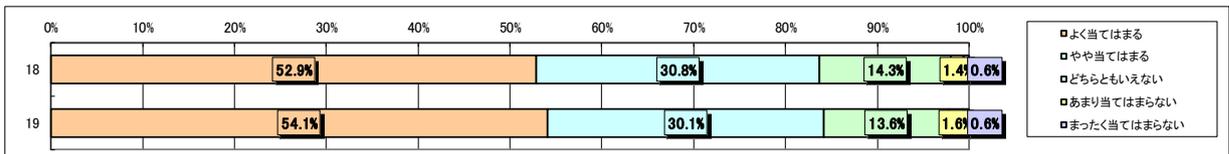
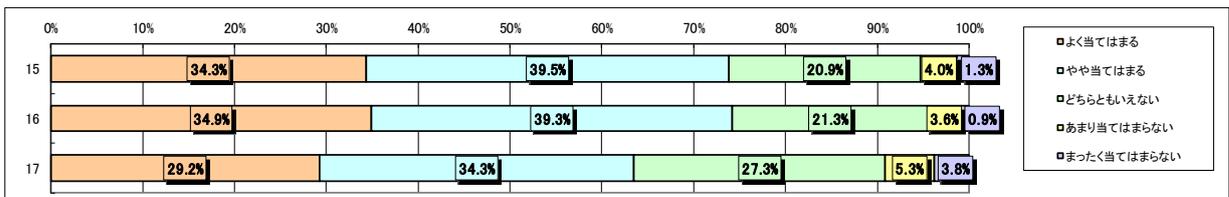
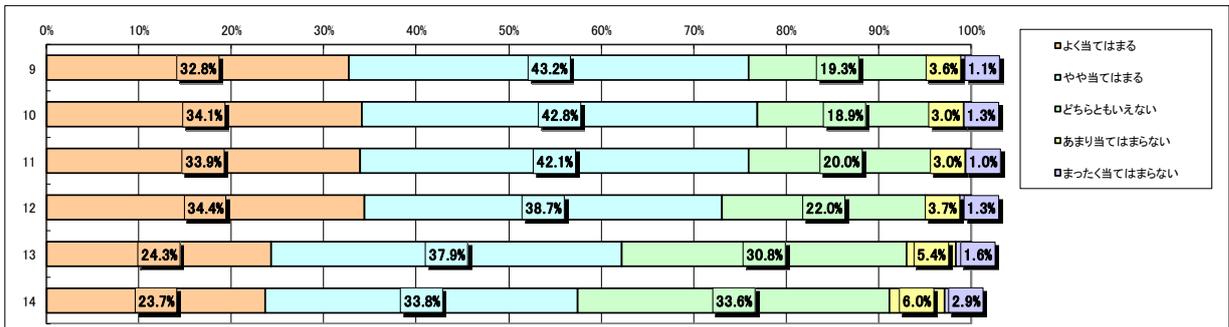
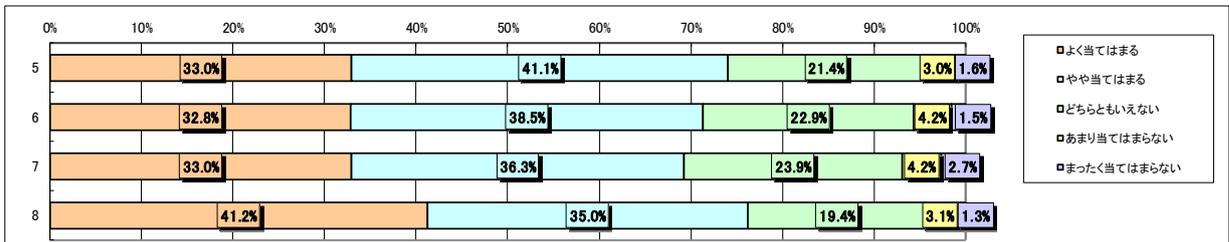
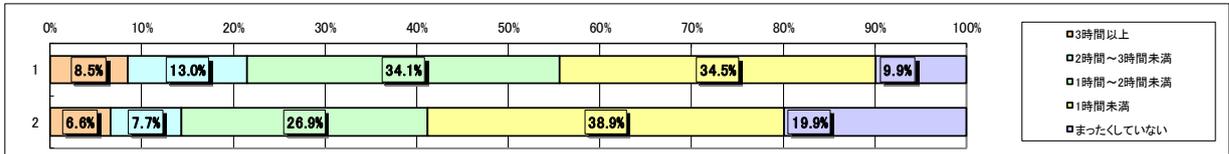
平成26年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 玉川教育・FYE科目群 一年次セミナー 102

回答数(全体): 1756

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.8	7
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.4	13
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	4.0	4
	4 シラバスは受講に役立った。	3.7	6
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	6
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	4
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.9	5
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.1	6
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	1
	10 基本的知識が得られた。	4.1	2
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	4
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.0	4
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	6
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.7	5
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	2
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.0	1
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.8	8
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	2
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.4	3



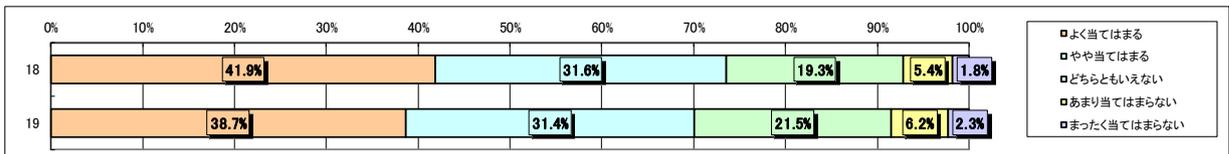
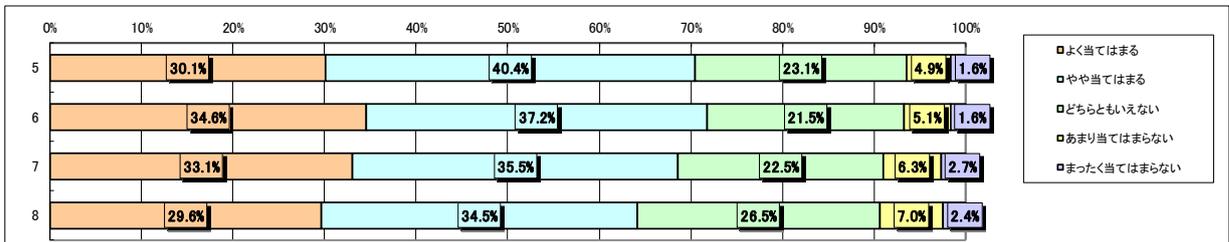
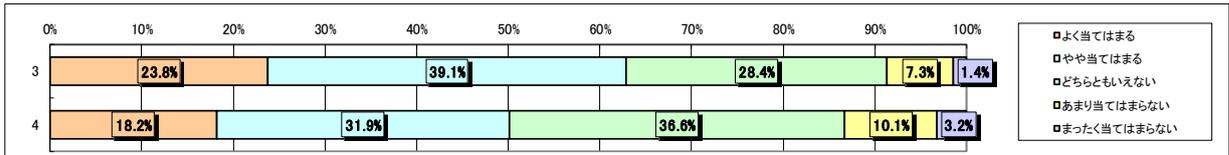
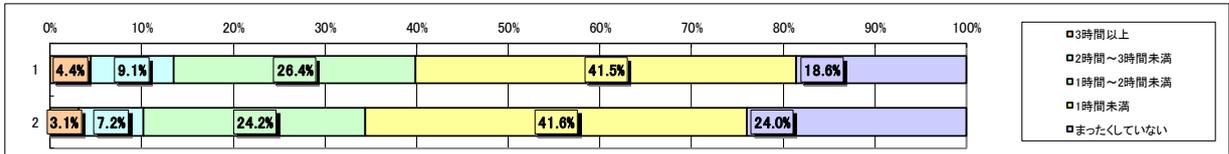
平成26年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 人文科学科目群

回答数(全体): 2019

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.4	5
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.2	19
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.8	0
	4 シラバスは受講に役立った。	3.5	5
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	3.9	5
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	2
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.9	2
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.8	7
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	1
	10 基本的知識が得られた。	4.0	1
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	4
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.7	5
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	5
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	8
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	3.9	7
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.8	3
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.7	8
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.1	7
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.0	7



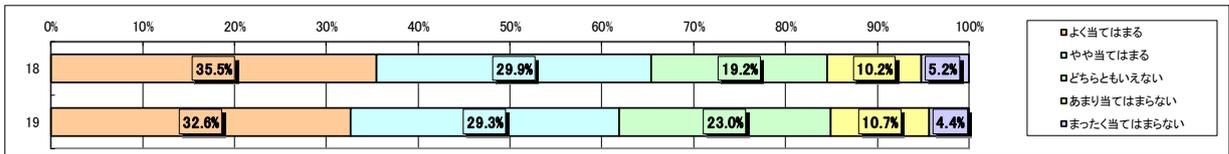
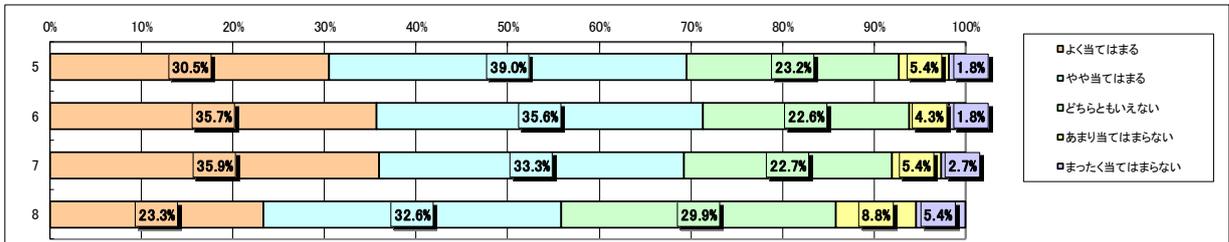
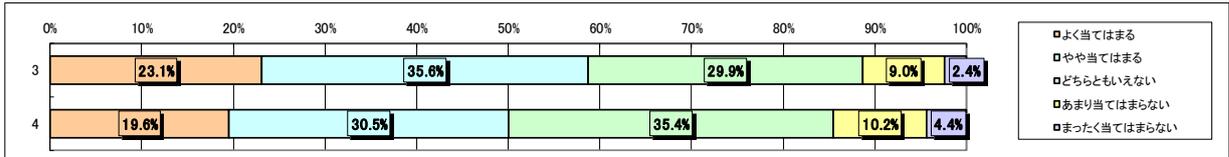
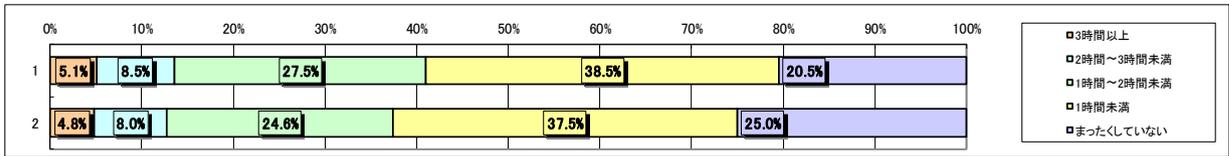
平成26年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 社会科学科目群

回答数(全体): 1823

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.4	3
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.3	17
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.7	4
	4 シラバスは受講に役立った。	3.5	8
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	3.9	5
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	2
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.9	3
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.6	6
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	3.9	1
	10 基本的知識が得られた。	4.0	3
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.8	3
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.6	4
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	3
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	9
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	3.9	5
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.8	1
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.7	7
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	3.8	8
	19 この授業の受講者数は適切であった。	3.7	8



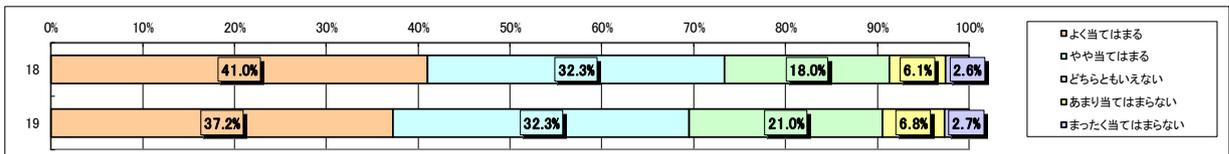
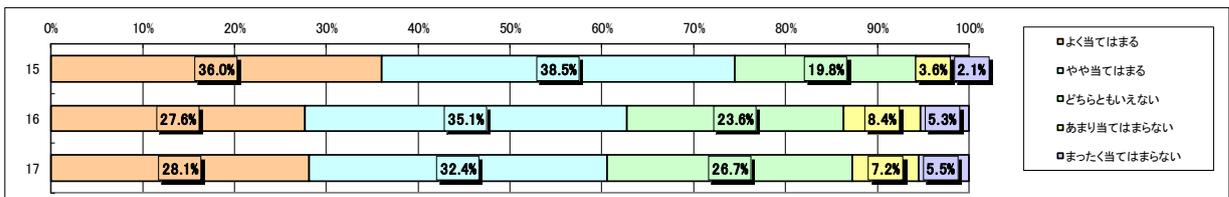
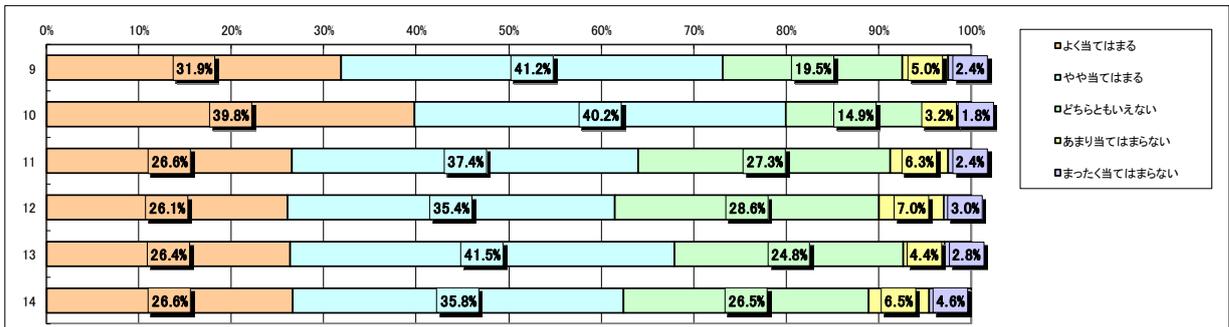
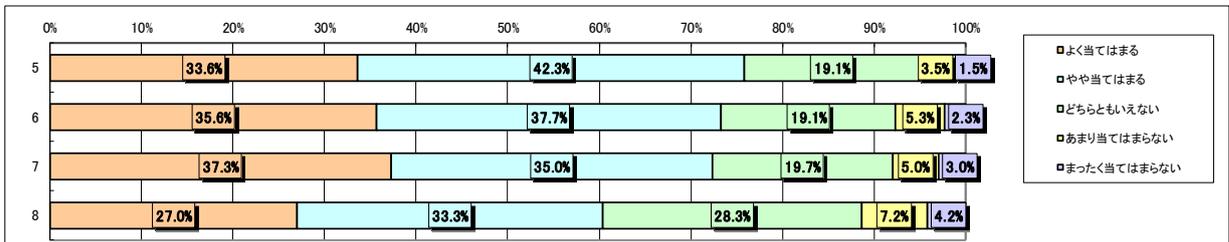
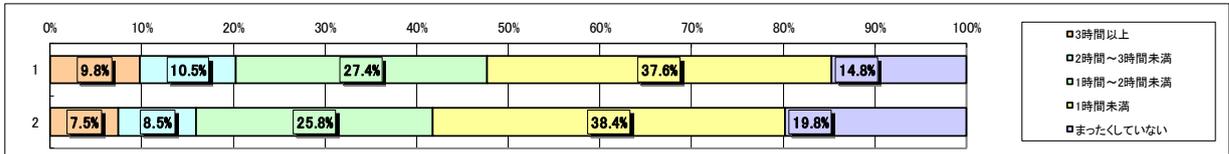
平成26年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 自然科学科目群

回答数(全体): 1758

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.6	4
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.5	12
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.9	2
	4 シラバスは受講に役立った。	3.6	7
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	5
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	3
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.7	1
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	1
	10 基本的知識が得られた。	4.1	3
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.8	2
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.7	4
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	2
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.7	5
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	2
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.7	2
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.7	4
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.0	3
	19 この授業の受講者数は適切であった。	3.9	2



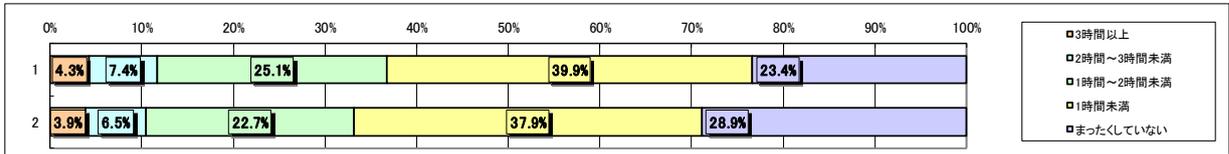
平成26年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 学際科目群

回答数(全体): 772

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.3	2
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.2	7
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	3.7	0
	4 シラバスは受講に役立った。	3.6	2
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	3.9	1
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	3.9	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	1
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.8	2
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	3
	10 基本的知識が得られた。	4.0	2
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	5
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.6	1
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	2
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	3
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	3.9	3
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.8	2
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.8	1
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	3.8	4
	19 この授業の受講者数は適切であった。	3.7	4



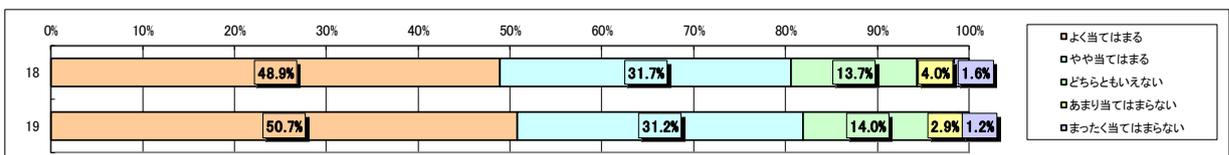
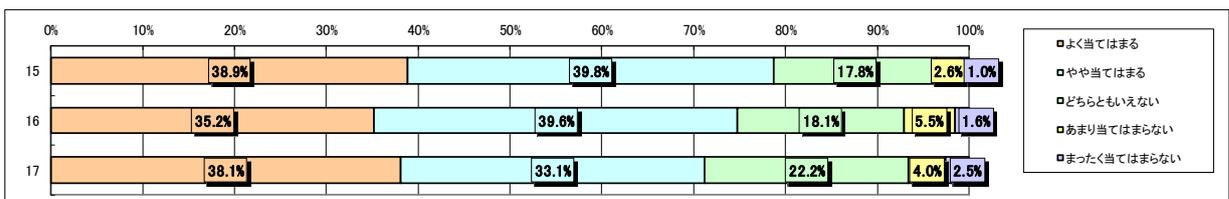
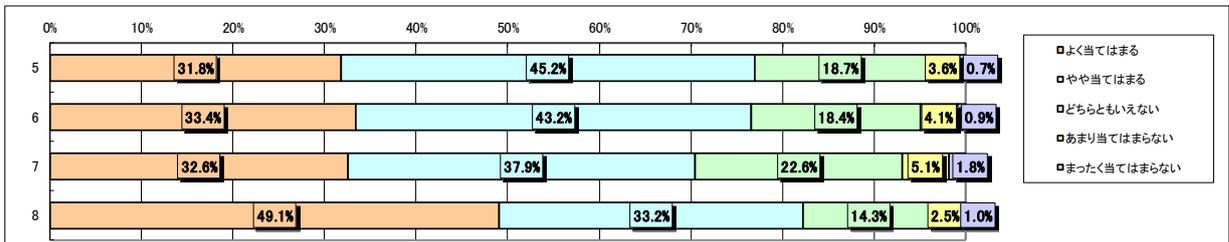
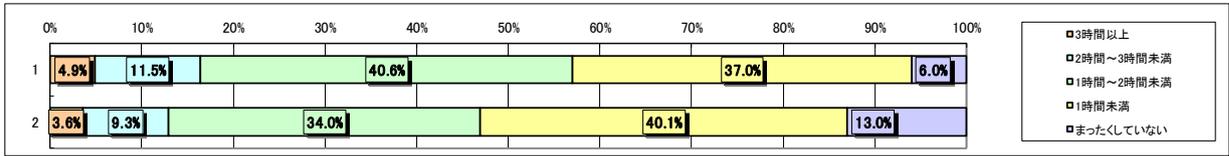
平成26年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 言語表現科目群

回答数(全体): 2012

分野	この授業に対する学生の学習時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.7	8
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.5	20
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	3 この授業に積極的に参加した。	4.0	1
	4 シラバスは受講に役立った。	3.4	2
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	4
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.9	7
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.3	3
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	1
	10 基本的知識が得られた。	4.2	2
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	3
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.0	3
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	4
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	4
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	1
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.0	2
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.0	8
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	5
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.3	4







## 参 考 资 料

## 参考資料 1. 大学 FD 委員会の議事内容

---

### 第 1 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 平成 26 年 5 月 9 日 (金) 17:30~19:00
- 場 所 : 大学研究室棟 B101 会議室
- 議 案 : (1) 平成 26 年度 会議日程に関する件  
(2) 平成 26 年度 コア科目/US 科目 学生による授業評価アンケート 実施に関する件  
(3) 平成 26 年度 FD 研修会等に関する件
- 報 告 : (1) 他大学等提供のシンポジウム等および資料提供について  
(2) 各学部 今年度 FD 活動計画および授業参観計画の提出について  
(3) 「平成 25 年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」の配付方法について

### 第 2 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 平成 26 年 7 月 11 日 (金) 17:30~19:00
- 場 所 : 教学事務棟 150/151 会議室
- 報 告 : (1) 平成 26 年度 各学部の FD 活動計画について  
(2) 平成 26 年度 各学部の授業参観計画について  
(3) 新規の FD 研修会等について

### 第 3 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 平成 26 年 11 月 14 日 (金) 17:30~19:00
- 場 所 : 教学事務棟 150/151 会議室
- 議 案 : (1) 平成 27 年度 新任教員研修会に関する件
- 報 告 : (1) 今後予定しているワークショップについて  
(2) 大学院の研究倫理教育をふまえた学士課程の対応について

## 第4回大学FD委員会

- 日時 : 平成 27 年 1 月 16 日 (金) 17 : 30 ~ 19 : 00
- 場所 : 教学事務棟 150/151 会議室
- 議案 : (1) 大学教育棟 2014 ラーニング・コモンズに関する件
- 報告 : (1) 大学教育再生加速プログラム 本学の取組について  
(2) 学生による授業評価アンケートについて  
(3) 教育課程 FD 研修について  
(4) 2 月 23 日 大学 FD・SD について

## 第5回大学FD委員会

- 日時 : 平成 27 年 3 月 20 日 (金) 15 : 00 ~ 16 : 00
- 場所 : 教学事務棟 150/151 会議室
- 報告 : (1) 今年度 各学部の FD 活動について  
(2) 来年度の FD 研修会等の日程について

## 参考資料 2. 「授業評価アンケート」用紙

記入日	月	日	回答者学年	①1年	②2年	③3年	④4年	⑤その他
-----	---	---	-------	-----	-----	-----	-----	------

授業科目名
-------

開講時限	曜日	限
------	----	---

担当教員名
-------

5	4	3	2	1
3時間以上	2時間<3時間未満	1時間<2時間未満	1時間未満	まったくしていない

### I. この授業に対するあなたの学習時間について

	5	4	3	2	1
1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	5	4	3	2	1
2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	5	4	3	2	1

5	4	3	2	1
よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない

### II. この授業に対するあなたの取り組みについて

	5	4	3	2	1
3 この授業に積極的に参加した。	5	4	3	2	1
4 シラバスは受講に役立った。	5	4	3	2	1

### III. この授業の進め方について

	5	4	3	2	1
5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	5	4	3	2	1
6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	5	4	3	2	1
7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	5	4	3	2	1
8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	5	4	3	2	1

		5	4	3	2	1
		よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない
IV. この授業を受けてみて						
9	新しい考え方・発想に触れた。	5	4	3	2	1
10	基本的知識が得られた。	5	4	3	2	1
11	多角的な視点から見る姿勢が身についた。	5	4	3	2	1
12	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	5	4	3	2	1
13	科目のもつ学問的意義を読み取れた。	5	4	3	2	1
14	学問的興味をかきたてられた。	5	4	3	2	1

V. この授業を総合的に振り返って

15	授業全体の目標・内容が明確であった。	5	4	3	2	1
16	授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	5	4	3	2	1
17	この授業をほかの学生に薦めたい。	5	4	3	2	1

VI. その他

18	この授業の教室の大きさは適切であった。	5	4	3	2	1
19	この授業の受講者数は適切であった。	5	4	3	2	1

その他、意見、感想など自由に書いてください。

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

## 参考資料 3. 玉川大学FD委員会規程

(平成 15 年 4 月 1 日 制定)

(平成 21 年 4 月 1 日 改正)

(目的)

**第1条** 玉川大学（以下「本大学」という。）教員の、教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的として、大学FD（ファカルティ・ディベロップメント）（以下「FD」という。）委員会（以下「本委員会」という。）を置く。

(組織)

**第2条** 本委員会は、委員長、委員、事務担当をもって構成する。

- 2 前項の委員長は教学部長とする。
- 3 委員長及び委員等は、毎年度当初、学長がこれを委嘱する。
- 4 委員長が必要と認めたときは副委員長を置くことができる。
- 5 本委員会には学部ごとの部会を設けることができる。
- 6 前項による部会は、各学部ごとに設け、部会のまとめ役及び委員は学部長が選任する。

(任期)

**第3条** 委員の任期は1か年とする。ただし、再任を妨げない。

(運営)

**第4条** 本委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。

2 委員長が必要と認めた場合は、委員以外の教職員の出席を求め、意見を聴取することができる。

(審議事項)

**第5条** 本委員会は、次の事項を審議する。

- (1) 教育研究活動改善の方策に関する事項
- (2) 初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関する事項
- (3) 学生による授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項
- (4) FDに関する教員への各種コンサルティングに関する事項
- (5) 教員のFD活動の指針に関する冊子及びFD活動報告書の刊行
- (6) 部会からの報告・審議に関する事項
- (7) その他FDに関連する事項

(部会)

**第6条** 各部会は、本委員会に検討・実施事項を報告しなければならない。

(答申)

**第7条** 委員長は、本委員会の審議結果を学長に答申しなければならない。

(実施事項の決定)

**第8条** 前条の答申内容の実施については、大学部長会の議を経て学長が決定する。

(実施事項の運用)

**第9条** 前条により決定した実施事項に関する実際の運用に関しては、教務委員会及び教育研究活動等点検調査委員会との調整を図りながら検討、実施するものとする。

(事務主管)

**第10条** 本委員会に係る事務主管は、学士課程教育センターとする。

附 則

この規程は、平成15年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成21年4月1日から施行する。

---

平成 27 年 5 月発行

発行 玉川大学 FD 委員会

〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1

tel : 042-739-8866 (教学部教育学修支援課)